

日本語の系統

—— 類型地理論的考察 ——

松本克己

キーワード：言語の遺伝子型、環太平洋言語圏、太平洋沿岸言語圏、環日本海諸語

内容

- 1 言語の系統的分類と比較方法の限界
- 2 言語の遠い親族関係と類型地理論
 - 2.1 流音のタイプ —— 複式流音と単式流音
 - 2.2 形容詞のタイプ —— 体言型と用言型
 - 2.3 名詞の数と類別
- 3 太平洋沿岸言語圏と環日本海諸語
 - 3.1 動詞の人称標示 —— 単項型～多項型～無標示型
 - 3.2 名詞の格標示 —— 対格型～能格型～中立型
 - 3.3 1人称複数の包含・除外の区別
 - 3.4 形態法上の手段としての重複
- 4 ユーラシア諸言語の系統分類と日本語の位置
- 5 付属資料：【別表：1～2】および【地図：0～9】

1 言語の系統的分類と比較方法の限界

日本語の系統をめぐってすでに百年以上、内外の多くの学者が議論を重ね、様々な説が提起されてきた。しかし今なお、最終的な結論に達するにはほど遠い状況にある。それは一体なぜだろうか。

一般に、言語の系統あるいは言語間の同系関係とは、人間の血縁に基づく親族関係と同じように、同じ親ないし先祖を共有するというような関係である。言語の場合、その先祖に当たるものが「祖語」、同じ祖語を共有すると見られる諸言語の総体が「語族」、そのような関係にある言語同士が「同系語」と呼ばれる。

現在、数にして6千を超えると見られる世界諸言語の多くは、このような同系関係という観点から、かなり限られた数の語族にまとめられている。例えば、現在アフリカ大陸で話されている数にして2千余りの言語は、最終的には、「アフロ・アジア」、「ナイル・サハラ」、「ニジェル・コンゴ」、「コイサン」と呼ばれる四つの語族にまとめられ、従って、少なくとも現在の通説では、アフリカには日本語のような系統不明な言語は存在しないことになっている¹。

一方、その言語数において世界最大と見られるユーラシア大陸は、アフリカほどすっきりとした形では分類できないけれども、そこで話されている大部分の言語は10個ほどの語族の中に組み込まれている。すなわち、アフロ・アジアの一分派とされる「セム語族」、ヨーロッパからインド亜大陸まで広範な分布を見せる「インド・ヨーロッパ（印欧）語族」、南インドを主な分布圏とする「ドラヴィダ語族」、ユーラシア西北部に広がる「ウラル語族」、その東方に接する「アルタイ語族」、ヒマラヤ地域から東南アジア、中国大陸に広がる「シナ・チベット語族」、中国南部からインドシナ半島に及ぶ「ミャオ・ヤオ語族」、「タイ・カダイ語族」、同じくインドシナ半島からインド東部に散在する「オーストロアジア語族」、台湾からインドネシア、そこから南洋諸島まで広大な分布を見せる「オーストロネシア語族」などがそれである。

この中で、ヨーロッパ北部からシベリア東部まで北方ユーラシアのほぼ全域に広がるウラル諸語とアルタイ諸語は、かつては「ウラル・アルタイ語族」として系統的なまとまりをなすものと見られ、また、日本語や朝鮮語もこの大語族の一員、少なくともその遠い同系語とする見方が、少なくとも戦前まで、日本の学界では有力視されてきた。しかしこの学説は、これらの言語の本格的な比較研究が進むにつれて、次第に崩れ去った。すなわち、この中のフィノ・ウゴルとサモイェード諸語は、ほぼ確実に同系関係に基づく語族を形成することが明らかにされたけれども、残されたアルタイ系のチュルク、モンゴル、ツングースという三つの言語群がは

1 現在、アフリカ諸言語の系統的分類は Greenberg 1966 の4分類説にほぼ準拠している。ただしこの中で、北のアフロ・アジアと南のニジェル・コンゴという二つの大語族の間で複雑な分布を見せるナイル・サハラ諸語は、内部的な言語差が著しく、語族としてのまとまりはかなり希薄である。一方、東アフリカに孤立する一部の言語を除き、大部分が南アフリカのカリハラ砂漠とその周辺地域に残存するコイサン諸語は、コイ (Khoe) 系の中央群 (ホッテントット語を含む) とその周辺に分布する北部及び南部群の間で言語的隔たりがかなり大きい。もしこれら諸言語が単一の語族を形成するとすれば、この語族本来の姿は中央群の諸言語により多く保存されていると見てよいだろう。

たして同じような同系関係によって結ばれるかどうか、極めて疑わしくなったからである。

本格的なアルタイ比較言語学が誕生し、それによって日本語の系統問題にも最終的な解答が与えられるかもしれない、という漠然とした期待が寄せられたのは 20 世紀の半ば過ぎだった。しかし、フィンランドの言語学者ラムステッドの没後に公刊された『アルタイ言語学導論』(Ramstedt 1952-1966) の後を承けて、旧ソ連のアルタイ学者ニコラス・ポッペが取りかかった「アルタイ語比較文法」は、その第 1 巻に当たる『音論』(Poppe 1960) が出版されただけで、後が続かなかった。それ以後、アルタイ比較言語学あるいは比較文法と銘打った書物は、管見の限り、一度も世に出ていない。これをもって直ちにアルタイ比較言語学の挫折と見るのはやや性急かもしれないが、その後の日本語の系統をめぐる研究が、それ以前に比べてかえって混乱の度を深めたかに見えるのは、「ウラル・アルタイ説」あるいはそれを継承した「アルタイ説」の行き詰まりと決して無関係とは言えない²。

ところでユーラシアでは、以上に述べた主要な語族に含まれない孤立したつまり系統不明な言語ないし小言語群は、決して日本語だけではない。例えば、ヨーロッパのフランス・スペインの国境地帯、ピレネー山脈の西方で話されているバスク語や、パキスタン領カラコルム山系の谷間に孤立するブルシャスキー語は、そのような孤立言語の典型である。また数多くの小言語が密集するコーカサス地域は、通常、北東、北西、南の三つのグループにまとめられ、それぞれが系統的まとまりを構成すると見られているが、その中で最も複雑な北東コーカサス諸語の内部的な関係は必ずしも定かでない。

現在、ヨーロッパとアジア内陸部で系統不明とされる言語はごくわずかであるが、古代世界にはもっと多かった。例えば、楔形文字の記録で知られる古代オリエン特諸語の中で、シュメール語、フルリ語、ハッティ語、エラム語などがそれであり、また古代イタリアのエトルリア語も同じような孤立的言語であった。

一方、日本語が位置する北部ユーラシアの太平洋側に目を向けると、日本列島とその周辺には、系統関係の定かでない言語が数多く集まっている。すなわち、日本語のほか、アイヌ語、朝鮮語、その北方アムール下流域と対岸のサハリン島で話されているギリヤーク(別名ニヴフ)語、さらにその北方カムチャツカ半島からチュクチ半島にかけて分布するチュクチ・カムチャツカと呼ばれる小言語群³、またここからベーリング海峡を挟んでアラスカ、カナダの極北圏に広がるエスキモー・アリュート諸語も、同じように孤立した小言語群である。

現存するアフリカとユーラシアの大部分の言語が比較的少数の語族にまとめられるのに対して、残りの地域、すなわちオセアニアのニューギニアとオーストラリアそして南北アメリカ大陸では、言語の分布とその系統関係はかなり様相を異にする。というのは、これらの地域ではアフリカやユーラシアに見るような広域に分布する大規模語族の存在は稀で、日本列島とその周辺部のように、系統的に孤立した言語や小言語群が比較的狭い地域に密集するという状況が

2 日本語の系統論と密接に関連する「ウラル・アルタイ説」とそれに対する批判的検討について、詳しくは松本 2000a、また日本語の系統をめぐる戦後 50 年間の研究史のあらましについては、松本 2001 を参照されたい。

3 この言語群の中でもカムチャツカ半島南部に残存するカムチャダル(イテリメン)語は孤立的様相が強く、チュクチ・コリヤーク諸語とは別系統の可能性もある。

むしろ普通である。例えば、白人到来前におそらく 500 以上を数えた北米の先住民諸言語は、そのおよそ 3 分の 2 がロッキー山脈以西（面積にして北米全土の 4 分の 1）の地域に位置し、その中でも特にカナダのブリティッシュ・コロンビア州から合衆国のカリフォルニア州に至る太平洋に面した比較的狭い帯状の地域は、孤立的な小言語の密集地帯として知られている。同じような小言語の密集は、南米大陸のとりわけアマゾン地域、ニューギニアの内陸部、またオーストラリアではキンバリー高原からアーネムランドに至るこの大陸の北西部などに見られる。このように、言語の分布や系統関係の在り方は、アフリカ・ユーラシア（つまり旧大陸）とそれ以外とは大きく異なり、日本語のような系統的に孤立した言語の存在は、アメリカ大陸やオセアニアではむしろ常態といってよい。これはなぜだろうか。

一般に、二つまたはそれ以上の言語が同系とされるのは、それらの言語の文法構造や基礎的語彙の中に何らかの類似が認められ、しかもその類似が単なる偶然や借用によるものではないことが確認された場合である。比較言語学で特に重視されるのは、基礎的な語彙や形態素に見られる類似である。真に同系関係にある言語間では、そのような要素は単なる見かけ上の類似ではなく、「音法則」と呼ばれるような規則的な対応をなして現れる。これが「同源語」と呼ばれるもので、この種の同源語の共有が言語間の同系性の最も有力な証拠とされてきた。しかし、同系関係にある言語間には常にこのような同源語の存在が確認できるかという点、決してそうではない。人間の血縁関係と同じように、言語間の同系関係も時の経過と共に希薄化をまぬがれ得ないからである。

この事実を最もはっきり示してくれたのは、今から半世紀近く前に歴史言語学の新しい方法として登場した言語年代学である。

言語年代学の基本的な想定によれば、どんな言語にもほぼ共通する「基礎語彙」は、時代の変化に対して比較的安定性が高く、しかもその変化の速度がほぼ一定している。この方法を初めて提唱したアメリカの言語学者スワデシュによれば、基礎語彙の残存率は、200 語規模の場合、千年につき概略 81%（つまり消失率で 19%）とされた。ここから逆に、同系関係にある（と見られる）言語間で共有された基礎語彙の割合を基にして、言語間の同系性の度合い、すなわち共通の祖語から分岐した後の年代が算定できると考えられた。

言語年代学の基本的想定にはいろいろな問題が含まれているけれども、言語の同系性の一番の拠り所とされる基礎語彙が時と共に失われ、それによって必然的に同系関係そのものが希薄になるという事実を明確な形で示した点で、重要な意味がある。つまり、語彙項目や形態素の類似に手掛りを求める伝統的な比較言語学的手法には、明らかに限界がある。スワデシュの算定式によれば、基礎語彙の共有率は分岐後 6 千年で 10% を割り、1 万年でほとんどゼロに近づく⁴。

4 保存率 81% として、千年ごとの基礎語彙（2 百語）の共有率を算定すれば次のようになる。

年代 (世紀)	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100
保存率=81%	66%	43%	29%	18%	12%	8%	5%	3%	2%	—

ちなみに、印欧諸語の場合で見ると、ギリシア語、サンスクリット語、ラテン語など代表的な古代語の間では基礎語彙の共有率は大体 30% 前後、最もかけ離れた現代語の場合、例えば英語と現代ペルシア語、現代ギリシア語とヒンディー語、スペイン語とベンガル語などの間では 12~14% となっている。なお後者の場合、語

一方、言語間で意味と音形が偶然に類似するいわゆる「疑似語」は、どんな言語でも5%位は必ず見られ（音韻体系の類似した言語間では、その数値はさらに高まる可能性がある）、基礎語彙の共有率が10%を割るような場合には、真の同源語と見かけだけの疑似語を区別することがほとんど不可能になる。具体的には、比較方法によってたどれる言語間の同系関係は、せいぜいで5~6千年の年代幅に限られるとあってよいだろう。比較方法に限らず、従来の歴史言語学の方法では人類の言語史を1万年を超えるような過去まで遡ることは到底できないのである⁵。

ところで、近年目覚ましい進展を見せる遺伝子系統論の分野では、遺伝子多型の分析を通じて人種、民族、種族といった様々なヒトの集団間の遺伝的な距離を測定し、それに基づいて世界の諸集団間の系譜的關係を明らかにしようとする試みが盛んである（例えば、Cavalli-Sforza et al. 1994, Brenner & Hanihara (eds.) 1995 など）。このような研究の中でとりわけ注目を浴びたのは、母親だけを通じて遺伝するミトコンドリアDNAの系統をたどって、現代人類のすべての遺伝子が今から15万年ほど前の一つの共通の祖先（いわゆる“ミトコンドリアのイブ”）に遡ることが明らかにされたことである⁶。その後同じような研究は、男性だけから伝わるY染色体遺伝子についても進められており（Cavalli-Sforza 2000: 80f.）、しかもその共通祖先、いふなれば“Y染色体のアダム”の年代を（アフリカを出た現代型人類に限れば）今からおよそ6万年前とする説も提起されている（Wells 2002: 54f.）。

かつて古典的な人類学で、ニグロイド、コーカソイド、モンゴロイドというようないわゆる人種の起源は、百万年の奥行きをもつ原人（*homo erectus*）の段階まで遡り、従って人種間の隔たりは極めて深刻なものと思われてきた（例えば、Coon 1962）。しかし、最近の遺伝子系統論はこのような定説を完全に覆し、現代型人類の起源と地球上におけるその拡散は、今から10万年前後の年代幅で計られるという見方がますます有力となってきたのである。

最近の遺伝子系統論におけるこのような知見は、言語学にとっても重大な意味をもっている。第一に、最近ようやくその研究が本格的になった人類言語の普遍的特性というものが、単に言語理論の基盤としてでなく、人類言語の共通遺産という形で歴史的に位置づける可能性が出てきたことであり、さらにまた、現生人類のミトコンドリアDNAやY染色体の共通起源が突き止められたのと同じように、現在地球上で話されているあらゆる言語が、従来の語族という枠を超えて、単一の起源、いふなれば「人類祖語」というようなものに遡り、その基本的な性格を輪郭づける、つまり人類祖語の再建というような試みも単なる絵空事とは言えなくなったことである。このような形で構想された人類言語史の枠組みから眺めると、これまで諸言語の系統的区分における最大の単位とされてきた語族というものは、年代的にそれほど奥行きが深い

5 形の外見からだけでその同源性を確認することは極めて難しくなる。なお、印欧古代諸語の基礎語彙共有率については、Tischler 1973, 主にヨーロッパの現代諸語については、Dyen et al. 1992 を参照。上述の現代諸語の算定は筆者自身による。

印欧比較言語学の実績から見ると、比較方法が最も有効に適用できるのは、基礎語彙の共有率が30~20%、つまりスワデシュの算定式では分岐後3~4千年程度と同系諸言語に対してである。

5 この問題について詳しくは松本 1996: 14ff. を参照。ちなみに、言語年代学がそこからヒントを得た放射性炭素測定法は、現在では4万年余りの年代幅まで測定可能となっている。

6 ミトコンドリアDNAの年代測定の問題に関してはHorai 1995 参照。

ものではなく、おそらく5万ないし10万年に及ぶ人類言語史の全体から見れば、ごく最近の産物にすぎないと言わなければならない。

実際に、これまで研究が比較的行き届いているインド・ヨーロッパ語族、ウラル語族、オーストロネシア語族、シナ・チベット語族などユーラシアの主要な語族について見ると、それらの推定された祖語の年代は、大体今から5～6千年前あたりのところに落ち着くようである。これは先に述べた比較方法によって遡り得る言語史のほぼ上限の数値に近いものであるが、同時にまた、人類史の中で、このような大規模な語族を生み出し得る社会的・経済的諸条件の出現した時期とほぼ一致している。つまり、現代型人類の出現以降、その歴史の大部分を占めてきた長い氷河期が終り、今から1万年余りに始まった完新世と呼ばれる温暖な後氷期に入ってから、農耕、牧畜、金属器の使用などによって特徴づけられるいわゆる新石器革命がアフリカやユーラシアの各地で本格的に始まったのが大体この時期である。人類史上に画期的なこの技術革新は、これらの地域に急速な人口増加をもたらし、これによって一部の集団の急激な膨張とそれに伴う居住地の移動や拡張が行われた。アフリカやユーラシアに出現した大規模な語族の出現は、このような農耕・牧畜の発達と密接に結びついている。

とすれば、逆にオセアニアやアメリカ大陸でこのような大語族が比較的稀なものも自ずから理解できよう。あらゆる人類集団が何万年もの間続けてきた狩猟・採集に依存する農耕前の社会では、例えば比較的近年まで北米北西海岸やオーストラリア大陸で見られたように、同じ言語を話す集団の規模はせいぜい数百人か多くても数千人程度であり、自然資源に恵まれた環境では、このような言語集団が比較的狭い地域に密集するという状況が現れる。これらの言語集団は相互に接触を続けながら長期にわたって共存し、その間にゆるやかな分岐と収束を繰り返す。このような場合、言語間の関係はシュライヒャー流の系統樹で表されるような単純な枝分かれの図式では捉えられない。ニューギニア内陸部、オーストラリア北部、北米太平洋岸の諸言語の系統関係が明確に捉えられないのは、農耕前の社会における言語のむしろ自然な在り方に由来しているのである⁷。

日本語の系統が不明とされ、従来の語族という形での分類ではどこにも帰属できないということは、すでに述べたように、日本語の系統関係が比較方法で手の届く5～6千年という年代幅をおそらく超えているからである。見方を変えれば、日本語やその周辺の諸言語は、今から5～6千年前以降に出現した新しい大規模語族の拡散によってユーラシアの内陸部ではほとんど失われてしまった古い言語層の数少ない、その意味でまた貴重な生き残りと見ることもできよう。言語のこのような年代的に奥行き深い系統ないし親縁関係は、どのような方法で探り出すことができるだろうか。

7 言語の発達に見られるこのような違った二つの在り方は、伝統的な歴史言語学で「系統樹説」と「波動説」あるいは「語族」(Sprachfamilie)と「言語連合」(Sprachbund)というような概念で捉えられてきたものであるが、今後は人類言語史の全体を視野に入れたもっと巨視的な捉え方が必要である。農耕前の社会において小言語の蟻集がむしろ常態であるとする見方は、日本では宮岡伯人氏によって早くから提起され(例えば宮岡(編)1992: 49ff.)、また、最近オーストラリアの言語学者ディクソンも、このような視点から linguistic equilibrium (小言語群の安定した共存状態)とそれを破る punctuation (大言語の急激な分岐と拡散)という言語発達の二つの局面を対置させ、古典的な比較方法が適用できるのは後者の場合に限られるとしている(Dixon 1997)。

2 言語の遠い親族関係と類型地理論

前述の言語年代学で問題となったような千年で20%近い基礎語彙の消失率というのは、遺伝子の変異によって起こる遺伝子情報の変化に比べると、およそ2000倍の速度だという (Nei 1995: 76)。語彙レベルでの言語変化がいかに目まぐるしいものであるか、ここからも推察できよう。日本列島で縄文時代が始まったのは今から1万年余り前とされる。日本語の歴史がもしこの時代まで遡るとすれば、その発祥を探るためには、このような語彙レベルの情報はほとんど役立たないといってよい。

以下に述べるのは、筆者がここ数年来、比較方法とは全く違った角度から日本語の系統を探るために試みてきた「言語類型地理論」的なアプローチのあらましである⁸。ここで扱われるのは、手近な語彙項目や表面的な形態・統語構造ではなく、言語のもっと内奥に潜み、しかもそれぞれの言語の基本的な骨組みを決定づけるような言語特質、話し手の認知の在り方や言語によるそのカテゴリゼーション、言語のいわば遺伝子型に相当するような特質である。これは広い意味で言語の類型特徴といってよいものであるが、そのような言語特徴の地理的、語族的な分布を文字通りグローバルな視野から眺め、それによって日本語が世界言語の中でどのように位置づけられるかを明らかにしようとする。それは世界言語における日本語の単に類型論的な位置づけではなく (例えば松本 1987)、人類言語史という大きな枠組みの中で日本語を系統論的に位置づけることを意図するものである⁹。

なお本論に入る前に、本稿のアプローチにおける方法論的な側面について付言すると、前述の“世界言語の全体を視野に入れた類型地理論的考察”といっても、数にして6千を超える世界諸言語の全体について、くまなくデータを集めることは、実際問題としてほとんど不可能である。この困難を乗り越えるために、従来の類型論研究では、世界諸言語の中から任意のサンプル言語を個別に抽出し、それをもって世界ないし人類言語を代表させるという手法をとってきた。個別言語の選択に際しては、信頼できる言語記述が備わっているという条件の他に、地域的ならびに語族的な偏りを排して、できるだけ公平なサンプルを作成する必要があることはもちろんだが、実際には研究者の恣意に任されることが多い。また、一旦サンプルとして抽出された言語は、その地理的位置や歴史的・系統的背景がその後の考察の中で考慮されることは

8 言語学のこのような研究分野は、現在では「地域類型論」(areal typology) と呼ばれる方が普通であるが、管見の限り、わが国で「言語類型地理論」という名称を初めて使用し、言語接触が複雑にからんだ言語史の解明にこのようなアプローチを本格的に試みたのは故橋本萬太郎氏である (橋本 1978)。これは伝統的な言語 (ないし方言) 地理学の方法を、複数のしかも系統を異にする諸言語を包含する広域の言語圏にまで拡大適用したものといえてよく、橋本氏はこのようなアプローチによって、中国大陸を中心とする東アジアの諸言語を対象に、比較方法では捉えられない諸言語の地域的発達の様相を見事に浮かび上がらせた。本稿のアプローチは、これをさらに世界言語の全体、文字通り地球規模にまで拡大しようとするもので、そのために特定の言語や地域にしか見出されない語彙項目や形態的要素を排除し、あらゆる言語に適用可能な類型特徴だけに考察対象を限っている。いずれにしてもこれらのアプローチは、言語特徴の地理的分布を通じて言語史の解明を目指すという点で共通している。ただ対象となる地域と年代幅における射程の違いがあるだけである。

9 この線に沿ったこれまでの試みとして、松本 1994, 1996, 2000b などを参照されたい。

ほとんどない。この手法は、世界言語の多様性を通じて人類言語の普遍性を明らかにするという、これまでの言語類型論における主要な目的を達するためには確かに有効であった。しかし、本稿が狙いとする言語ないし語族の遠い親族関係、比較方法では手の届かない年代的に奥行き深い言語史の再建という目的のためには、このような個別言語のサンプル抽出法は決して適切とは言えない。対象となるのは個別の言語よりも、むしろそれらを包含する語族であり、それら語族間の関係がまさに言語の遠い親縁関係にほかならないからである。この点で、日本語その他ユーラシアの系統的孤立言語は、それぞれ単独にこれらの語族とほぼ対等な関係に立っている。従って、本稿では類型論で常套とされるサンプル言語抽出法は採用せず、考察の対象は、ユーラシアにおける系統的孤立言語以外は、原則として語族を単位とし、語族のレベルで世界言語を可能な限り網羅するという方針を取っている。

また、取り上げられた言語的特徴も、すでに述べたように、諸言語の最も基本的な骨格を形作るという意味で、歴史的変化に対して抵抗力が強く、比較的恒常に維持されると見られるものに絞られる。語族の内部、あるいは一言語の史的変遷の中で多様な現れ方をするような言語現象は、最初から考慮外とされているからである。しかし、後に見るように、取り扱われた類型の特徴が常に語族内部で一様な現れ方をするとは限らない。このような現象については、内部的な違いがいかんして発生したか、また当該語族の本来の特徴は何であったかということが当然問題となる。印欧語のように、これまでの進んだ比較研究によって祖語の再建がかなりの程度成功している場合は、このような問題に答えるのは容易であるが、印欧語のようなケースはむしろ例外で、多くの語族は信頼に足る祖語の再建にはほど遠い状況にある。従って、語族内部での言語特徴の異なった現れ方に対しては、ある程度の推測は試みられるけれども、未解決のまま残される場合も少なくない。また、語族内部で多少とも重大な違いが見られ、しかもそれが地域の違いと結びついているような場合は、同じ語族を分割して扱うこともある。

次に、語族や言語群の取り扱いであるが、これまで世界言語の系統的分類は、地球上のあらゆる地域について研究が必ずしも行き届いているわけではない。特にオーストラリアの原住民諸語、ニューギニアを中心とするパプア系（＝非オーストロネシア）諸語、南米（とりわけアマゾン地域）の諸言語については、未解明の部分が多々残されている。従って、このような地域については、研究の現状に見合っている程度便宜的な分類を取らざるを得ず、特にオーストラリア原住民語とパプア諸語は内部的な系統分類は無視して、地域として一括する分類とした。これらの言語の内部的分類は、当面の目的にとってそれほど重要な関わりを持たないと判断したからである。また、日本語のような系統的孤立言語を語族と同じ独立単位として扱うのは、ユーラシア地域に限られている。

本稿で扱われた世界諸言語の地域・系統的分類の枠組みについては、【別表1～2】〈語族・言語群・孤立言語〉の欄を参照されたい。これで見ると、シベリアに散在する系統的孤立言語を“古シベリア諸語”ないし“古アジア諸語”としてまとめる分類法は、ここでは採用していない。なお、ユーラシアの孤立言語の一つとされる中部インドのナハーリー語は、おそらくオーストロアジア系の言語を基層とする一種の混合語と見られるので、孤立言語としては扱わず、一方、シベリア東北部のコリマ河流域に分布するユカギール語は、典型的にウラル語と

極めて近いのでこの語族と併置させた。また、楔形文字記録に残された古代オリエントの系統不明とされるいくつかの言語は、シュメール語で代表させている。

それでは、以下、本論に入ることにしたい。

2.1 流音のタイプ——複式流音と単式流音

まず最初に取り上げるのは音韻面の特徴で、「流音」つまり日本語のラ行子音に当たる音のタイプである。これは本稿で扱われる唯一の音韻現象であり、またこれまで類型論者によってほとんど注目されることのなかったものであるが、日本語および日本列島という視点から眺めるとき、極めて重要なしかも興味深い事実が浮かび上がってくる。

音声学で「流音 liquid」と呼ばれる音種は、母音と狭義の子音 (obstruent) の中間的な音で、鼻音や半母音と共に共鳴音 (sonorant, resonant) の一種とされ、それぞれの音韻体系の中でも特別の位置を占め、通時的変化に対しても比較的安定性が高い。

この流音には、通常、側面音 (lateral) [l] と r 音 (rhotic) [r] と呼ばれる二種類の音が区別され、例えばヨーロッパのすべての言語、またアジア大陸の大方の言語は、その音韻体系の中に /l/ と /r/ という少なくとも二種類の音素を区別している。ところが、日本語は奈良時代の記録に現れて以来、また現在日本列島で話されるすべての方言を通じて、ラ行子音と呼ばれる音は一種類しかなく、これは日本語の著しい特徴として、室町時代に渡来したロドリゲスがその『日本文典』の中で注意を喚起して以来、海外の学者にも注目されてきた。しかし、この特徴は決して日本語だけに限られた現象ではない。

まず、日本列島の北方で日本語と隣接するアイヌ語も、流音は日本語とほぼ同じ舌先の弾き音 (flap) の一種類であり、また日本海を隔てて列島に向かい合う朝鮮半島の朝鮮語も、音素としての流音は一種類しかない。日本語のラ行子音に対応する中国語の子音 (声母) は、中国音韻学で「来母」として分類されてきたもので (万葉仮名や仮名文字でラ行音を表すために用いられた羅、良、利、里、留、流、礼、列、漏、魯、呂、侶などの漢字の頭子音)、音声学的には側面音 [l] であるが、流音のカテゴリーに入るのは、少なくとも中古漢字音以来、この一種類だけである。またこれらの漢字音に対して日本語の側でのラ行子音による対応も、奈良時代以来一貫して変わっていない¹⁰。

さらに、朝鮮半島の北方、アムール川下流域からサハリン島にかけて分布するギリヤーク (別名ニヴフ) 語は、表面的に見ると側面音のほかに r 音 ([r] と [ʀ]) を音素として持つように見えるけれども、これらの音の音韻体系内における位置づけは、通常の流音とは全く性格を

10 現代中国諸方言の一部、例えば北京語には、この l 音のほかに音声的に r 音にかなり近くそのためローマ字表記で r で表される音が見出される。これは中国の韻書で「日母」として分類される音で、「日」「児」「人」「然」などの漢字の頭子音がそれである。これは現在の標準的な北京語ではそり舌の摩擦ないし接近音として発音されるが、日本の漢字音で呉音では「ニチ」「ニ」「ニン」「ネン」、漢音では「ジツ」「ジ」「ジン」「ゼン」と発音される。これは本来口蓋的な鼻音がその鼻音性を失って口蓋摩擦音 (例えば ʒ) となり、これがさらにそり舌化して粗擦性を弱めたものと推定される。いずれにせよ現代の北京語は表面的に見るとあたかも l 音に対立して r 音をもつ複式流音型のような様相を呈している。このような r 音の発生が特に中国の北方地域で起こったのは、おそらくアルタイ語 (より具体的には清朝の満州語) の影響と見てよいかもしれない (松本 1998b: 14)。

異にしている（松本 1998b: 8f）。一方、ギリヤーク語の周辺を取り囲んでいるツングース系の言語は、アジア大陸の他の諸言語と同じように、流音に [l] と [r] の区別があり、またこの特徴はツングース語本来のものと思われるが、アムール下流域から朝鮮半島北部に延びる日本海沿岸部すなわち現在のロシア領沿海州に位置する一部のツングース語は、どうやら元あった [r] 音を失って、流音が一種類となっている。さらにその北方、シベリアの北東隅を占めるチュクチ・カムチャツカ諸語は、一部の言語に l 音と区別される r 音が現れるけれども、音韻的に極めて特異な性格を帯び、この音の二次的な発生を示唆している（松本 1998b: 11）。またそこからベーリング海峡を経てアラスカ、カナダの極北圏に広がるエスキモー・アリュート諸語も、一部の言語でロシア語からの借用的要素を除けば、本来の流音音素は一種類である。

このように、日本列島とその周辺地域は、ユーラシアのいわば極西を占めるヨーロッパとは対照的に、日本語と同じような流音を一種類しか持たない言語で埋め尽くされている。問題は、このような流音のタイプが世界言語の全体の中ではたしてどのような現れ方をしているかであるが、その前に、ここで問題となる流音のタイプについて簡単に定義しておこう。

まず、英語やスペイン語のように流音と呼ばれる音種に側面音と r 音の少なくとも二種類を音素として区別するタイプを**複式流音型**、日本語のようにそのような区別を持たないタイプを**単式流音型**、そして、比較的稀であるが、側面音と r 音を問わず自立の音素として流音を持たないタイプを**流音欠如型**と名付けることにする¹¹。

このような流音タイプの世界言語における地理的・語族的分布については、すでに松本 1998b でかなり詳細に論じてあるので、ここではその概要を述べるにとどめる。これまでの調査の結果は【別表 1～2：類型的特点の地域・語族的分布】の<流音のタイプ>の欄に集約されているのでそれを参照されたい。この表の中で、例えば「単・複」とあるのは、当該語族ないし語群の中で単式流音型と複式流音型が共存していることを示し、またその中で比較的優位と判断されたタイプが左側に配置されている。

なお、松本 1998b では約 1 千近い言語のデータを主要な地域と系統別に、それぞれのタイプの出現頻度としてその言語数を一覧表として示したが（松本 1998b: 5）、このデータはその後追加されて、現時点で 1200 ほどに達しているので、ほぼ同じ枠組みに従ってその修正版を示すと表 1 のようになる。別表の流音タイプの欄と相互参照されたい。

さて、問題の三つの流音タイプの世界言語における分布状況について、まず**複式流音型**を取り上げよう。

このタイプは、表 1 で見ても明らかなように、現在地球上で最も優勢であるが¹²、世界言語

11 単式流音型について付言すると、このタイプの言語は常に流音を音素として一種類しか持たないというわけではない。例えば基本的には側面音しか持たない言語でも、その側面音に、有声と無声、あるいは口蓋化と非口蓋化のような対立が現れることがある。これは複式と単式を問わず、流音が当該言語の他の子音の相関関係の中に組み込まれる形でしばしば起こる現象であるが、このような二次的調音の付加によって生ずる流音の変種は、基本的な音種としての l 音と r 音の区別とは性質が異なる。

12 筆者のこれまでの調査は世界言語の中では比較的劣勢な単式流音および流音欠如型の言語圏について重点的にデータを集めているので、表 1 で示された各タイプの出現頻度は必ずしも世界言語の平均値を表してはいない。複式流音型の世界言語における実際の出現率は、おそらく表で示された数値（全体の 51.75%）より高くなるであろう。

地域	語族・語群	複式	単式	欠如	合計
アフリカ	コイサン	1	5	14	20
	ニジェル・コンゴ	43	53	2	98
	ナイル・サハラ	43	0	0	43
	アフロ・アジア	42	2	0	44
ユ	コーカサス諸語	36	0	0	36
	インド・ヨーロッパ	78	0	0	78
	ドラヴィダ	13	0	0	13
	ウラル	20	0	0	20
	アルタイ諸語	36	3	0	39
ラ	チベット・ビルマ	29	28	0	57
	漢語	2	7	0	9
	タイ・カダイ	2	9	0	11
シ	ミャオ・ヤオ	0	8	0	8
	オーストロアジア	17	1	0	18
ア	オーストロネシア	71	44	0	115
	環日本海諸語	0	7	0	7
	チュクチ・カムチャツカ エスキモー・アリュート	2 2	3 5	0 0	5 7
大洋州	パプア諸語	9	54	10	73
	オーストラリア諸語	36	0	0	36
米大陸	北米諸語	26	133	22	181
	中米諸語	46	19	9	74
	南米諸語	47	115	22	184
	孤立言語	17	1	0	18
	ピジン・クレオール	2	4	0	6
合計		621	500	79	1200
百分率		51.75%	41.67%	6.58%	100.00%

表1：世界言語における流音タイプの出現頻度

の中でのその分布圏はかなり明確に輪郭づけられる。すなわち複式流音型の言語は、アフリカ大陸のサハラを含む北部全域から、ユーラシア大陸ではヨーロッパからアジアに及ぶその内陸部のほぼ全域をくまなく覆っている。これを語族単位で見ると、アフリカの4大語族の中のナイル・サハラ語族とアフロ・アジア語族、ユーラシアではインド・ヨーロッパ語族、ドラヴィダ語族、ウラル語族、そしてチュルク、モンゴル、ツングースを含むいわゆるアルタイ諸語がこの複式流音圏の主要な構成員である。さらに加えて、北東、北西、南の3群を含むすべてのコーカサス諸語、およびシュメール語、バスク語、ケット語、ブルジャスキー語などユーラシア内陸部の古代および現代の系統的孤立言語の多くもこのタイプに属している。また主要な語族における複式流音の出現率はほぼ100%に近く、語族内部でのタイプの違いは、ごく一部の例外を除いて、全く見られない¹³。またここに挙げられた主要な語族については、各語族のこれまでの比較研究に照らす限り、複式流音型というその性格は、それぞれの祖語の段階まで遡っても基本的に変っていないことを付け加えておこう。

13 このような例外的ケースとしては、先に触れた沿海州のツングース語のほかに、アフロ・アジアの中で唯一の単式流音型を示す古代エジプト語（これは元あったr音を消失した結果らしい）、ケット語を含むイエニセイ諸語の一部（この語族でr音は/d/からの二次的発達の可能性がある）、ほかには紀元前2千年紀のユーゲ世界でミノア文字（線文字A）に記録を残した「ミノア語」も流音のタイプはどうやら単式だった。

このように、複式流音型の言語はアフリカ北部からユーラシアにかけて、ほぼ完全に連続したいわば**アフロ・ユーラシア**的な分布圏を形成し、言語地理学の用語を借りれば、それは世界言語のまさに「中心分布」の様相を呈している。

なお、このアフロ・ユーラシア圏以外で、複式流音型がまとまって現れる地域としては、オセアニアにおけるオーストラリアがある。現在は衰退と消滅の一途をたどっているこの大陸に原住の諸言語は、手許のデータで見える限り、ほぼ100%複式流音型（しかも多種類のr音を持つタイプ）を示し、世界言語の中で複式流音型の独自の分布圏を作っている。

次は、すでに見たように日本列島とその周辺部を特徴づける**単式流音型**の分布である。

まずユーラシアでこのタイプが現れるのは、この大陸の太平洋沿岸部に大体限られる。その分布を地図上で眺めると、概略、北はチュクチ・カムチャツカ半島からロシア領沿海州を経て朝鮮半島の北端、そこから中国大陸を横切って南はインドのアッサム地方に伸びる線のほぼ東側が単式流音型の分布圏である。これに属する言語ないし言語群は、北の方からチュクチ・カムチャツカ諸語、ギリヤーク語、アイヌ語、日本語、朝鮮語、アムール下流域から沿海州に広がる一部のツングース語（ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語）、中国語（【別表1】の「漢語」¹⁴）およびチベット・ビルマ諸語のほぼ東のグループ、そしてミャオ・ヤオ語族、タイ・カダイ語族、さらにオーストロアジア語族とオーストロネシア語族の多くの言語がこれに加わる。

ユーラシアの太平洋沿岸部を特徴づけるこの単式流音型分布圏は、さらにベーリング海峡を越えてアメリカ大陸へとその分布を拡げている。すなわち、南北二つに大きく分かれ、コロンプス以前にはおそらく2千以上の言語を擁していたこの両大陸は、北から南までほぼ連続して、単式流音型の最も大きな言語圏を作っている。ただし、これらの言語の現状、すなわち、圧倒的に優勢な複式流音型のヨーロッパ語の支配下に置かれてきた今の状況で見える限り、流音タイプの現れ方は他の地域に比べて必ずしも均質ではない。表1で見えるように、北米諸語と南米諸語の場合は、確かに単式流音型の出現率が一番高くなっているが、その中間に位置する中米（言語上の分類ではメソアメリカ）では、少なくとも表面的には複式流音型と見られる言語の数が最も多くなっている。ほぼ同じ現象は、南米のアンデス地域にも見られる。土着のアメリカ大陸で文化的に最も先進地帯だったこの二つの地域は、白人によって最も早く制圧され、従ってまた最も長期にわたって支配者言語であるスペイン語の影響下にさらされてきた。現在この地域の多くの言語を特徴づける複式流音の出現は、このようなスペイン語からの影響を抜きにして、正当な評価を下すことはできないだろう。

最後に**流音欠如型**は、表1で見えるように、世界言語の中で最も出現率が低く（重点的にデータを集めても全体の6.58%）、従ってまた最も劣勢なタイプである。それが現れる地域も極めて限られ、ユーラシアでは、内陸部にも太平洋沿岸部にもこのタイプは全く現れない。

ユーラシア以外でその主要な分布域は、アフリカ大陸では、その南端を占めるコイサン語圏

14 ここで漢語というのは、シナ・チベット語族（Sino-Tibetan）の中の一党派としてのSiniticの意味で、古代中国語から現代中国諸方言のすべてを含む。

と西アフリカのニジェール・コンゴ諸語の一部¹⁵、そしてオセアニアでは、ニューギニアを中心とするパプア語圏である。

次にアメリカ大陸では、北米東部および南部に分布するアルゴンキン、イロコイ、スー、ユート・アステカ諸語などの一部にこのタイプが現れる。その中で中央アルゴンキン諸語は、手許のデータで見える限り、すべて音素として流音を欠如しているが、それ以外の諸語族でその出現はかなり散発的である。一方、ロッキー山脈以西のこの大陸の太平洋側には、流音欠如型と見られる言語は全く現れない。中米で流音欠如型の言語が現れるのは、この地域で最大の語族を形成するオトマング語圏に限られる。最後に、言語分布が最も複雑多様でしかも研究調査が最も遅れている南米大陸では、流音欠如型と見られる言語は主としてアマゾン地域（面積、言語数そして分布の多様性に関してこの大陸で最大・最高の言語圏）の系統的に孤立した小言語群の中に現れるが、手許のデータで見える限り、その出現は全体としてかなり散発的であり、このタイプの特に集中的な分布域を確定することは難しい。

ところで、流音欠如型と見られる言語には、音声学的に流音に相当する音種が全く欠けているのかという点と決してそうではない。これらの言語にも、流音相当の音（特に舌先を上顎に軽く当てる弾き音のたぐい）はしばしば現れる。しかしこれらの言語で、この音は舌先の閉鎖音 /t/、/d/ の語中（の母音間）における調音弱化によって生じたもので、例えば語頭では閉鎖音 ([t] ないし [d])、語中では弾き音 ([r]) というような相補分布をなし、音韻的には同一音素の異音という関係に立っている。

この現象は、コイサン諸語やニューギニアのパプア諸語でとりわけ顕著に認められ、これらの諸言語では音声面で観察されるこのような r 音を音韻的にどう解釈するかは、かなり微妙な問題となる。つまり、これらの言語で流音音素が欠如しているかどうかは、このような音素的な r 音の出現条件とその機能負担量（意味弁別機能の有無）に深く関わっているからである。舌先閉鎖音との相補分布という原則が失われ、r 音が独自の振る舞いを始めたとき、その言語は単式流音型へ移行したと判断されるわけである。このことは同時にまた、人類言語がどのようなプロセスによって流音音素を獲得したかという興味深い問題だけでなく、日本語を含めて世界の多くの言語で見られるように、r 音が語頭では現れにくいという人類言語に一般的な傾向を説明する上でも、有力な示唆を与えるものといえよう（松本 1998b: 32、2000a: 6f. 参照）。

すでに見たように、複式流音型はその分布が広い地域にわたって強い連続性を保ち、しかもその特徴は、極めて均質かつ安定的である。それに対して、単式流音型と流音欠如型の分布は、複式流音圏ほど均質ではなく、その内部に何らかの動揺や推移現象を抱えている。すなわち、単式流音圏では、単式と複式の共存あるいは単式から複式への推移、流音欠如型では、とりわけ単式流音型への推移が顕著である。このことは、少なくとも世界言語の現状で見える限り、複式流音型が優位かつ中心的な分布圏を形成しているのに対して、単式流音型は、相対的に劣勢かつ周辺的な分布圏を作っていることを意味している。また流音欠如型は、最も劣勢で、周

15 手許のデータで見える限り、ニジェール・コンゴ語族の流音欠如型は西アフリカのごく一部の言語に見出されるだけで、東・南部を占めるバントゥー系の諸言語には確実な例証がない。しかしバントゥー祖語の段階では流音が欠けていた可能性がある（松本 1998b: 30）。

辺的な単式流音圏の中でさらに孤立した小分布圏を形作っている。複式流音圏はその分布を拡大する強い傾向を示すのに対して、他の二つのタイプ、とりわけ流音欠如型の分布は縮小、後退の一途をたどっているかに見える。

単式流音圏における複式流音との共存やそれへの推移現象は、すでに見たように、チュクチ・カムチャツカ諸語や中国語の北方方言にも見られるが、これがもっと広範な形で現れるのは、太平洋沿岸南部すなわち東南アジアである。

この中で東南アジア島嶼部から太平洋地域にかけて広範な分布を示すオーストロネシア諸語の流音タイプの分布は、最も複雑であるが、概略的にいうと、マレー半島からインドネシアを含むこの語族の中心部に複式流音型が拡がり、一方単式流音型は、台湾、フィリピン、ポリネシアなどこの言語圏の周辺部に集中している。この語族における複式流音型の出現をどう評価するかは難しい問題であるが、まず側面音 /l/ の諸言語における対応は、極めて規則的で安定し（ポリネシアの一部では弾き音 /r/ で対応）、この音素が祖語に遡ることはほとんど疑いない。一方、r 音の対応は極めて複雑かつ不規則で、通時的にこれをどう解釈し、祖語にどのような音素を再建するかが古くから大きな問題となってきた。ここでは簡単に私見による結論だけを述べると、オーストロネシア諸語で /l/ と対立する r 音は、一部は有声の軟口蓋摩擦音 /ɣ/ から、一部は有声の舌先閉鎖音 /d/ からおそらく二次的に発生したものと推定される（詳しくは松本 1998b: 19ff. 参照）。

一方、東南アジアの大陸部つまりインドシナ半島からインド東部にかけて広く分布するオーストロアジア諸語に関して、言語的情報は極めて不十分であるが、手許のデータで見える限り、インドシナ半島東端を占めるヴェトナム語（この語族で最大の話者人口を擁する大言語）を除いて、単式流音の確実な例が見られない（ただし半島北東部のヴェトナム諸語の中にそのような例が見出される可能性はある）。それ以外のモン・クメール諸語は、大方複式流音型に属するようであり、またインド東部のムンダ諸語は、現状で見える限り、その流音タイプは、3種の流音を区別する完全なインド型の流音タイプとなっている。

しかし、オーストロアジア諸語の流音タイプが本来は単式であったと推定される間接ではあるがかなり有力な証拠がある。というのは、インドのガンジス川の中・下流域で話されていた「マガディー Magadhi」と呼ばれる東部中期インド語は、記録に現れた最も早い時期からアーリア語がもっていた l と r の区別を失い、l 音だけをもつ単式流音型となっていた。この中期インド語に発祥するベンガル語、アッサム語、オリヤ語等は、現在ではすべてインド的な複式流音型となっているが、これはサンスクリット、中部アパブランシャなど中央語の影響による後代の発達である。このように、インド東部の中期インド語が単式流音型に変わったのは、この地域で古くから話されていたと推定されるオーストロアジア系の言語の影響と見るのが最も自然な解釈であろう。しかしガンジス川流域のこの古い地域特徴は、現在では中央語の影響によって完全に消し去られ、現存するムンダ諸語も含めて、すべて汎インド的な流音タイプに置き換えられた。現在東南アジアの単式流音圏の最も西の境界は、インドのアッサム地方であるが、かつてはそれがガンジス川中流域まで延びており、そしてこの特徴の担い手は、チベット・ビルマ系ではなく、現在のムンダ諸語のおそらく祖先に当たるオーストロアジア系の言語であっ

た可能性が最も高いといえよう¹⁶。

最後に、チベット・ビルマ諸語における流音タイプの現れ方は極めて特異で、単式流音と複式流音の二つのタイプが、この語族の内部を東西に大きく二分しているように見える。すなわち、概略的に、チベットからヒマラヤ地域を含むこの語族の西の諸言語は複式流音型に属し、アッサム、ビルマから中国南部に至る東のグループ、とりわけ最東部を占めるビルマ・ロロ諸語は、ほぼ一様に単式流音型を示している。この分布は、あたかも西の内陸部に複式流音、東の太平洋沿岸部に単式流音が現れるというユーラシア大陸全体のいわば縮図のような様相を呈している。

語族内部のこの違いが通時的にどう解釈されるかはかなり重大な問題であるが、最近のチベット・ビルマ語の比較研究によれば、チベット・ビルマ祖語の音韻体系は、西の諸語に見られるような複式流音型を示しているようである。もしこのような再建が正しいとすれば、東のグループに現れた単式流音は、*l* に対立する *r* 音の消失という流音の通常の変遷とは逆方向の変化によってもたらされたことになる。従って、系統的にはチベット・ビルマ語の一分派と見られる中国語（漢語）も、文献前の時代に同じようなプロセスによって単式流音型へ変わったと見なければならない。とすれば、沿海州のツングース語に起こったのと同じような流音タイプの変化が、この語族の場合は、地域的にも年代的にもっと大規模な形で行われたものと考えられる。またそのような大規模な推移を生み出したのは、太平洋沿岸部に広がる単式流音型の古い土着の言語だったと見てよいだろう。

以上に概観したように、流音タイプの地域・語族的な分布は、決して恣意的ではなく、極めて興味深い形で世界の諸言語を区分している。すなわち、ユーラシアを中心に眺めると、そこには複式流音型に属するユーラシア内陸部と単式流音型に属する太平洋沿岸部という二つの大きな言語圏が明確に区別できる。さらに前者は、アフリカ北部を併合してアフロ・ユーラシア的な広がりを見せるのに対して、後者は、南北アメリカ大陸とつながっていわば環太平洋的な広がりを見せる。この事実は、世界言語における日本語の位置づけにとって極めて重要な意味を持っている。

なお、本稿で扱った類型特徴に関しては、その語族・地域的分布を【別表 1～2】で示したほかに、それを補足する意味で、それぞれのごく概略の分布地図を別に添えた（＜地図 1-8＞、流音に関してはその中の地図 1:【流音タイプの分布】を参照）。

ここに示された世界言語の分布図は、あくまでも便宜的なもので、正確は期し得ない。特にアメリカやオセアニアでは、土着の古い言語は急速に衰退・消滅に向かっており、白人到来前の状況がある程度推定・復元しなければ、もはや分布図を描けない状況になっている。その意味で、各言語特徴の分布図も、復元された推定上の言語地図に基づいていることを承知されたい。またアメリカ諸言語は、複雑を極める各語族の分布は示さず、「ナデネ語族」（＝アサバスカ諸語＋ハイダ、トリングット、イーヤックの 3 言語）以外は、グリーンバーグの流儀に従っ

16 モン・クメール諸語を含めて東南アジア大陸部に見られる *l* に対立する *r* 音は、軟口蓋摩擦音の変種として発生した可能性が高い。タイ諸語やカレン諸語の *r* 音も同じような性格を示している。またこの地域における単式から複式流音型への推移は、インドの言語・文化による影響という外的要因も大きく働いたかもしれない。

て、単に「アメリンド諸語」として扱った (Greenberg 1987)。個別の語族、言語群の詳細については、【別表2】を参照されたい。

2.2 形容詞のタイプ——体言型と用言型

次に取り上げるのは、形容詞の品詞的タイプ、すなわち、通常「形容詞」と呼ばれるような語類がそれぞれの言語の中で品詞としてどのように位置づけられているかという問題である¹⁷。

日本語で形容詞という用語は、明治時代に西洋文法の adjective (ラテン語で *adjectivum*) の訳語として導入されたもので、その定義は、例えば『広辞苑』(第4版)によれば、“「形容詞」(*adjective*): 事物の性質・状態を、事物の持続的・静態的な属性に着目して表す語。国語では用言の一つで陳述の力を有する”とされている。しかし、西洋文法で本来 *adjective* と呼ばれるものは、日本語の形容詞とは全く性格が違っている。ラテン文法の *adjectivum* というのは、もともと「付加語」「添え言葉」というような意味で、必ず *nomen* (名詞) と一緒に *nomen adjectivum* 「付加 (=形容) 名詞」と呼ばれる。つまり形容詞 (*adjective=adjectivum*) は、品詞としてはあくまでも名詞 (*noun=nomen*) の下位類として位置づけられる。英文法でも少なくとも 18 世紀頃まで、この品詞は正式には *noun adjective* と呼ばれるのが普通だった。

一方、ラテン文法の *adjectivum* は、ギリシア文法の *epitheton* の訳語として導入されたもので、この用語を初めて定義したギリシアの文法家ディオニュシオス・トラクスによれば、これは固有名詞または普通名詞に添えられてそれを褒めたり貶したりするのがその役割で¹⁸、彼の分類によれば 23 種にのぼる名詞下位類の一つにすぎなかった。つまり、西洋文法で「形容詞」というのは、元来、品詞としては名詞の下位類、しかもそのごく小さな一部を占めるにすぎず、主要な語類として位置づけられるにはほど遠い存在だった。4 世紀のローマの文法家ドナートゥスのラテン文法は、ほとんど品詞論といってよいものだが、ラテン語の 8 品詞を論じたその文法の中に *adjectivum* という用語は一度も出てこない。名詞 (*nomen*) の中に完全に埋没してしまっているからである。

ギリシア・ラテン文法における形容詞のこのような位置づけは、少なくとも古代ギリシア語やラテン語における形容詞の性格を忠実に反映したもので、これはまた西洋古典語だけでなく、サンスクリット語その他古い印欧諸語のすべてに共通した特徴でもある。つまり、これらの言語には、現在の英語や日本語で通常理解されているような形容詞というものは存在しないと言ってもよい。これらの言語で「名詞」(*onoma, nomen*) というのは、意味的には人や物の名称であり、文法的には「性」「数」「格」という文法的カテゴリーによる固有の語形変化を有し、もう一つの主要品詞である「動詞」と明確に区別される。この点でいわゆる形容詞は狭義の名詞と何ら異るところがない。近代のヨーロッパ諸語で形容詞だけの特徴とされる「比較法」という形態変化も、これらの古代語では形容詞の専有物ではなかった。例えばラテン語の *super* (上) *superior* (もっと上)、*infer* 「下」*inferior* 「もっと下」などは形容詞というよりも副詞や

17 この問題については、松本 1998b でもすでに扱ってあるので参照されたい。

18 *Epitheton de esti to epi kyriōn ē prosēgorikōn homōnymōs tithemenon kai dēloun epainon ē psogon.* (Uhlig (ed.): *Dionysii Thracis Ars Grammatica*: 34)

前置詞に近く、またギリシア語の *basileus* 「王」から *basileu-teros* 「普通以上に王らしい王」というような“比較級の名詞”が作られ、さらに、*dexi-teros* 「右」、*aris-teros* 「左」のような語は初めから“比較級”しか持っていない。

このように名詞の中で極めて存在感の薄い印欧語の形容詞は、しかし、中世以降のヨーロッパで次第にその自立的な性格を強めてくる。すなわち、13世紀のフランス・ドイツを中心に栄えたスコラ哲学者による「思弁文法 *grammatica speculativa*」は、ラテン文法の伝統的な品詞論をアリストテレスの哲学によって再解釈し、独特の文法理論を構築したが、その中で名詞も論理学を抛り所に再分類され、*nomen substantivum* (実体名詞) と *nomen adjectivum* (付加名詞=形容名詞) という二つの下位類に大別された。前者は物の実体 (*substance*) を、後者は物の属性 (*accident, attribute*) を表すとされたのである¹⁹。

中世文法学に見られるこのような形容詞の捉え方は、実は、近代ヨーロッパ諸言語における形容詞の性格上の変化と密接に結びついていた。つまり、これらの言語で「形容詞の名詞離れ」ともいうべき現象が次第に強まってきたからである。それが最もはっきり現れたのはゲルマン語で、ここでは本来名詞と全く同じだった形容詞の語形変化が、「強変化」と「弱変化」という二種類に分化し、後者は定冠詞を伴った修飾語としての用法に固有なものとして、名詞の語尾変化とはっきりと区別されるようになった。すなわち、他の名詞に添えられてそれを修飾するというその本来的な機能に固有の形態法が確立されたのである。これと同じような現象は、スラヴ語にも現れたが（ここでは「不定形容詞」と「定形容詞」と呼ばれる）、形容詞はその固有の形態法によって（狭義の）名詞とは異なった自立の語類としての性格を次第に強めたのである。

近代西洋諸語の中で、このような形容詞の名詞離れが最も進んだのは、ゲルマン語の中の英語である。すなわち、英語の形容詞はその弱変化の方向をさらに進めて、最終的に名詞と共有していた一切の文法カテゴリー（性、数、格）とそれに伴う形態法を失った。形容詞には名詞を特徴づける数の標示も格（所有格）の標示もなく、比較という固有の形態法によって独自の語類としての性格を強め、名詞と動詞に対してあたかも第三の主要品詞のごとき地位を確立するに至ったのである。しかし英語の形容詞の場合も、それがもともと品詞として名詞の下位類に属していたという本来の性格は、決して失われたわけではない。形容詞は動詞と違って、述語として用いられるためには、名詞同様コピュラ (*be* 動詞) を必要とし、また場合によっては修飾語ではなく、名詞のように独立語として使用することも可能である。英語の形容詞は、品詞として確かに名詞と区別される存在となっているけれども、直接述語になれないという点

19 中世文法学のこの伝統を忠実に受け継いだ17世紀のポール・ロワイヤールの文法は、次のように述べている：

Les objets de nos pensées, sont ou les choses, comme *la terre, le Soleil, l'eau, le bois*, ce qu'on appelle ordinairement *substance*. Ou la maniere des choses; comme d'estre *rond*, d'estre *rouge*, d'estre *dur*, d'estre *çavant*, etc. ce qu'on appelle *accident*.

Et il y a cette difference entre les choses ou les substance, et la maniere des choses ou les accidents; que les substances subsistent par elles-mesmes, au lieu que les accidens ne sont que par les substances.

C'est ce qui a fait la principale difference entre les mots qui signifient les substances, ont esté appellez *noms substantifs*; et ceus qui signifient les accidens, en marquant le sujet auquel ces accidens conviennent, *noms adjectifs* (Arnauld et Lancelot 1660: 30f.).

で、その性格は動詞よりはるかに名詞に近いのである。

英語を含めてヨーロッパの言語のこのような形容詞と比べると、日本語で形容詞と呼ばれるものは著しく異なっている。それは、前述の『広辞苑』の定義にも見られるように、「国語では用言の一つで陳述の力を有する」という点で、形容詞は名詞（＝体言）ではなく、動詞（＝用言）の下位類として位置づけられるからである。すなわち日本語の形容詞は、動詞と同じく「終止」「連体」「連用」というような活用形を有し、そのまま述語として用いられるけれども、名詞のように格助詞と直接結びつくことはない。

江戸時代の独創的な文法家富士谷成章（1738-1779）は、日本語の主要な品詞として（1）名（ナ）（2）装（ヨソイ）（3）挿頭（カザシ）（4）脚結（アユヒ）の4種を立て、「名をもて物をことわり、装もて事をさだめ、挿頭、脚結もてことばをたすく」と述べている（『あゆひ抄』1778）。言うまでもなく、「名」は西洋文法の名詞（*nomen*）に、「装」は動詞（*verbum*）に相当する。そして「装」はさらに、事（コト）を表すものと状（サマ）を表すものに二大別され、後者がまさに形容詞に相当する語類である²⁰。

同じく鈴木胤は、その著『言語四種論』（1824）の中で、日本語の詞（コトバ）を（1）体の詞、（2）形状（アリカタ）の詞、（3）作用（シワザ）の詞、（4）テニヲハの4種に分類し、この中の（2）と（3）を合わせて「用の詞」（または「活用の詞」とした。現在の用語に置き換えれば、（1）が体言（＝名詞）、（2）と（3）が用言（＝動詞）であり、物の様態、形状を表す語類としての形容詞は、用言の下位類として位置づけられ、体言とは厳格に区別される。

このように日本語で形容詞とされる語類は、文法的には明らかに用言（＝動詞）の下位類であり、この点でヨーロッパ諸語あるいは印欧語の形容詞とは根本的に性格を異にする。ただし、日本語の形容詞は活用はするけれども、その活用法は動詞のそれとは明確に異なり、狭義の動詞と形容詞の間には明瞭な境界がある。この意味で日本語の形容詞は形態的に動詞とは別個の語類としてかなり自立した性格を帯びている。鈴木胤が形状詞と作用詞を別個の語類として立てた根拠もここにあった。

日本語の形容詞のこのような用言的性格は、もちろん日本語だけに限らない。例えばアイヌ語を見ると、ここでは形容詞と動詞の間には形態法や統語的振る舞いに関してほとんど違いが見られず、多少とも自立の語類として形容詞を区画することはほとんど不可能である。朝鮮語においても事情はほぼ同様で、日本語の形容詞に当たる語類の活用は、基本的に動詞のそれと区別がなく、ただ、狭義の動詞（＝作用詞）に比べてアスペクトや法（モダリティ）の標示に関して若干の制限がある（例えば完了／未完了の区別や命令法の欠如）という点を除けば、両者の間に明瞭な境界は存在しない。朝鮮語とほぼ同じ状況は、現在の琉球方言にも見られるが、琉球方言で形容詞と動詞が基本的に同じ活用を行うようになったのは、この方言では形容詞と動詞の本来の活用が、「あり」「をり」という助動詞との複合形式によって全面的に再編成されたためである。

一方、名詞と動詞をそれぞれ特徴づける固有の形態法をほとんど完全に欠いている中国語のよう

20 この語類はさらに、在（アリサマ）＜例えば「静かなり、堂々たり」＞、芝（シザマ）＜例えば「高し」＞、鋪（シキザマ）＜例えば「嬉し」＞に三分類される。

な場合、問題の形容詞が品詞としてどのように位置づけられているかを見極めるのは必ずしも容易でない。このような場合に決め手となるのは、主として統語法上の振る舞いであるが、この点から見て、中国語の形容詞もやはり動詞の下位類という性格を示している。例えば、中国の文法家劉復は、その著『中国文法通論』(1920)の中で、中国語の品詞を(1)実体詞、(2)品態詞、(3)指明詞、(4)形式詞の4つに分類したが、通常の意味の形容詞と動詞は(2)の品態詞の中に含まれている。同様に、金兆梓の『国文法之研究』(1922)は、中国語の品詞を大きく実字と虚字に分け、この実字の中に、(1)体詞、(2)相詞、(3)副詞の3品詞を区別しているが、(2)の相詞は、その中に「静詞」と「動詞」という二つの下位類を含み、この静詞がすなわち形容詞にほかならない。中国語の形容詞に対するこのような見方は、現在の中国語研究者にあっても全く変わらない。例えば、リーとトムソンは次のように述べている。

厳密にいうと、中国語には“形容詞”と呼べるような品詞は存在しない。すなわち、物の性質や特性を表す語は確かに存在するけれども、文法的観点から、“形容詞”を“動詞”から区別することは困難である。“形容詞”が動詞のように振る舞うと見られる少なくとも三つの在り方がある。第一に、中国語では、性質や特性を表す語は、印欧語のようにコピュラと共起しない。第二に、中国語で性質や特性を表す語は、動詞と同じように、否定文で *bù* という助詞が使われる。第三に、“形容詞”が名詞を修飾するとき、動詞と同じように、*de* という連体助詞が付く。このような理由から、中国語では性質や特性を表す語は、単に動詞の下位類、言うなれば“形容動詞”(adjectival verbs)と見なして構わないだろう(Li & Thompson 1987: 826f.)²¹。

このように、日本語やその周辺諸言語とヨーロッパの諸言語とでは、同じ形容詞という名称で呼ばれる語類の性格が大きく異なっている。ここでは形容詞のこのような違いに着目して、印欧諸言語のように形容詞を品詞的に名詞の下位類かあるいはそれに近い語類として位置づけるタイプを**形容詞体言型**(あるいはそのような形容詞を**体言型形容詞**)、日本語やその周辺諸言語のように、形容詞を動詞の下位類かあるいはそれに近い語類として位置づけるタイプを**形容詞用言型**(あるいは**用言型形容詞**)と名付けることにしよう。

もちろん、同じ形容詞体言型といっても、その中には古い印欧語のように形容詞と名詞が形態・統語的にほとんど区別できない言語もあれば、英語のように名詞と形容詞がほぼ対等な関係で対峙するような言語もある。同様に形容詞用言型の言語の中にも、アイヌ語や朝鮮語のように形容詞と動詞がほとんど区別できない言語もあれば、日本語のように形容詞と動詞がかなり明確な語類として区別される言語もある²²。

21 なお、古代中国語についての全く同様の見解は、Pulleybank 1995: 24 にも見られる。また、中国語と同じような“孤立語”に属するタイ語の形容詞の動詞的性格に関しては、Prasithrathsint 2000 に詳しい論述があるので、それを参照されたい。

22 日本語の形容詞はあくまでも用言ではあるが、その活用形式は動詞のそれとはつきり異なっている。とりわけ、国文法で「形容動詞」と呼ばれる語類は、その名称とは裏腹に、その語幹の部分に着目すればむしろ名詞に近い。この語類は、通時的には、体言的語幹を形容詞的に活用させるために、「タリ(<トアリ)」「ナリ(<ニアリ)」という助動詞を付けたもので、本来は2語からなる複合形式である。形容動詞という名称は、その助動詞的成分に着目して命名されたものであろう。現在の日本語で、本来の形容詞(例えば「楽しい」と形容動詞(例えば「愉快だ/な」)の関係は、本来の動詞(例えば「学ぶ」と体言からの派生動詞(例えば「勉強する」)のそれとほぼ等しいと見てよいだろう。

さて、本稿にとって最も重要な問題は、このような形容詞のタイプが世界言語の中でどのように分布しているかである。地域、語族別に見たその分布の概略は、【別表1-2】の〈形容詞のタイプ〉の欄を参照されたい。

これを見て直ちに分かるように、形容詞体言型と形容詞用言型の分布は、先に見た複式流音型と単式流音型の分布に驚くほど類似している。

すなわち、**形容詞体言型**は、複式流音型とほぼ同じように、アフリカ北部からユーラシア内陸部のほぼ全域を覆い、アフロ・ユーラシア的な拡がりを示している。これに属する主要な語族は、ナイル・サハラ語族、アフロ・アジア語族、インド・ヨーロッパ語族、ドラヴィダ語族、ウラル語族、南コーカサス諸語（カルトヴェリ語族）、そしてチュルク、モンゴル、ツングースを含むアルタイ諸語である²³。ただしその分布は、複式流音型の場合ほど完全に均質というわけではなく、アフリカのナイル・サハラ諸語の中には形容詞用言型と見られる言語も混じり、一方、ユーラシア内陸部の系統的に孤立した諸言語の中で、東部シベリアのユカギール語は、他の特徴に関してはウラル語とほぼ共通するけれども、形容詞のタイプだけは用言型を示し（遠藤 1993）、またイェニセイ川流域のケツ語も形容詞用言型と解釈される可能性がある。現在のコーカサス諸語の中では、グルジア語に代表される南のグループは、明らかに体言型に属するが、北西コーカサス諸語はどうやら用言型のものであり、また北東コーカサス諸語では用言型と体言型が混在しているように見える。また古代オリエント諸語の中で、シュメール語の形容詞を動詞的と解釈する学者もある²⁴。

一方**形容詞用言型**は、単式流音型と同じように、北はチュクチ・カムチャツカ半島から朝鮮半島、そこから中国大陆を横切って、南はインドのアッサム地方のあたりへ延びる線の太平洋側に集中する。すなわち、形容詞用言型に属する言語または言語群は、北から南に向かって、チュクチ・カムチャツカ諸語、ギリヤーク語、アイヌ語、日本語、朝鮮語、中国語、ビルマ・ロロ諸語を中心とするチベット・ビルマ語族の東方群、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語、オーストロアジア諸語、オーストロネシア諸語である。

ユーラシアの太平洋沿岸部を特徴づける形容詞用言型の分布は、単式流音型の場合よりもはるかに均質である。流音のタイプは、特に東南アジアのオーストロアジア、オーストロネシア諸語を中心に、単式と複式の混在する複雑な分布を見せたが、形容詞のタイプに関してこれらの言語圏は驚くべき一様性を示している。特にオーストロアジア諸語は、東のモン・クメール語群と西のムンダ語群との間で言語構造上の懸隔が著しいけれども、形容詞の用言的性格という点で両者は完全に一致し、一方ムンダ諸語は、この点で周辺のインド・アリア諸語・ドラヴィダ諸語と明確な一線を画している。また、東南アジアからオセアニアの広大な地域に拡がるオーストロネシア諸語の場合、形容詞が動詞的性格を強く示すことはよく知られた事実である。これらの言語では、そもそも形容詞と呼ばれるような語類は存在せず、英語や日本語など

23 アルタイ諸語の形容詞も、形容詞と名詞の間にいわゆる文法的一致の現象が欠ける点を除けば、その体言的性格は古い印欧語とほとんど変わらない。ただし、アルタイ諸語の中で一部のツングース語は、名詞との間に「数」と「格」の一致を持っている。

24 Thomsen 1984: 64. しかし Djakonov は形容詞を名詞類と見ている (Serdjuchenko (ed.) 1979: 23)。

の形容詞に相当する語は大部分、動詞の中の重要な下位類をなす状態動詞の中に取り込まれ、時制やアスペクト上の制限を除けば、形態的に動詞とほとんど区別がない²⁵。

ところで、ユーラシアの主要な語族の中でチベット・ビルマ語族は、流音の場合と同じように形容詞のタイプに関しても、チベットからヒマラヤ地域に及ぶ西方群とアッサム・ビルマ以東の東方群との間で、ほぼ西の体言型に対して東の用言型というような対立を示している²⁶。この言語圏の形容詞のタイプについてはさらに詳細な調査が必要であり、この違いの通時的背景に関しては、専門諸家の今後の検討にゆだねたい。

ユーラシアの太平洋沿岸部を特徴づける形容詞用言型の言語圏は、単式流音型と同じように、エスキモー・アリュート諸語を介してアメリカ大陸へとつながっている。実際この大陸は、極北のアラスカ、カナダから南米南端のパタゴニアに至るまで、形容詞のタイプはほとんど用言型一色に塗りつぶされているといっても過言ではない。これらの言語の多くは典型的な形容詞用言型に属し、オーストロネシア諸語と同じように、形容詞を含む状態動詞が動詞組織の中で重要な役割を演じている。特に、北米のスー諸語、イロコイ諸語、あるいは南米のトゥピ・ワラニ諸語などのいわゆる「動格型 active type」（これについては後述）と呼ばれる言語では、形容詞は動詞の中の非動作動詞（＝所動詞）の一部として完全に位置づけられている。

形容詞用言型の最も大きな分布圏を形作るアメリカ大陸の中で、南米のアンデス地域だけはやや例外である。かつてインカ帝国の公用語となり、スペインによる征服後、この地域のいわばリングワ・フランカとして広範な地域に拡がったケチュア語の形容詞は、その孤立的な形態法と述語的用法におけるコピュラ動詞との併用という点で、明らかに名詞と共通した性格を示している（Shopen (ed.) 1985 1: 17）。これとほぼ同じ現象は、ケチュア語と密接に関係するアイマラ語にも認められ、またアンデス山地の東側に分布する一部のアラワク諸語の形容詞も、用言型というよりはむしろ体言型に属するようである。

次に、オセアニアのオーストラリアとニューギニアに目を転ざると、まずオーストラリアの原住民諸語は、ほぼ全面的に形容詞体言型に属している。形態論的に名詞と形容詞の間には何らの違いもなく、古い印欧諸語や現在のアルタイ諸語と同じく、形容詞は名詞の単なる下位類にすぎない。様々な言語に関するこれまでの記述を見ても、これらの言語における形容詞の名

25 例えば東部インドネシアのスンバ島で話されるカンベラ語の“形容詞”について、Klamer は次のように述べる：“The syntactic correspondences between these so-called ‘adjectives’ and the ‘intransitive verbs’ suggest that they are all intransitive verbs. The notion ‘stative’ intransitive verbs is used to set apart the intransitive verbs denoting typical property concepts, such as size, colour, dimension, shape etc. from other intransitive verbs. It has no (idiosyncratic) structural reflections and is a purely semantic distinction. In other words, the stative verbs that express the typical adjectival notions do not show any formal (selectional, syntactic) differences with intransitive verbs like *meti* ‘die’, *mbadi* ‘itch’, *njorung* ‘fall, topple’, *laku* ‘go’ or *puru* ‘descend’.” (Klamer 1998: 116)

26 例えば、現代チベット語ラサ方言では、形容詞が述語として用いられるときは、名詞と同じように、*yin*, *red*, *yod* などのいわゆる「コピュラ動詞」を必要とし、また、名詞の後に置かれる修飾形容詞は、被修飾名詞と数、格が一致しなければならない。チベット語における形容詞のこのような名詞的性格は、古チベット語に遡るらしい（武内 1990: 8）。なお、ヒマラヤ諸語のリンブ語の形容詞については、Driem 1987: 21、キナウリ語については、Sharma 1988: 192 参照。ただしヒマラヤ地域でも、ネワリー語は、マラ氏の記述によれば、形容詞用言型のようである（Malla 1985: 59）。

詞的性格に関して、大方の意見はほとんど一致している²⁷。形容詞のこのような名詞的性格は、オーストラリア諸語の著しい特徴といてよく、複式型の流音タイプと共に、この言語圏を“アフロ・ユーラシア”のそれと結びつける不思議な絆となっている。

一方、ニューギニアを中心に分布するパプア系の諸言語は、形容詞のタイプに関して必ずしも一様ではなく、体言型と用言型が入り混じっているようであるが、地理的・系統的に正確な分布は目下のところ明らかではない。ただし、この言語圏における用言型の出現は、オーストロネシア諸語との接触によって生じたという可能性も考えられる²⁸。

最後にサハラ以南のアフリカについて見ると、その最南端に分布するコイサン諸語は、ほぼ一様に形容詞用言型に属しているようである。ここでは数詞や量詞なども状態動詞として振る舞っている²⁹。一方、アフリカ大陸で最大の分布圏を作るニジェール・コンゴ諸語は、東・南部に広がるバントゥー諸語も含めて、他言語の形容詞に相当する語類が見たところ一部は動詞、一部は名詞に分裂しているかのような様相を呈している³⁰。この中で、名詞的形容詞、というよりもむしろ他の名詞に添えられてもっぱら修飾語的に使われる語（ないし語根）は比較的その数が限られていることから、これまで一部の学者によって、これらの言語は形容詞用言型にも体言型にも属さず、限られた少数の形容詞しか持たない形容詞のいわば第三のタイプと見なされることもあった（例えば Dixon 1982）。しかし、これらの言語の形容詞の在り方を仔細に観察すると、他言語の形容詞に相当するような語類の大部分は、状態動詞に含まれ、完全に動詞として振る舞っている。また動詞である以上、その最も通常の（つまり無標の）用法は述語であり、修飾語として用いられるときは、他の動詞同様に、特別の標識（例えば他言語の連体

27 オーストラリア諸語全般の形容詞については、例えば：“Adjectives represent a sub-class of nominals, but they are not normally distinct from common nouns in terms of inflection, only in terms of syntactic distribution.....” (Blake 1987: 3)、あるいはまた “In most Australian languages nouns and adjectives take the same inflections, and they can generally occur in either order in an NP.....It can thus be difficult to formulate an entirely grammatical criterion to distinguish adjectives from nouns.” (Dixon 1980: 274)。またディヤリ語について “Nominals are defined as the category of words which inflect for case according to their relationship to the predicate or to other nominals in the sentence. This category subsumes what are traditionally referred to as nouns and adjectives, which can be distinguished as sub-categories in Diyari...” (Austin 1981: 33)、ワルワ語について “Nouns and adjectives are not formally distinguished in Warrwa. Most nominal roots may function referentially to designate an entity, and attributively, to designate a quality or property; the difference depends on the function of the nominal in its phrase, rather than on its subclass.” (McGregor 1994: 14)、ワルダマン語について “There is a large class that will simply be called ‘nominals’ in general, but which comprehends what would be called ‘nouns’ and ‘adjectives’ in conventional part-of-speech terms. (Merlan 1994: 57)、カヤルディルド語について “As in many Australian languages, there is a large open class of NOUN/ADJECTIVES, with identical inflectional and derivational possibilities.” (Evans 1995: 85)、また、グンバインギル語について “In Gunbaynggir the only justification for recognising a distinction between nouns and adjectives would be semantic. Some nouns more typically occur modifying the head noun of an NP than do others. These are words describing characteristics or qualities, such as ‘good’, ‘tall’, etc. But morphologically and syntactically all nouns function in the same way whether they are used mainly to modify the head noun or not.” (Eades 1979: 271) 等々。

28 例えば、ニューギニア島ポートモレスビー東部のコイアリ語 (Dutton 1996) やハルマヘラ島北部のトベロ語 (Holton 1999) の形容詞は、用言型に近く、一方セピク・ラム流域のイモンダ語 (Seiler 1985)、アメレ語 (Roberts 1987)、コボン語 (Davies 1981)、イマス語 (Foley 1991) などは体言型のものである。

29 例えばコイ語 (Khoe) の形容詞について、Köhler は次のように述べている：“Adjectif... est un radical

形や分詞形、あるいは関係節構文)を必要とする。ヨーロッパの諸言語の形容詞にとって何よりも必須の要件とされる「他の名詞に添えられる修飾語」という尺度から見ると、これらの動詞は、最初から形容詞としての資格を欠いていると見なされても致し方ない。その結果、アフリカのとりわけバントゥー系諸言語には形容詞が欠けている、というような見方がこれまでしばしばヨーロッパの学者によって提起されてきた。これも言語上のヨーロッパ中心主義が生んだ偏見の一つとあってよいだろう。

なお、形容詞タイプの地理的分布については、付属資料の**地図 2:【形容詞タイプの分布】**を参照されたい。流音タイプの分布と比べると、その類似性は一目瞭然である。

2.3 名詞の数と類別

2.3.1 名詞の数カテゴリー

以下で扱うのは名詞の最も基本的な文法カテゴリーに関わるもので、まず「数」の現象を取り上げよう。

周知のように、英語、ドイツ語などヨーロッパのすべての言語は、名詞に少なくとも単数と複数の区別があって、いわゆる可算名詞では、有生名詞と無生名詞を問わず、単数・複数の区別が義務的である。一方、日本語では「男たち」「子供ら」「野郎ども」「人々」さらにはまた「殿がた」「旦那衆」「友どち」など、指示物の複数性を表すためにいろいろな表現手段があるけれども、それは必要に応じて随意に使われるだけで、文法上義務的なカテゴリーとして確立

verbal. Employé en fonction attributive, il se place devant le nom sans accord de genre ni de nombre... En fonction prédicative, l'adjectif suit les règles du système verbal. Il est en général construit avec la marque du temps .hä." (Köhler 1981: 510)

30 例えば、ウガンダ南西部で話されるンゴレ・キガ語 (バントゥー系) の“形容詞”についての次のような記述を参照されたい。

“The term ‘adjective’ is somewhat redundant in Nkore-Kiga. Words corresponding to English adjectives are divided into two classes: (i) those that behave like nouns, and (ii) those that behave like verbs. The former are few in number, some twenty or so only being attested.....The vast majority of adjective-like forms in use are really stative verbs and behave like them.” (Taylor 1985: 174f.)

同じく、西アフリカのマリ共和国で話されるスピレ語についても次のような記述が見られる：

“The function of qualifying nouns that is filled by adjectives in Indo-European languages is accomplished in two ways in Supyire: by means of compounding and by means of derived independent adjectives. Most of the meanings coded by adjectives in an adjective-rich languages like English are coded by stative verbs in Supyire...

There is, however, a small set of true adjective roots which are not currently used as verbs in Kapwo Supyire. These also can be compounded with nouns, or they can form the root of a derived independent adjective.” (Carlson 1994: 164)

また、セネガルの代表的言語であるウォロフ語における“形容詞”の欠如とそれを代用する状態動詞に関して、次のような記述を参照されたい。

“The part of speech that modifies a noun or other substantive...referred to as adjective does not exist in Wolof. Because Wolof does not have adjectives as a separate part of speech, verbs (especially stative verbs) are used in short relative clauses to express adjectival functions in the language.

In other words, given that the language has no class of words called ‘adjectives’, a relative clause is used to describe, modify or qualify a substantive or NP...These short relative clauses have the equivalent semantic value as adjectives in Wolof.” (Ngom 2003: 49f.)

されているわけではない³¹。

名詞に義務的な数の標示を欠くという点では、アイヌ語も日本語と同様というよりもっと徹底していて、通常、名詞の側で単数・複数を区別することはごく稀である。特に複数性を表す必要があるときは、名詞の後に *utar* (ともがら、衆) を添えるが (例えば *ainu utar* 「アイヌ (= 人間) たち」 *sisam utar* 「和人たち」)、これも日本語の「たち」と同じく、原則として人間名詞に限られる。アイヌ語で注目すべきは、複数性が名詞ではなくむしろ動詞の側で標示されること (例えば、*maka* (単) ~ *makpa* (複) 「開く」、*komo* (単) ~ *kompa* (複) 「曲げる」、しかも一部の動詞では、単数形と複数形が全く別の語根で現れる (例えば、*an* (単) ~ *okay* (複) 「ある、いる」、*arpa* (単) ~ *oman* (複) 「行く」、*rayke* (単) ~ *ronnu* (複) 「殺す」など)。複数動詞は、通常、自動詞では動作主、他動詞では動作対象の複数性を表すが、動作自体の複数性を意味することもある³²。

朝鮮語にも名詞の複数性を標示するために、日本語のほぼ「たち」に相当する *-til* という形式があるけれども、やはり必要に応じて使用されるだけで義務的ではない。ただし朝鮮語の場合、*-til* は必要があれば無生名詞で使うこともでき (例えば *cip-til* 「家々」)、また動詞 (あるいは述語全体) に添えられて、アイヌ語の複数動詞のように、動作主や動作対象の複数性を標示することもできる。ギリヤーク語にも複数を表す接辞として *-kun* があるが、その使用は義務的でなく、また名詞だけでなく動詞に添えることもできる。一方、中国語 (北京方言) には複数を表すために *-men* という形式があり、*wǒ* 「私」に対して *wǒ-men* 「私たち」、*nǐ* 「君」に対して *nǐ-men* 「君たち」のように、代名詞では単・複の区別が義務的となっているが、名詞での複数標示は随意である。また *-men* によって複数標示されるのは、日本語の「たち」とほぼ同じように、大体人間名詞に限られ、無生名詞を直接複数標示する手段はない。

このように、名詞の複数性の標示に関して、ユーラシアの西側と東側とは著しい違いが現れているが、ここでは名詞の数標示に関して主要な二つのタイプを立てることにする。すなわち一つは、英語やドイツ語のように、複数の標示が義務的で**文法カテゴリーとしての数が確立されているタイプ**、もう一つは、日本語やアイヌ語のように、複数性を標示する手段はあるけれども**文法的に義務化されていない、つまり名詞に数のカテゴリーを欠くタイプ**である。この

31 名詞では数カテゴリーが義務化されていない言語でも、人称代名詞ではそれが義務化されている場合が多い (ただし、人称代名詞でも数の区別が確立していない言語も存在する)。一般に、名詞句における数カテゴリーの出現は、概略、**人称代名詞→人間名詞→動物名詞→無生名詞**というような階層性に従っている。例えば、日本語で「私たち」「君たち」のように人称代名詞では複数標示はほぼ義務的であるが、普通の人間名詞や擬人化された無生名詞では随意的、それ以外の無生名詞は、一部の重複形式 (例えば「家々」) を除き、直接複数化することはできない (松本 1993: 41f.)。なお、ここで問題とするのは名詞における数カテゴリーで、代名詞のそれではない (代名詞の数の問題は後出 §3.3)。

32 このように名詞ではなく動詞の側で単数・複数が区別されるという現象は、オーストロネシア語族の特にポリネシア諸語に広く見られるが、ユーラシアの言語では、シュメール語などに見られるほかに、きわめて稀である。しかし、ニューギニアのパプア諸語や南北アメリカ大陸では、この現象はごく普通に見受けられ、またアフリカでも一部のチャド諸語、ニジェール・コンゴ諸語、コイサン諸語に同様の現象が見られる。さらに一部の動詞で単数動詞と複数動詞が異なる語根から作られるという現象も、これらの言語の多くに共通している。例えばポリネシアの西フツナ・アニワ語の例を挙げれば、*fano* (単) ~ *roro* (複) 「行く」、*tere* (単) ~ *fura* (複) 「走る」、*mai* (単) ~ *romai* (複) 「来る」など (Dougherty 1983: 97)、諸言語における同様の例は枚挙にいとまがない。これが人類言語に古くそして深く根付いた特性であることは、ここからも容易に推察できよう。

二つのタイプが世界言語の中でどのように分布しているかについては、【別表1-2】<数の範疇>の欄を参照されたい。ここで、数カテゴリーを持つ言語または言語群は+、数カテゴリーを持たない言語または言語群は-で表されている。また、±は同一言語群の中に数カテゴリーを持つタイプと持たないタイプが共存または混在していることを示す。

この表を見ると、数カテゴリーに関する二つのタイプの現れ方は、すでに見た流音特徴および形容詞タイプのそれと完全に重なるわけではないけれども、かなり類似した分布圏を作っていることが分かる。特に、ユーラシア大陸における内陸部と太平洋沿岸部との対照は、ここでも顕著に現れている。

まず、名詞に義務的な数のカテゴリーを持つ言語圏を全般的に見渡すと、このタイプは、複式流音および形容詞体言型よりもその分布域がさらに拡がり、アフリカでは、サハラ以南をも含めてこの大陸のほぼ全域を覆い、一方ユーラシアでは、その内陸部を越えてシベリア東部まで拡がって、チュクチ・カムチャツカ諸語からエスキモー・アリュート諸語までその中に包含し、さらにその分布は、北米東部（アルゴンキンおよびイロコイ諸語）からその南部（カイオワ・タノアおよびユート・アステカ諸語）まで延びている。

次に、名詞に義務的な数カテゴリーを欠如する言語圏は、ユーラシアではやはり太平洋沿岸部に集中するが、ただしその北方で、チュクチ・カムチャツカ諸語がこの圏を離れる。従ってこの言語圏に含まれるのは、北の方から、環日本海域のギリヤーク語、アイヌ語、日本語、朝鮮語、その南では、中国語、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語、チベット・ビルマ語族のほぼ東のグループ、ムンダ語群を除くオーストロアジア諸語、そしてオーストロネシア諸語である。なお、アルタイ諸語の最も東方に位置するツングース語は、エヴェン語、エヴェンキ語など北方のグループで数のカテゴリーは明確であるが、アムール川流域から南に位置する諸方言では、満州語も含めて、数の区別は存在するけれども、文法的に必ずしも義務化されていないようである。

アメリカ大陸は、上述の北米東・南部の一部のほか、南米ではアマゾン地域の一部の言語とアンデス高地のケチュア語を除いて、大部分の言語が数カテゴリーを欠如するタイプに属している。特に北米のロッキー山脈以西の太平洋側は、あたかもユーラシアの太平洋沿岸部に呼応するかのように、ほぼ全面的に、数カテゴリーを欠く言語圏を作っている。分布図については、**地図3:【名詞の数カテゴリー】**を参照されたい。

2.3.2 名詞の類別タイプ——名詞類別と数詞類別

次に、名詞の数のカテゴリーと密接に結びついた文法現象として、指示物の何らかの意味的カテゴリーに基づく「類別」がある。例えば、ドイツ語やロシア語などで、名詞は「男性」「女性」「中性」という三つの類に分かれる。伝統的な西洋文法で「性」(gender)と呼ばれる文法カテゴリーは、このような名詞類別の一種にほかならない。文法用語としてのgenderは、ラテン文法のgeneraに由来し、本来は単に「類」の意味である。

一方、日本語の名詞には性に相当する文法カテゴリーは存在しない。その代わりに、日本語で

物を数えるときは、人間ならば「ひとり」「ふたり」、動物ならば「一匹」「二匹」、本ならば「一冊」「二冊」というように、指示物の種類によって違った数え方をする。数詞に添えられるこのような形式は、国文学で助数詞と呼ばれ、もっぱら数詞とだけ用いられるが、中国語やヴェトナム語、タイ語などでは、数詞だけでなく指示詞にもこのような形が添えられる。

ここでは、性のように名詞自体を文法カテゴリーとして直接に類別するタイプを**名詞類別型**、それに対して、数詞や指示詞に伴って指示物を間接的にカテゴリー化するタイプを**数詞類別型**と呼ぶことにする。

■**名詞類別** 名詞類別型にもさまざまな変種がある。その代表的なタイプは、「男性」「女性」という自然の性に基づく2項型、あるいはそれに「中性」を加えた3項型で、前者はセム語をはじめとするアフロ・アジア諸語、後者はインド・ヨーロッパ諸語に数多く見られる³³。ユーラシアでこのような名詞類別をもつ語族ないし言語群は、セム語と印欧語のほか、コーカサス諸語（ただし南コーカサス語を除く）とドラヴィダ諸語があるが、それ以外では、パキスタン領カラコルム山系の谷間に孤立するブルジャスキー語³⁴とイェニセイ川流域のケット語³⁵だけである。この中で、西コーカサス諸語は人間・非人間の2類、ドラヴィダ語は人間類・非人間類を基盤とし、その人間類に男性・女性を区別する3項型³⁶、東コーカサス諸語は、有生類・無生類を基盤として、それに人間類・非人間類、男性・女性、動物・非動物、さらに高等動物・下等動物などの区別が加わり、少なくとも3項（例えばダルギン語）、多ければ8項型の体系（例えばアルチ語）が現れる³⁷。

なお、古代オリエントのシュメール語には、有生と無生（あるいは人間と非人間）の区別がいろいろな文法現象に反映しているが、厳密に名詞の文法カテゴリーとして確立されているかどうか疑わしい。また、チュクチ語も有生・無生の区別が名詞の数や格の標示と結びついているが、ここで有生性は親族名称を頂点とする一種の階層性をなしており、厳密な名詞類別型といえるかどうか疑問がある。

アフリカは、世界言語の中で名詞類別型が最も優勢な地域であるが、ここではそのタイプの違いと語族の区別がかなり密接に関係している。すなわち、北部のアフロ・アジア諸語と南部のコイサン諸語（の中央群）は、男性・女性の区別に基づくいわゆる「性」、それに対して中央部を占めるニジェル・コンゴ語族は、バントゥー諸語に典型的に見られるような、人間・非

33 印欧語では、ドイツ語、ロシア語、ラテン語、ギリシア語、サンスクリット語などは男性、女性、中性の3項型、ロマンス語、バルト語、多くのインド・アーリア諸語は男性、女性の2項型、ヒッタイト語、北欧のゲルマン語などは有生（＝男女共通性）と無生（＝中性）の2項型である。印欧語の中で性を失った言語としては、ヨーロッパでは唯一英語、それ以外ではアルメニア語、イラン語の中の現代ペルシア語、オセチ語、クルド語、バルーチ語、ヤグノービー語、サリロキー語、そしてインド・アーリア諸語の中のアッサム語、ベンガル語、オリヤ語などがある。

34 人間類に男性・女性、非人間類に有生（＝動物）・無生を区別する4項型（Berger 1998: 33f.）。

35 男性・女性・無生の3項型（Werner 1997: 88f.）。

36 ドラヴィダ祖語の名詞類別は、人間類・非人間類の2項型だった可能性もある（Steever 1998: 21）。

37 北東コーカサス諸語の名詞類別は、例えばルトゥル語やブドゥフ語に見られるような、有生類・無生類の区別を基本とし、その有生類に人間類と非人間類（＝動物）、その人間類に男性・女性を区別する4項型が、この語族に本来のシステムであったらしい（Schmidt 1994: 187）。これはまた、ブルジャスキー語のシステムでもある。

人間を基盤として、その非人間の部類に動物、植物、道具、自然物などさまざまな下位区分を設けるいわゆる「クラス」言語である³⁸。一方、このニジェール・コンゴとアフロ・アジア語族の間で複雑な分布を見せるナイル・サハラ諸語は、かつて「ナイル・ハミティック」と呼ばれた一部の東部ナイル諸語（マーサイ語、テソ語、トゥルカナ語、ロトゥホ語など）を除いて、アフロ・アジア的な性（つまり男性・女性の区別）もバントウ的なクラスも欠いている。ちなみに、東部ナイル諸語の名詞類別はアフロ・アジア的な性で、「ナイル・ハミティック」という名称も「セム・ハム」語族とのこのような類縁性に基づいていた。

アメリカ大陸で名詞類別型と見られる言語は、北米では、北東部のアルゴンキン諸語と一部のイロコイ諸語、ほかには南部のカイオワ・タノア諸語と一部の湾岸諸語である。北米の名詞類別は、基本的に有生・無生の区別であり、一部の言語でこの有生類にさらに男性・女性の区別が主に代名詞で生じることがあるが、この種の性別が名詞類別に関与することは極めて稀である。また北西海岸のチヌーク語は、代名詞で男性・女性・中性を区別するけれども、名詞自体は類別型とは見なされない。一方南米では、アンデス山地の東麓からアマゾン地域の北西部にかけて分布するトゥカノ諸語、北部アラワク諸語およびその周辺諸言語に、男性・女性の区別を基本とする名詞類別らしきものが見られるが、アラワク諸語ではそれが動詞の人称標示と結びついて、あたかも文法的な一致の様相を呈している³⁹。

これ以外の地域で、名詞類別型はニューギニアのパプア系諸言語とオーストラリアの原住民諸語に数多く現れる。ニューギニアでは、特にセピク川とラム川の流域に広がる低地帯とそれに隣接する沿岸部のトリチェリ山地にこのタイプの言語が多く見られるが、中央部の高地では比較的稀である。これらの言語の類別のタイプは、ドラヴィダ語に見られるような、非人間名詞（動物名詞と無生名詞）に対立する人間名詞の中に男性と女性を区別するというシステムが基本で、言語によってはその無生名詞の中にさらに多くの下位類を区別するというシステムも見られる⁴⁰。

オーストラリアで名詞類別型は、この大陸の北西部特にアーネムランドを中心に分布する非パマニユンガン諸語の中に数多く見られるが、それ以外の大陸の大部分を占めるパマニユンガン諸語の中にも少なからず例証される。オーストラリアの名詞類別も、基本的に人間名詞における男性・女性の区別と非人間名詞という3項型のシステムと見られるが、中には有標な女性名詞に対する無標な男性名詞という2項型もあり、意味的に透明な原理が失われている場合も少なくない。類別の標識は北部の非パマニユンガン諸語では名詞の接頭辞として現れ、これが

38 ニジェール・コンゴ語族の中で、マンデ語派をはじめ西アフリカの諸言語や中央アフリカのアダマワ・ウバンギ語派の一部にクラスを欠如する言語が見られるが、これらの言語にも何らかの形でクラス体系の痕跡が見られる（Welmers 1973: 184ff.）。なお、アフロ・アジア語族の中では、エチオピア南東部の一部のオモ諸語（アリ語、ボロ語、ザイセ語など）が性を失っている。またチャド諸語の中にも同じような言語が存在する可能性があるが、目下のところ詳細は不明である。

39 これらの言語に見られる類別は、本来的にはどうやら代名詞のカテゴリーであって、セム語や印欧語に見られる名詞の **gender** とはかなり性格が異なる。文法カテゴリーというよりも純粋に意味的に条件づけられている点で、英語やチヌーク語の代名詞に現れる **gender** の現象に近いかもしれない。

40 例えば、セピク川下流域のイマス語は、非人間名詞の中に動物名詞、植物名詞、そして音韻条件によって区別される6類の無生名詞を下位区分する（Foley 1991: 199ff.）。

統語関係を作る他の語類と呼応して、あたかもバントゥー諸語のクラス・システムに類似した役割を演じている⁴¹。オーストラリア諸語の名詞類別でとりわけ注目されるのは、多くの言語で無生類の中に「食用植物」という類が重要な位置を占めている点である⁴²。

■**数詞類別** 名詞類別型と同じように、数詞類別にもその意味的な分類原理にはさまざまなタイプがある。しかし一般的に、分類の根底にあるのは、有生と無生、あるいはむしろヒトとモノの区別で、これを土台としてさまざまな下位区分が加わり、言語によっては非常に複雑かつ精緻な類別システムが作り上げられる。

日本語の助数詞は、その種類が極めて多く（おそらく 200～300 種類）、また日本語の固有数詞と漢数詞の体系が入り交じってかなり複雑な様相を呈しているが、これとほぼ同じ状況は朝鮮語にも見られる。一般に、数詞類別は名詞類別と違って、閉じた体系を作らず、その用法も厳格に規則化されているわけではない。発話の場面や文体によっても変わり易く、文法的というよりもむしろ語彙的な性格が強い。

数詞類別の最も単純なシステムは、ヒトとモノを区別する二種類の数詞からなっている。その最も手近な例は、アイヌ語の例えば sine-n 「ひとり」～sine-p 「ひとつ」に見られるが⁴³、これと同じ最小体系は、台湾の高砂族の言語（例えばパイワン語で ma-Dusa 「ふたり」～matja-Dusa 「ふたつ」⁴⁴、フィリピンやポリネシアの一部の言語、北米北西部のネズパース語（例えば lepu? 「ふたり」～lepit 「ふたつ」）など各地に散見される。

また中米のマヤ系のハカルテック語の助数詞は、これに動物の類が加わった 3 項型（例えば ox-wang 「3 人」～ox-k'ong 「3 匹」～ox-eb' 「3 個」）で、このタイプもしばしば見られる。同じく中米のトトナック語の類別接辞は、ヒト (cha-) と区別されたモノの類を、その形状によって、丸いもの (ka-)、細長いもの (kan-)、平たいもの (mak-) の 3 種に類別し、これはまた中米の類別詞の最も平均的なタイプと見られる (Suárez 1983: 88)。なお、環日本海域でアイヌ語に隣接するギリヤーク語の数詞類別は、1 から 5 までの数詞に限られるけれども、人間と動物類の区別に加えて、モノの類がその形状や用途に応じて 20 種類以上に類別されている⁴⁵。

41 例えばワルダマン語 (Merlan 1994: 61f.)、ティウィ語 (Osborne 1974: 51ff.)。ただしティウィ語ではクラス標識は接尾辞で現れる。

42 オーストラリア諸語の名詞類別に関しては、Sands 1995 に詳しい論考がある。

43 アイヌ語の -p は、「もの」を意味する pe に由来するが、-n の語源は定かでない。なお、-n の付くのは 1 から 4 までで、5 以上の数詞には -niw を添えて、asikne-niw 「5 人」、iwan-niw 「6 人」という形になる。

44 土田滋氏 (私信) によれば、このシステムは高砂祖語（あるいはオーストロネシア祖語）に遡る古い起源のもので、ヒトを数える数詞は、もとは基本数詞の第 1 音節の重複による次のような形だったという：2 *DewSa～*Da-DewSa, 3 *telu～*ta-telu, 4 *xepat～*xa-xepat, 5 *lima～*la-lima。(1 は補充形による)。

45 若干の例を示せば、次のようである『言語学大辞典』1: 1411)。

	独立形	人間	動物	舟	櫓	紙・織物	衣服	丸い物
1	Naqř	Ney	Nan	Nim	Nir	Nraç	Niwř	Nix
2	meqř	mey	mař	mim	miř	meraç	miwř	mix
3	zaqř	zaqř	zaqř	cem	ziř	craç	ziwř	zax
4	nyqř	nyry	nuř	nym	nuř	nuraç	nuř	nux
5	toqř	tory	toř	tom	toř	toraç	toř	tox

中国語の類別詞の体系は、時代や地域によって大きく異なるが、現代語（北京方言）のそれは日本語や朝鮮語ほど複雑多様ではない。中国語の類別詞で注目されるのは、それが数詞だけでなく数量詞や指示代名詞と共に用いられる点である（例えば、*nèi tiáo niú* 「あの+類別詞+牛」、*zhèi jǐ mèn pào* 「この+少数の+類別詞+大砲」）。同様の現象はヴェトナム語やタイ語にも見られるが、こちらではさらに形容詞に添えて用いることもできる（例えば、タイ語で *plaa tua yà* 「魚+類別詞+大きい」）。

数詞類別は、すでに述べたように、必ずしも閉じた類を作らず、また統語関係を作る他の語類との間に文法的一致を引き起こすこともない。さらに、その意味的な分類原理に関しても、名詞類別と大きく異なっている。まず第一に、名詞類別で重要な役割を担っている男・女の性別が分類原理として働くことは、南米アマゾン地域の一部の言語を除いて、全く見られない。分類の基本原理は「ヒト」と「モノ」、あるいは「有生類」と「無生類」であるが、その「ヒト」や「有生類」がさらに男性と女性あるいはオスとメスに下位区分されることはほとんどないのである⁴⁶。第二に、モノないし無生類を下位区分する上での重要な分類原理は、モノの実質や種類（例えば植物、金属、液体、自然物、加工物など）ではなく、むしろモノの形状（例えば、細長いもの、平たいもの、丸いもの、尖ったもの等々）である。例えば日本語で、樹木も針金も大根も鉛筆も紐も、細長いというその形状に着目して1本、2本と数え、同様に紙もガラスも布も煎餅も魚のひらきも、その平たい形状から1枚、2枚と呼ばれる。ちなみに、タイ語で類別詞は「形状名詞」と呼ばれているというが（『言語学大辞典』2: 539）⁴⁷、まさに適切な命名といえよう。

次の問題は、この数詞類別型の世界言語における語族・地理的分布であるが、これについては、【別表1～2】<数詞類別>の欄を参照されたい。

これを見ると、数詞類別型は単式流音型や形容詞用言型よりも、分布域がさらに狭くなっていることが分かる。すなわち、このタイプはアフリカ大陸およびオセアニアのオーストラリアとパプア系ニューギニアには全く現れない。それが集中的に現れるのは、ユーラシアではその太平洋沿岸部であるが、この中の特に数カテゴリーを欠如する言語圏とほぼ一致した分布を示す。すなわち、北方では環日本海域のギリヤーク語、アイヌ語、日本語、朝鮮語だけで、チュクチ・カムチャツカ諸語とエスキモー・アリュート諸語を含まず、南方では、中国語、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語、オーストロアジア諸語（ただしムンダ諸語を除く）、そして大

46 ユーラシアの数詞類別言語圏の中で、性別に基づく名詞類別と数詞類別が共存しているかに見える唯一の言語は、インドのアッサム地方に孤立するオーストロアジア系のカシ語である。この言語で *gender articles* (Rabel 1961: 66) とされるのは、おそらくインド・アリア語の影響によって代名詞の中で発達したもので、名詞の文法カテゴリーとして確立されているかどうか疑問である。一方この言語の数詞類別は、他の諸言語同様、ヒトとモノの区別に基づき、男・女の性別とは無縁である。

47 『言語学大辞典』= 亀井他（編）1988-1992。本書の場合のみ、引用はそれぞれの項目の著者名によらず、辞典名をもってそれに代える。

部分のオーストロネシア諸語がこれに属する⁴⁸。

一方、チベット・ビルマ諸語は、この特徴に関してもいわば境界領域を形作り、東のグループに属するカレン語やビルマ・ロロ諸語には数詞類別が見られるが、チベット語やヒマラヤ西部の諸言語、また中央部のカチン語にはそれが欠けている。

数詞類別に関してもう一つの境界領域はインド東部で、ここでは先に触れたマガディーと呼ばれる中期インド語に発祥するベンガル語、アッサム語、オリヤ語などに数詞類別が現れ（これらの言語は、一方ではまた性と義務的な数のカテゴリーを失っている）、ここからさらに一部のムンダ語（例えばムンダリ語、カリア語）、ドラヴィダ語（例えばマルト語、クルフ語）にこの現象の波及が見られる。インド東部のアーリア諸語に数詞類別をもたらしたのは、すでに述べた単式流音型の場合と同じく、おそらくガンジス流域の古いオーストロアジア的基層語の作用と見てよいだろう。

ユーラシアの太平洋沿岸部と並んで、数詞類別が集中して現れるのはアメリカ大陸である。その分布は、北米アラスカの太平洋岸から中米を通して南米のアマゾン地域まで延びている。

まず北米で数詞類別型の言語は、アラスカからカナダのブリティッシュ・コロンビア州を経て合衆国のカリフォルニア州に至る太平洋側の帯状の地域にほぼ集中している（ここはすでに述べたように、北米で言語分布が最も複雑かつ稠密な地域である）。ここで数詞類別型と見られる言語または言語群は、北の方からイーヤック語、トリンギット語、ハイダ語、ツィムシアン語、ワカシュ諸語、セイリッシュ諸語、そのほか「ペヌート大語族」の中に含まれるチヌーク、タケルマ、アルシー、クラマツト、サハプティン、ネズパースなどの諸言語である。

北米のこの数詞類別型言語圏は、そこから少し飛んで中米に再び姿を現し、マヤ諸語を中心に、その周辺へと分布を拡げている。マヤ諸語以外で数詞類別を持つ言語は、ワベ語（Huave）、トトナック語、タラスコ語、トラパネック語、そしてナワトル語その他一部のユート・アステカ諸語および一部のオトマンゲ諸語（例えばチナンテック語）である。ここには日本語や東南アジアの諸言語に匹敵するような高度に発達した助数詞の体系がしばしば見られる⁴⁹。

中米の数詞類別型言語圏は、中米南部から南米北部にかけて分布するチブチャ諸語を介して南米へと延び、コロンビア南部、ペルー東北部、ブラジル北西部にまたがるアマゾン地域に数詞類別の大きな分布圏を作り出している。ここは北米の太平洋沿岸地帯以上に、言語分布の複雑多様な地域であり、しかも未知の部分がまだ数多く残されている。

これまでに判明した限りで、数詞類別型と見られる主要な言語群は、上述のチブチャ諸語の

48 オーストロネシア語族の中で数詞類別は、インドネシアからミクロネシアおよびメラネシアの一部を含む中心部の諸言語に多少とも発達したシステムが見られるが、台湾、フィリピン、およびポリネシアを含む周辺部の諸言語では、わずかの痕跡を除いて数詞類別を全く欠くか、あるいは台湾の高砂諸語のように、ヒトとモノの最小体系しか持っていない。また数詞類別から所有物の類別へと再編されたと思われる言語も少なくない。例えば、ミクロネシアのチャモロ語は、現在数詞はすべてスペイン語のそれによって置き換えられたために、本来の数詞とともに数詞類別のシステムも失ったが、古い類別詞は、所有代名詞と結びついた形だけに残存している。例えば、*ná-hu guihan*「類別詞（食べ物）-私の十魚」（Topping 1980: 184）。

49 例えばユカタンのマヤ語には 80 種以上（Tozzer 1921: 200f.）、グアテマラ南部のマヤ系ツトゥヒル語（Tzutujil）には 200 種以上の助数詞が数えられ（Dayley 1985: 164f.）、さらにツェルタル語では、Berlin（1968: 191ff.）に列挙された助数詞の数は、500 種以上にのぼっている。

ほかに、南米で最大の語族とされるアラワク諸語（特にその北部群）、アマゾン川上流のヴァウペス川流域を中心に分布するトゥカノ諸語、もっと小規模な言語群として、オリノコ川上流のブラジルとベネズエラの国境地帯で話されるヤノマム語、コロンビア南東部からペルーにかけてプトマヨ川からペルー領アマゾン川の流域に分布するボラ・ウィトト諸語、さらにその上流ペルーとエクアドルの国境近くのサパロ・ヤワ（Zaparo-Yagua）諸語、ブラジルのマト・グロソ州に分布するナンビクワラ語、そのほか系統不明のいくつかの孤立言語がある。

アマゾン地域のこれらの言語の中には、ヴァウペス川流域のトゥカノ諸語を中心に、見たところ男・女性の区別を含む名詞類別と数詞類別とが共存しているような言語が見られ、ユーラシアからアメリカ大陸を含む数詞類別型言語圏の中で著しい例外を作っている。アマゾン地域諸言語の実地調査と本格的な記述的研究はまだ始まったばかりの段階なので、これらの言語の名詞類別や数詞類別の正確な実態については、なお今後の精査が必要である⁵⁰。

名詞類別と数詞類別を含めて類別タイプの全体的な分布に関しては、**地図 4:【名詞の類別タイプの分布】**を参照されたい。

■類別のタイプと数のカテゴリー すでに見たように、類別のタイプの地理的分布に関して、名詞類別型は義務的な数のカテゴリーを持つ言語圏と、数詞類別型は数カテゴリーを欠如する言語圏と密接に結びつき、しかも、ごく一部の例外的ケースを除いて、それぞれの言語圏の中の下位群として位置づけられる。ここから例えば、「ある言語が名詞類別型に属すれば、その言語には必ず名詞に義務的な数の区別があり、逆にある言語が数詞類別型に属すれば、その言語には義務的な数カテゴリーが欠けている」というような形の含意的普遍性を導くこともできるだろう。例えばバントゥー諸語に典型的に見られるように、名詞類別は多くの言語で、名詞における単数・複数の区別と不可分に結びついている。

一方、数詞類別型がほとんどの場合名詞に義務的な数カテゴリーを欠如する言語にしか現れないのはなぜか。それはおそらく、これらの言語では名詞によって指示される事物がかりに可算的であっても、実際には個体ではなく、集合（collective）または総称（generic）として捉えられているからである。日本語で「男」「犬」「本」というような名詞はそれを単独で使った場合、特定の個物というよりは、総称的な類ないし集合物を意味しているのが普通である。従って、そのような対象物を数える場合には、数カテゴリーをもつ他の言語で非可算的な集合名詞や物質名詞の場合と同じように、それを個別化する必要がある。助数詞は、まさにそのような個別化、個体化の働きをするもので、この点で物質名詞や集合名詞に付く「計量詞」と同じような機能をもっている。例えば、「1本の鉛筆」、「3匹の犬」などの類別詞と「1合の酒」、「3杯のコーヒー」などの計量詞は、その機能においてほとんど異なるところがない。どちらも対象を固体化することによって、それを可算的たらしめているのである。この点で、類別詞は、例えば英語の a cup of coffee, two sheets of paper のような a cup of, two sheets of などと全

50 アマゾン諸語における数詞類別については、Derbyshire & Payne 1990、またアラワク諸語、トゥカノ諸語については Dixon & Aikhenvald (eds.) 1999: 83, 218f. などに簡単な概要が見られる。また、名詞類別、数詞類別を含めて、いくつかの個別言語の類別現象については、Barnes 1990, Aikhenvald 1995, Aikhenvald & Green 1998 などの論考がある。

く同じ機能を担っている。

要するに、数詞類別型の言語には、可算名詞と非可算名詞というような区別は存在せず、すべての名詞は、それ自体としては非可算的、つまり集合ないし総称名詞の性格を帯びている。また、類別詞が指示詞と結びついたり、あるいは類別詞付きの数詞が、あたかも他言語における代名詞のように、それだけで指示的ないし承前 (anaphoric) な機能を果たすことができるのも、類別詞に内在するこのような個体化の働きに起因するといえよう。

最後に付言すると、広い意味で名詞の類別化のもう一つのタイプとして、一部の動詞による対象物の類別という現象がある。その最も身近な例は、日本語の存在動詞の「いる」と「ある」で、日本語はこの動詞の使い分けによってあらゆる指示物を「有生類」と「無生類」に二分する。存在動詞によるこれと同じ類別は、一部のチベット・ビルマ諸語 (ネパール東部のドゥミ語 (Driem 1993: 168)、中国四川省の北西部に分布するいわゆる「川西走廊諸語」の一部 (『言語学大辞典』4: 278)、スリランカのシンハラ語 (Gair & Paolillo 1997: 25f.)、北米のラコタ語 (Buechel 1939: 319f.)、中南米のエンベラ諸語 (Licht 1999: 74) などにも見られるが⁵¹、ニューギニアのパプア諸語には、もう少し複雑な存在動詞の類別が現れる。例えば、東部ニューギニア高地のエンガ語では、有生・無生の区別のほかに、その対象物の形状や姿勢に応じて、7種の存在動詞が使い分けられる (Lang 1971)。

このような動詞類別の最も発達したシステムは、北米のアサバスカ諸語に見られるが、そこには存在 (または位置) 動詞だけでなく、いわゆる処置動詞や運動動詞などにも同じ現象が現れ、その類別の内容もかなり多岐にわたっている⁵²。またメソアメリカのマヤ系チョンタル語で「洗う」という動詞は、その対象が衣服、石臼、口、手、髪、皿によってそれぞれ異なった形をとり (Suárez 1983: 89f.)、同様の現象はフィリピンの言語にも見られるらしい。ちなみに、日本語でも、英語のほぼ break にあたる動作に対して、「破る」(衣服や紙)、「割る」(ガラスや瓶)、「砕く」(固形物)、「折る」(枝や棒状のもの)、「ちぎる」(軽くて薄いもの) のようなさまざまな形が使い分けられる。一般に動詞によるこのような類別は、文法現象というよりもむしろ限られた語彙レベルの現象という性格が強く、世界言語におけるその現れ方もかなり散発的で、ここで取り上げた名詞類別、数詞類別とはやや性格を異にする。また南米アマゾン地域では、このような動詞類別が数詞類別・名詞類別としばしば共存して現れ、また北米北西海岸でも、数詞類別はしばしば動詞類別と併存している。

3 太平洋沿岸言語圏と環日本海諸語

以上、日本語を中心に諸言語の基本的骨格を形作ると見られるいくつかの類型特徴について、世界言語全体の視野からその地理的、語族的な分布を概観した。これらの言語特徴は、数カテゴリーと名詞の類別タイプのように、互いに関連性の深いものもあるけれども、流音と形容詞、

51 塚本 (1998: 72) によれば、朝鮮語にも敬語表現ではこの区別が見られるという。

52 北米諸語の動詞類別については、大島 1992 に要を得た概観が見られる。

あるいは形容詞のタイプと名詞の数カテゴリーなどは、それぞれが明らかに独立した言語構造上の特性である。しかし、諸言語におけるその現れ方は決して恣意的ではない。それは世界諸言語ないし諸語族全体の系統的分類に関して、有力な示唆を与えるものであり、またとりわけ、日本語が世界言語の中でどのように位置づけられるか、あるいはその中のどのような部分とより親近な関係で結ばれるかについて、かなり明確な見通しを与えてくれる。

まず、視点をユーラシアに限れば、その諸言語の全体は、**ユーラシア内陸部**と**太平洋沿岸部**という二つの大きな言語圏に分けられ、日本語はまぎれもなく太平洋沿岸言語圏の一員として位置づけられる。

ユーラシア内陸部の言語圏を特徴づけるのは、**複式流音**、**体言型形容詞**、**名詞の義務的な数カテゴリー**、および**名詞類別 (gender)**であり、それに対して太平洋沿岸言語圏は、**単式流音**、**用言型形容詞**、**名詞の数カテゴリーの欠如**、および**数詞類別**によって特徴づけられる。そしてこの二つの言語圏は、内陸部はアフリカ大陸とつながって、**アフロ・ユーラシア**的な広がりを見せ、一方、沿岸部はベーリング海峡を越えてアメリカ大陸とつながり、ここに**環太平洋**的な広がりを作っている。

太平洋沿岸部を特徴づけるこれらの言語特徴がアメリカ大陸にまで広がっていることは、単なる偶然とは決して考えられない。それはアメリカ先住民言語の担い手 (の少なくとも一部) が、ユーラシアのこの部分からアメリカ大陸へともたらした言語遺産の一部だと考えるのが最も自然な解釈であろう。とすれば、このような言語特徴およびそれによって特徴づけられる言語圏の形成は、今から1万年以上前の最終氷期、アメリカ大陸がベーリンジア陸橋によってアジアと完全に地続きとなっていた考古学上「後期旧石器時代」と呼ばれる時期 (約35,000～10,000年前) まで遡ると見なければならぬ。アメリカの古い先住民がこの大陸に移動した時期やその定住の過程を正確に跡づけることは、現段階では極めて困難であるが、少なくともその移動が後期旧石器時代のある時期に (おそらく一度ならず) 行われたことはほぼ疑いないところである (この問題については、本稿の最後でもう一度取り上げる)。

ユーラシアの諸言語を大きく区分する内陸部と太平洋沿岸部というこの二つの言語圏は、それぞれの内部を仔細に見れば決して均質ではない。それをさらに下位区分することはもちろん可能であり、また必要でもある。

ここではまず太平洋沿岸言語圏に視点を絞ると、そこには少なくとも**南方群**と**北方群**という二つの下位群がかなりはっきりした形で浮かび上がってくる (【別表1】の最右欄<系統関係>を参照)。すなわち、ここで**南方群**と呼ぶのは、中国から東南アジアに及ぶ広大な地域を占める諸言語で、ここに含まれるのは、ミャオ・ヤオ、タイ・カダイ、オーストロアジア、オーストロネシアの四つの語族、そして中国語とチベット・ビルマ語族のほぼ東のグループ (いずれも「シナ・チベット」という大語族に包摂される) である。それに対して**北方群**は、日本列島を含む北太平洋の沿岸部に分布する諸言語を含んでいるが、ここには南方群に見られる大規模な語族は見られず、すでに述べたように、系統不明の孤立的な言語または小言語群が集っている。

この二つの言語圏の違いは、語順のタイプと結びついた統語構造ならびに形態法上の違いと

して最も顕著である（世界諸言語の語順のタイプは、本稿では特に取り上げないが、その分布については【別表1～2】〈語順のタイプ〉の欄を参照されたい）。すなわち、北方群に属する言語はすべて、SOV型の語順と後置詞を持ち、その形態法はいわゆる“膠着型”で、しかも接尾辞の使用が圧倒的に優勢である。それに対して南方群に属する言語は、周辺部の一部の言語を除けば、大部分がSVO型の語順と前置詞を持ち、その形態法は、少なくとも中国大陆、インドシナ半島、インドネシアに及ぶその中心部において、いわゆる“孤立型”の様相を呈し、またその接辞法は、接尾辞よりも接頭辞がはるかに優勢である。北方群と南方群の間のこのような言語構造上の違いは、手近な例で、例えば日本語と中国語、あるいはアイヌ語とマレー語を比べて見れば一目瞭然であろう。

しかし、統語法や形態法に現れたこのような違いは、言語のいわば表面構造に関わるもので、千年ないし2千年程度の範囲内でも大きく変わり得る。それぞれの言語にとって決して恒常的な特質ではない。例えば同じ印欧語族の内部を見ても、現代のヨーロッパの諸言語とインドその他のアジアの印欧語との間には、語順を含めた統語法や形態法に関して、上述の南方群と北方群に匹敵するような著しい違いが現出している。中国語と日本語とを隔てる文法構造上の違いは、英語とヒンディー語とのそれとほとんど変わらない。同じくシナ・チベット語族も、語順や名詞・動詞の形態法に関してその内部に甚だしい相違を抱えている。すなわち、チベット・ビルマ諸語はおしなべてSOV型の語順をとるのに対して、ビルマ東南部からタイの国境地帯に分布するカレン語や中国語の語順はSVO型であり、また形態法に関しても、チベット・ビルマ諸語のいわゆる「代名詞化言語」には、“多総合型”ともいべき複雑な形態法が見られるのに対して、カレン語や中国語のそれは典型的な“孤立型”である。多くのチベット・ビルマ諸語の名詞には、能格的な格標示が見られるのに対して、カレン語や中国語には、名詞の格標示は完全に欠如している。オーストロアジア語族も、ヴェトナム語やモン・クメール諸語を含む東のグループとインド東部に分布するムンダ諸語との間に、語順だけでなく形態・統語法の全般にわたって、言語構造上の深刻な違いを呈示している。

太平洋沿岸部の南方言語圏は、その中心部にあたる中国大陆からインドシナ半島に及ぶ地域に「単音節型声調言語」と呼ばれるタイプの諸言語が集中的に分布している。しかしこの言語タイプは、おそらく沿岸言語圏の本来の姿ではなく、この地域の多くの言語で跡付けられる「声調発生」のプロセスからも窺えるように、比較的新しい時期（おそらく今から3500～3000年前以降）にさまざまな形の言語接触によって生じた新しい地域特徴と見なさなければならない（この地域における中国語の位置づけについては後に触れる）。

一方沿岸部の北方群は、大きく見れば、日本列島とその周辺部からチュクチ・カムチャツカ、さらにはエスキモー・アリュート諸語の分布域までつながっている。しかし、その中で日本語、朝鮮語、アイヌ語、ギリヤーク語を含む日本海域の言語群と極北のチュクチ・カムチャツカおよびエスキモー・アリュート諸語との間にはかなりはっきりとした境界がある。すなわち、この二つの言語群は、単式流音と用言型形容詞という特徴を共有しているけれども、名詞の数カテゴリーと類別のタイプに関してははっきり異なる。太平洋沿岸言語圏の重要な特徴である数詞類別は、すでに見たように、チュクチ・カムチャツカ諸語とエスキモー・アリュート諸語には

全く欠けているからである。

日本海を囲んで連環のような分布を見せるこの言語群、すなわち現状では、朝鮮語、日本語、アイヌ語、ギリヤーク語という四つの言語をここでは環日本海諸語と呼ぶことにしよう。この言語群は、もちろん通常の意味での語族とは同一視できないけれども、すでに述べたように、年代的に極めて奥行き深いところをつなげる可能性が高い。その年代は、もちろん日本の縄文時代以前、日本列島がまだ大陸の一部をなして、日本海があたかも内海のような様相を呈していた後期旧石器時代まで遡ると見てよいだろう。

このように輪郭づけられた環日本海諸語は、これまでに扱った諸特徴で見る限り、確かに一つのまとまりを作っているが、その内部をもっと身近に眺めれば、もちろん様々な違いが認められる。それは、これまで指摘されてきたような基礎語彙における深甚な隔たりにとどまらず、言語構造の様々な面にわたっている。とりわけ、同じ日本列島の中で隣接する日本語とアイヌ語の間には、そのような言語差が著しく、これまで両言語の系統関係に関して大きな否定材料とされてきた。

例えば、金田一京助氏によれば、アイヌ語は日本語だけでなく近隣のいかなる言語とも系統的につながらないあたかも言語世界の孤島のごとき存在であるとされた⁵³。同氏はまた、コッペルマンの「ユーラシア語族」説 (Koppelman 1933) に言及してこう述べている。

さて、そのギリヤークとアイヌとを朝鮮語へ結びつけて一語族内の言語と考うるに至っては、全く認識不足も甚だしくその軽率な臆断にあきれるほかが無いのである。(金田一 1938 = 『全集』1: 387)

ちなみに、金田一氏は日本語の系統に関しては“ウラル・アルタイ説”の熱心な支持者であった (松本 2000a: 3)。

いずれにせよ、アイヌ語と日本語あるいはギリヤーク語と朝鮮語との間の違いが、はたして同系関係にとってそれほど大きな障害となるものなのかどうか、以下、このような問題に答えるために、特にアイヌ語と日本語の間で異なった現れ方をする言語現象に焦点を当てながら、一方ではまたそれぞれの言語圏の性格をより明確に浮き彫りにするような、いくつかの興味深い言語特徴を取り上げてみたい。

3.1 動詞の人称標示 —— 単項型～多項型～無標示型

ここで人称標示というのは、動詞の活用形態の中に組み込まれた動詞の役柄 (いわゆる主語や目的語など) に関わる標識である。日本語や朝鮮語の動詞には、このような人称標示が全く

53 「アイヌ語のこういう抱合語的性質や輯合語的傾向は、すべて、日本語や朝鮮語や、ツングース語、その他の北東隣や南隣のウラルアルタイ族のいわゆる膠着語とは一つ、言語上の範疇を異にした別種のものであり、支那方面のいわゆる孤立語には、なお更遠いことでその隔たりが、ほとんど両極に近い性質のものである。マライ・ポリネシアの方とても、かつて膠着語か孤立語であって、かつてこういう事のあるということは聞かない。そうしてみると、この話し手の住む国土が東海の飛島である如くに、アイヌ語そのものもまた本当に、世界言語の飛島を成して居るが如に見えるものだという結論になって来るものである」(金田一 1927 = 『全集』5: 77f.)。

欠けているが、例えばラテン語やトルコ語の動詞活用を見ると、表2のようにになっている。

ラテン語	トルコ語	日本語
ama-ba-m	sev-di-m	(私が) 愛した
ama-ba-s	sev-di-n	(君が) 愛した
ama-ba-t	sev-di-Ø	(彼が) 愛した
ama-ba-mus	sev-di-k	(我らが) 愛した
ama-ba-tis	sev-di-niz	(君らが) 愛した
ama-ba-nt	sev-di-ler	(彼らが) 愛した

表2：ラテン語とトルコ語の動詞活用

このように、ラテン語やトルコ語では、他動詞、自動詞を問わず、動詞の「主語」にあたる人称だけが動詞活用の中に取り込まれている（下表のイタリック体で示された「人称語尾」と呼ばれる部分がそれである——なお、人称語尾の前のラテン語 *-ba-*、トルコ語 *-di-* は日本語の「-た」に相当する過去を表す接辞）。

これに対して、例えばアイヌ語の動詞活用は、概略、表3のようである⁵⁴。

<i>ku-i-kore</i> 「我-あなたに-与える」	<i>i-kore-an</i> 「我ら-あなたに-与える」
<i>e-en-kore</i> 「汝-我に-与える」	<i>echi-en-kore</i> 「汝ら-我に-与える」
<i>a-en-kore</i> 「あなた-我に-与える」	<i>a-en-kore</i> 「あなた方-我に-与える」
<i>e-un-kore</i> 「汝-我らに-与える」	<i>echi-un-kore</i> 「汝ら-我らに-与える」
<i>a-un-kore</i> 「あなた-我らに-与える」	<i>a-un-kore</i> 「あなた方-我らに-与える」

表3：アイヌ語の動詞活用

このように、アイヌ語では主語だけでなく目的語の人称も活用組織の中に取り込まれている（下表でイタリック体で示された「人称接辞」と呼ばれる部分。なお、この活用形の中には、「汝我にくそれを>与える」の<それを>に当たる「3人称直接目的語」も、“ゼロ標示”という形で含意されている）。金田一氏によれば、このような動詞活用がアイヌ語を日本語その他周辺の諸言語から隔てる最も大きな相違点とされたのである。

動詞における人称標示の形態的な現れ方は、それぞれの言語の細部について見れば、極めて多種多様である。しかし、ここでは世界言語の人称標示のタイプを大きく二つに分けて、ラテン語やトルコ語のように動詞活用の中で常に主語人称だけを標示するタイプを単項型人称標示、それに対してアイヌ語のように主語以外の目的語その他の人称も標示するタイプを多項型人称

54 これはもちろんアイヌ語動詞の人称標示の完全なパラダイムを示すものではない。この表は金田一 1931 (=『全集』5: 257) に基づいている。アイヌ語の人称接辞全般については、田村 1971、Tamura 2000: 47ff. を参照。なお、アイヌ語では人称が明示的に標示されるのは1人称と2人称だけで、いわゆる3人称は原則としてゼロ標示である。同様の現象は他の多くの言語に認められる。

標示と呼ぶことにする。また、日本語のように、動詞活用の中で主語、目的語を問わず人称を全く標示しないタイプを**人称無標示型**と名付けて、人称標示の第3のタイプとして位置づけることにしよう。

単項型の人称標示に比べて、**多項型人称標示**は、その構成が複雑なだけに様々な変種が見られる。しかし、これも大きく分けると**分離型**と**一体型**という二つのタイプに分類できるだろう。**分離型**というのは、上のアイヌ語の例で見たように、主語人称と目的語人称（およびその他の関与者）が形態的にそれぞれ別個に標示されるタイプである。このタイプでも、アイヌ語やバントゥー諸語の人称接辞のように、その接辞法が極めて透明な場合もあれば、イロコイ諸語やあるいはエスキモー語でも部分的に見られるように、二つの接辞が固く結びついてその境界が不透明になっている場合もあり、時には分離型か一体型かの判断が難しいケースもある。

分離型に対して**一体型**は、主語人称と目的語人称が一つの形態素の中に完全に融合というよりもむしろ合体して現れるもので、外見的にあたかも単項型人称標示のような様相を呈する。このタイプは、主語人称と目的語人称との組合せの数に応じて標示形態の数も増えるので、理論上そのシステムはかなり複雑なものになり得るけれども、実際にはそれほど複雑とは限らない。人称体系そのものが比較的単純な言語では、主語人称と目的語人称の可能なすべての組合せに対応した標示形式を備えたシステムも見られる。例えば、南米アンデス地域のアイマラ語の人称標示はその適例である (Hardman et al. 1988)。表4を参照されたい。→の左が主語人称、右が目的語人称である。

人称	I → II	I → III	II → I	II → III	III → I	III → II	III → III	III → IV	IV → III
接辞	-sma	-ta	-ista	-ta	-itu	-tam	-i	-istu	-tan

表4：アイマラ語の人称標示

ここでI、II、IIIはそれぞれ1人称、2人称、3人称、IVは1+2人称、つまり話し手と聞き手の包括人称で、これについては後に触れる (§3.3)。示された人称接辞は直説法現在形のそれである（上表ではI → IIIとII → IIIが同形となっているが、この言語と親近なハカル語では前者は-ta、後者は-thaで現れる (Hardman 2000: 50)）。アイマラ語の若干の活用例を挙げれば、chur-sma「我汝に与える」、chur-ista「汝我に与える」、chur-tam「彼汝に与える」など。なお、アイマラ語では人称代名詞で複数の標示は可能であるが、数は義務的なカテゴリーとして確立されていない（後出 §3.3 表15）。

一体型の人称標示は、このように主語人称と目的語人称のすべての組合せにそれぞれ別個の標示形態が振り当てられるというケースよりも、むしろ、1人称、2人称、3人称などにそれぞれ一種類の標示形態しかなく、主語・目的語という文法関係は、人称間の階層性およびそれと結びついた**逆行態** (inverse) と呼ばれるような手段によって表されるというケースの方が普通である。その典型的な例として、アルゴンキン諸語の中のクリー語の人称標示を表5に挙げる (Wolfart 1996)。

人称	I ~ III	II ~ III	II ~ I	IIIp ~ IIIo
直行形	ni-wapamah	ki-wapamah	ki-wapamih	o-wapamah
日本語訳	我彼を見た	汝彼を見た	汝我を見た	彼p 彼o を見た
逆行形	ni-wapamikoh	ki-wapamikoh	ki-wapamitih	o-wapamikoh
日本語訳	彼我を見た	彼汝を見た	我汝を見た	彼o 彼p を見た

表5：クリー語の人称標示

これで見ると、クリー語の人称の標示形態は、それ自体としては、*ni-*（1人称）、*ki-*（2人称）、*o-*（3人称）の3種しかない。人称の複数性は、接尾辞の中で別個に標示される。なお、表の上欄で IIIp は3人称の「親近称 proximate」、IIIo は3人称の「疎遠称 obviative」と呼ばれるもので、発話の当事者に対するいわば親近度によって区別される。クリー語（および他のアルゴンキン諸語）で、これら4つの人称は次のような厳格な階層性に支配されている（→の左側が上位者）。

2人称→1人称→3人称親近称→3人称疎遠称

動詞の人称標示は常にこの階層に従い、直接標示される人称は、階層の上位者だけである。そして上位者が主語（＝動作主）である場合は直行形（direct form）、上位者が目的語（＝被動者）の場合は逆行形（inverse form）が用いられるわけである。ユーラシアでは、チベット・ビルマ諸語の主として西方群に見られる人称標示のシステムの中に、このような階層性に支配された一体型のタイプが見られる⁵⁵。

なお、多項型の人称標示では、主語・目的語という文法関係の扱い方に着目すると、**対格型**（自動詞の主語と他動詞の動作主を同じに扱い、他動詞の被動者（＝目的語）と区別する）、**能格型**（自動詞の主語と他動詞の被動者を同じに扱い、他動詞の動作主と区別する）および**動格型**（他動詞・自動詞を問わず、能動者<active>と所動者<inactive>を区別する）⁵⁶の三つのタイプが下位区分できる。このうち世界言語で圧倒的に多いのは対格型であるが、アメリカ大陸では動格型もしばしば見られる（北米ではスー、イロコイ諸語、ポモ諸語（ホカ系）、南米ではトゥピ・ワラニ、カリブ、マクロ・ジェーなどの諸言語に多い）。人称標示で首尾一貫した能格型は、中米のマヤ諸語に一部見られるけれども、極めて稀である。本稿ではこの区別に深くは立ち入らない。

さて、以上に概略した人称標示のタイプが世界諸言語の中でどのような現れ方をするかについては、【別表1～2】<動詞の人称標示>の欄および地図5:【動詞の人称標示タイプの分

55 通常、多項型人称標示の言語には単項型（あるいは無標示型）の言語にしばしば見られる能動態と受動態の区別（いわゆるヴォイス）のような現象は存在しない。逆行態のシステムは、このような受動態とやや通じるところがあるけれども、能動態と受動態のように自由な選択は許されない。なお、人称の階層関係で、アルゴンキン諸語では2人称が1人称の上位に位置づけられているが、これは比較的珍しい。通常は、1人称が2人称より上位か、あるいは同等である場合が多い。

56 このタイプでは、いわゆる自動詞の中に動態動詞と静態動詞が区別され、動態動詞では他動詞の動作主と、静態動詞では他動詞の被動者と同じ人称標示が現れる。

布】を参照されたい。

まず、**単項型人称標示**について見ると、このタイプは、複式流音型および形容詞体言型と同じように、アフリカ北部からユーラシア内陸部の諸言語に集中して現れるが、それらの分布と完全には重ならない。すなわち、ユーラシアで単項型人称標示を持つ言語群は、セム、インド・ヨーロッパ、ドラヴィダ、ウラル、そしてアルタイ諸語という内陸部の主要な語族だけで、しかも語族内部でのその現れ方は極めて均質である⁵⁷。

ユーラシア内陸部で最も広域な部分を占める単項型のこれら大規模語族に対して、バスク語、ケット語、ブルシャスキー語、そしてコーカサスの諸言語など、この地域に散在する系統的に孤立した諸言語は、ほとんどすべて多項型の人称標示を示している。また、シュメール語に代表される古代オリエントのいくつかの孤立言語も、同じタイプだったと見られる⁵⁸。

次に、太平洋沿岸部に目を転ざると、ここには典型的な単項型人称標示はほとんど現れない。この地域で最も優勢なのは**人称無標示**のタイプで、中国から東南アジアを含むその中心部に大きな拡がりを作っている。すなわち、中国語、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語、モン・クメール諸語、チベット・ビルマ諸語の中の主にビルマ・ロロ語派を中心とする東部群、マレー半島からインドネシア西部を占めるオーストロネシア諸語である。そして環日本海諸語の中では、日本語と朝鮮語がこの大きな人称無標示圏の仲間に加わる。

それに対して**多項型人称標示**は、この無標示圏の周辺部にかなり散発的な形で分布している。すなわち、沿岸部北方ではチュクチ・カムチャツカ諸語とエスキモー・アリュート諸語、環日本海域ではアイヌ語とギリヤーク語⁵⁹、南方では、ヒマラヤから中国南西部にかけてチベット・ビルマ諸語の中のいわゆる「代名詞化言語」⁶⁰、東部インドのムンダ諸語、そしてインドネシア

57 ウラル諸語の一部に見られるいわゆる「対象活用」は、多項型人称標示の一形態と見なすこともできる。しかしウラル諸語でこの現象は、多くの場合、目的語の人称よりもむしろ目的語の定・不定あるいは数の標示に関わり（オビ・ウゴル語とサモイェード語では、3人称目的語が定のときその数を表し、ハンガリー語では定・不定のみを表す）、完全な人称標示と見られるのは、モルドヴィン語などごく一部の言語に限られる。また、ユカギール語も単項型である。なお、北部アフリカでは、ナイル・サハラ諸語の東のグループ、特にナイル語派の一部、例えば、アニュー語（Reh 1998）、ランゴ語（Noonan 1992）、ナンディ語（Creider & Creider 1989）などに多項型（分離）と見られる言語が現れる。また、アフロ・アジア語族の中で、クン諸語の一部（ベジャ語、アウイヤ語、ピリン語など）や現代のベルベル語に多項型が現れ、一方、チャド諸語は無標示型を示している。

58 コーカサス諸語の中で北東群に属する多くの言語は、動詞とその項（すなわち自動詞の主語と他動詞の目的語）との間に能格型の性・数の一致が現れるが、この一致の現象に人称は直接関与していない。従ってここでは人称標示とは見なさず、人称無標示のタイプとして扱った。また、アグル語やレズギ語のように、性・数の一致を失った言語では、完全な人称無標示型も現れている（Schmidt 1994: 188）。ただし北東群の言語の中にも、おそらく周辺のチュルク系言語の影響で単項型の人称標示を獲得したと見られる言語もある。例えば、ダゲスタン最南部のタバサラ語やアゼルバイジャン北部で話されるウディ語など（Schulze 1997: 45）。

59 現在のギリヤーク語では、他動詞の目的語となる人称（1人称 n'i-、2人称 ci-、3人称 i-）が動詞に前接して現れるけれども、主語人称は動詞活用の中に取り込まれておらず、従って完全な意味で多項型とはいえない。ただし、主語との一致と見られる現象は動詞のいくつかの活用形の語尾に現れ、おそらく主語人称標示の痕跡と見てよいだろう。

60 チベット・ビルマ諸語に見られる「代名詞化現象」は、かつてはヒマラヤ地域の一部の言語における二次的な発達と見られてきたが、最近ではむしろチベット・ビルマ祖語に遡る古い活用体系の残存とする説が有力である（チベット・ビルマ諸語の動詞の人称標示については、Nagano 1984, Driem 1993, Nishi 1995などを参照）。これらの言語のいわゆる代名詞化現象はかなり多種多様であるが、ヒマラヤ地域の例えばチャムリン語やハユ語などは、明らかに逆行態（inverse）をもつ階層型である（Ebert 1997, Michailovsky 1988: 81ff.）。一方、中国四川省北西部で話されるギャロン語の人称標示は、階層型ではあるが逆行態のシステムは確立していないようである（Nagano 1984: 181ff.）。このような場合、標示された人称の主語・目的語という文法関係は必ずしも明確ではない。

東部からマイクロネシアに分布する一部のオーストロネシア諸語である。なお、ユーラシアの多項型人称標示は分離型が最も多く、一体型は、手許のデータで見える限り、チュクチ・カムチャツカ諸語とチベット・ビルマ諸語に見られるだけである。いずれも逆行態ないしそれに類したシステムを備えている。

アイヌ語の人称標示は、すでに見たように極めて透明な接辞法に基づいているが、インドネシア東部からマイクロネシアにかけて分布するオーストロネシア諸語の人称標示も、同様にその接辞法は透明である。こちらでは動詞語幹を挟んで、主語人称は接頭辞、目的語人称は接尾辞として現れ、完全な分離型である⁶¹。一方、ムンダ諸語の人称標示は、ムンダリ語では、主語・目的語とも接尾辞として現れるが、主語標示の形態は動詞末を離れて動詞の前に移動することも可能で、接辞というよりも接語 (clitic) 的な性格を有する (Osada 1992: 64)。またコルク語では、動詞の人称標示は必ずしも義務的でなく、無標示型にかなり近づいているように見える (Nagaraja 1999: 67ff.)。

このように、ユーラシアにおける多項型人称標示は、内陸部では地理的、系統的に孤立した言語のみ集中し、太平洋沿岸部では周辺部の諸言語に散在するだけで、その分布には全く連続性がない。それに対してアメリカは、南北両大陸を通じて多項型人称標示の最も広範な分布圏を形成している⁶²。多項型以外でこの大陸に見られるのは人称無標示型であるが、その分布圏は比較的限られ、また多少とも規模の大きい語族が全体として無標示型を示すというケースはほとんどない。北米で無標示型が比較的多く見られるのは、主としてカリフォルニアに分布するペヌート系およびホカ系の諸言語で、ここには「多総合語」からはほど遠い「孤立語」的な言語も少なくない。ほかに合衆国南西部に分布するユート・アステカ諸語も無標示型であるが、これと系統的につながる中米のナワトル語やテペワ語は多項型の人称標示を呈示している。

中米では、その中心部に位置してメソアメリカ最大の語族であるオト・マング諸語の中に無標示型が最も多く現れるが、オトミ語、チナンテコ語などは多項型の人称標示を保っている (この語族の人称標示の詳細については、まだ不明な点が多く残されている)。

中米の無標示型は、ここからチブチャ諸語 (ここでは無標示型と多項型が共存) を介して、

61 例えば、カロリン諸島西北部のウォレイ語の例を挙げれば、*i-sa-weri-g* 「我一完了ー見るー汝を」、*go-sa-weri-yei* 「汝一完了ー見るー我を」、*re-sa-weri-gish* 「彼らー完了ー見るー我らを」など (Sohn 1975: 107)。

なお、インドネシア西部を占める中心部のオーストロネシア諸語は完全な無標示型となっているが、フィリピンから台湾にかけて分布する言語には、動詞の項ないし関与者のいずれかを主役ないし主題として取り立てる「焦点化」と呼ばれる独特のシステムが動詞活用の中に組み込まれている。これはおそらく失われた古い人称活用のいわば代償として発達したものではなからうか。いずれにしても、オーストロネシア諸語における古いこの語族本来の動詞活用がどのようなものであったか、今後の研究の進展に待たなければならない。なお、インドネシア西部でもスマトラ島最北端のアチェ語には分離型の人称標示が見られ (Durie 1985)、また Himmelmann 1996: 131 によれば、台湾最南端に位置するパイワン語も人称標示 (階層型) を持っている。

62 かつてアメリカ哲学会会長のデュ・ポンソーが先住のアメリカ諸語の最大の特徴として多総合性 (polysynthétique) を挙げ、またフンボルトが「多総合語」なるものを「孤立語」、「膠着語」、「屈折語」と並ぶ人類言語の第4のタイプと見なしたのも、このような多項型人称標示と結びついた「動詞複合体」の複雑な構造に強く印象づけられたからにほかならない。デュ・ポンソーによれば、この言語タイプは「グリーンランドからチリに至るまで、一つの例外もなく、すべての言語を覆い尽くしている」とされた (Du Ponceau 1838: 86f.)。北米の太平洋沿岸部や南米アマゾン地域の人称無標示ないし“孤立”型諸言語の存在は、当時は全く知られていなかったからである。

南米の中央部、アマゾン低地へと延びている。アマゾン地域の無標示型は、特にその北東部でトゥカノ系の言語を中心にその周辺諸言語へと拡がりを見せ、そこからさらに南に延びて、ブラジル南西部からペルー、ボリビアの国境地帯に分布するパノ・タカナ諸語が無標示型の大きな分布圏を作っている。アンデス山地南部からパタゴニア、フエゴ島の詳しい状況は不明であるが、この地域で最も有力な言語マブドゥング（別名アラウカノ）語は逆行態をもつ一体型の人称標示を持つけれども（Zuniga 2000）、この大陸の最南端を占めるカウエスカル（別名アラカルフ）語やヤマナ語は無標示型のようなものである。

南米の多項型人称標示に関して注目されるのは、中米南部からアマゾン地域に及ぶこの大陸の中央部を占める言語群は分離型、それに対してこの大陸の西側を占めるアンデス高地の言語群（ケチュア、ハキ・アイマラ、アラウカノなど）および東側のベネズエラ南東部からブラジルの東部および南部に延びる大西洋沿岸部を占める言語群（すなわち、カリブ、マクロ・ジェー、トゥピ・ワラニなど）は、一体型の人称標示を持っていることである（その多くは逆行態のシステムを備えている）。

多項型人称標示は、アメリカ大陸だけでなく、サハラ以南のアフリカやオセアニアでも極めて優勢である。

サハラ以南のアフリカで最大の分布域を持つバントゥー諸語の人称標示は、アイヌ語とほぼ同じ透明な接辞法による分離型で、主語接辞が第1位置、次が時制接辞、そして目的語接辞が第3位置に現れるという配置が最も一般的である⁶³。しかし、ニジェール・コンゴ語族の西のグループ、特にマンデ諸語やグル諸語、またウォロフ語、ヨルバ語、イグボ語、ジクン語など広域に分布する大言語を中心に、大西洋からギニア湾に至る西アフリカの沿岸部に、あたかも太平洋沿岸部を思わせるような無標示型の大きな分布圏が現出し、そこからさらに北方へハウサ語を含むチャド諸語までその分布を拡げている。ここには、中国語のような孤立語的形態法を持った言語も決して珍しくない。

オーストラリアの人称標示もかなり透明な接辞法による分離型で、言語によっては接辞というよりもむしろ接語（clitic）的な振る舞いを見せる場合もある。人称接辞は、大別すると接頭辞型と接尾辞型に分けられ、この二つのタイプがオーストラリアの諸言語を大きく二分している。すなわち、接頭辞型は小言語ないし小言語群が密集するこの大陸の北西部に集中して現れるのに対して、北西部を除くこの大陸のほぼ全域に分布するパマニュンガン諸語は、接尾辞型に属している。ただし、オーストラリアの全域が多項型の人称標示によって覆われているわけではなく、この大陸の内陸部を北東から南西に向かって分断しながら、その中央部に無標示型の大きな分布圏が形成されている⁶⁴。

63 例えばスワヒリ語で *ni-na-ku-shukuru* 「我-現在-汝に-感謝する」、*a-ta-ni-shukuru* 「彼-未来-我に-感謝する」、ンゴレ・キガ語で、*n-ka-ki-mu-ha* 「我-過去-それを（類接辞）-彼に-与える」など（Taylor 1985: 171）。

64 ブレイクによれば、オーストラリア原住民語のおよそ4分の3、すなわち、すべての非パマ・ニュンガン諸語とパマ・ニュンガン諸語の半数以上の言語が接辞または接語による人称標示の形態を持っている（Blake 1987: 100）。

パプア系ニューギニアも全般的に分離・多項型の人称標示が優勢である⁶⁵。それと並んで無標示型（ときには単項型と見られるようなケース）も現れるが、その地理的分布の詳細はまだ明らかでない⁶⁶。

以上が世界言語における人称標示タイプの地域・語族的分布のあらましである。これによってほぼ明らかのように、アイヌ語に見られるような多項型人称標示は、一部の言語に限られた特殊な現象では決してなく、世界言語の全域に広く分布し、従ってまた人類言語に古くから備わったごく一般的な特徴と見なければならぬ。それに対して、アフリカ北部からユーラシアの内陸部を特徴づける単項型人称標示は、この地域における大規模語族の発達に伴って広がった新しい、その意味でまた特殊なタイプと見てよいだろう。しかしユーラシアでは、この新しいタイプの出現によって、古い多項型人称標示は周辺部へと押しやられ、典型的な残存分布の様相を呈するに至ったのである。

一方、日本語に見られるような人称無標示型は、太平洋沿岸言語圏の中心部だけでなく、他の地域でも多項型人称標示圏の中に様々な形で現れている。これらの無標示型分布圏がどのようにして形成されたかは、一概には答えられない問題である。しかし、多くの地域の無標示型がかなり連続的な分布、その意味でまた中心分布の様相を呈している点から見て、古い特徴の残存というよりも、むしろ元あった人称標示を失うことによって生じた新しい特徴と見てよいだろう。またこのタイプの発生には、とりわけ、言語接触によって引き起こされる形態法の単純化（あるいはむしろ衰退や崩壊）が大きな要因として働いた可能性が高い。

太平洋沿岸部の人称無標示圏の少なくとも一つの中心は、中国大陸である。ここからの伝播による人称標示の消失が最も明瞭に看取されるのは、ツングース語の中の満州語と女真語、モンゴル語の中の蒙古（文）語である。これらはいずれも中国語との接触によって本来持っていた“アルタイ的な”単項型人称標示を失った。ほかに、モンゴル系の言語では、中国甘粛省のモンゴル語、パオアン（保安）語、ドンシャン（東郷）語、またチュルク系のサラル語やサリル・ヨグル語も人称標示を失っているが、いずれも中国語の勢力圏に取り込まれた言語である。しかし、これらアルタイ系の諸言語と中国語との接触による無標示型の出現は、東アジア全体の言語史から見ればごく最近の出来事にすぎない。

日本列島から東南アジア島嶼部まで及ぶ世界でも最大級のこの無標示型分布圏の形成は、かりにそれがこの地域の言語改新に由来するとしても、アルタイ系言語の進出よりは遙かに遠い過去に遡ると見なければならぬ。それは中国大陸からインドシナ半島にまで及ぶ広範な単音節型声調言語の出現という東アジアでおそらく最も大規模な「ドリフト」現象の一局面と見て

65 例えば、ニューギニア・マダン地区のアメレ語で、*get-it-i-na*「切る-我を-彼-現在」、*get-ih-i-na*「切る-汝を-彼-現在」（Roberts 1987: 279）、ニューギニア西部高地のダニ語で、*wat-h-i*「打つ-彼を-我」、*wat-h-ip*「打つ-彼を-汝ら」など（Foley 1986: 68）。ニューギニアではこのような接尾辞が優勢であるが、セビック川下流域のイマス語では接頭辞が現れる。例えば、*pu-ka-tay*「彼らを-我-見た」、*mpu-nga-tay*「我を-彼ら-見た」など（Foley 1991: 200）。

66 パプア諸語の動詞の人称標示の概略については、Foley 1986: 128ff. を参照。

よいだろう。またこの地域で失われたのは、太平洋沿岸部を含めた世界全体の人称標示の分布から見て、満州語や蒙古語のような単項型人称標示ではなく、アイヌ語、ムンダ語、一部のチベット・ビルマ諸語、オーストロネシア諸語などに見られるのと同じ多項型人称標示であったとするのが最も自然な解釈である。

このように見てくると、日本語とアイヌ語の間に見られる人称標示の違いは、環日本海域に現れた一方は改新特徴、他方は残存特徴という違いに帰せられるもので、これまで考えられてきたように、両者の系統関係にとって決定的な障壁となるようなものでは決してないのである。

3.2 名詞の格標示 —— 対格型～能格型～中立型

動詞の人称標示と密接に関連する文法現象として名詞の格標示がある。

名詞の格標示のななめとされるのは、他動詞のいわゆる主語と目的語の標示に関わるもので、例えば日本語では「太郎が手紙を書く」という文で見られるように、「が」と「を」という格助詞がそのような機能を担っている。主語、目的語という文法関係は、前節で見たように、動詞の人称標示によって表すことも可能であり、従って両者は密接な関係に立つわけであるが、ここでは格標示を、厳密に名詞の側での接辞や接置詞などによる明示的な表現形態に限ることにする。そうすると、諸言語における格標示は、大別して、**対格型**、**能格型**、**中立型**という三つのタイプに分けることができる⁶⁷。

対格型は、日本語のように、自動詞の主語と他動詞の動作主を同じ格（＝主格）で表し、一方他動詞の目的語を特別の格（＝対格）で標示するタイプである。表6の日本語とラテン語の文例を参照されたい（ラテン語の二つの文は日本語のそれにほぼ対応する）。

	主格	対格	動詞
日本語	母が	—	来る（自動詞）
	母が	娘を	愛する（他動詞）
ラテン語	mater	—	venit（自動詞）
	mater	filia-m	amat（他動詞）

表6：対格型の格標示

それに対して**能格型**は、自動詞の主語と他動詞の目的語を同じ格（＝絶対格）で、他動詞の動作主を別の格（＝能格）で標示するタイプである。表7のバスク語とエスキモー語（アラスカ中央ユピック語）の文例を参照されたい（文意はそれぞれ「娘が来る」「母が娘を愛する」）。バスク語で *-k*、エスキモー語で *-m* がそれぞれ能格の標識である。

67 前節で動詞の人称標示の第3のタイプとして分類された**動格型**は、名詞の格標示のタイプとして理論的には可能であるが、名詞の側で首尾一貫して動格型の格標示（つまり能動格と所動格の区別）を示す実際の言語例は、ほとんど知られていない。

	能格	絶対格	動詞
バスク語	—	alaba	dator (自動詞)
	ama- <i>k</i>	alaba	maite-du (他動詞)
エスキモー語	—	panik	itertuq (自動詞)
	aana- <i>m</i>	panik	kenkaa (他動詞)

表 7 : 能格型の格標示

一方、中立型は名詞の側で他動詞の主語と目的語を形態的に首尾一貫して区別しないタイプである。このような格をかりに無標格と呼ぶことにしよう。表 8 のアイヌ語とクリー語の文例を参照されたい。

	無標格	無標格	動詞
アイヌ語	hapo 「母」	matnepo 「娘」	nukar 「見た」
クリー語	ni-tanis 「私の娘 (IIIp)」	o-tanis 「彼の娘 (IIIo)」	o-wapamah 「見た」 (直行形)
	ni-tanis 「私の娘」	o-tanis 「彼の娘」	o-wapamikoh 「見た」 (逆行形)

表 8 : 中立型の格標示 (A)

これで見ると、アイヌ語では他動詞の主語と目的語がいずれも 3 人称 (単数) の場合、両者を形態的 (つまり明示的) に区別することができない。上の文は「母が娘を見た」とも「母を娘が見た」とも解釈できる。それに対して、すでに述べたように、クリー語は 3 人称に近親称と疎遠称の区別があり、上例の ni-tanis 「私の娘」と o-tanis 「彼の娘」では、通常、前者が近親称となり、後者 (=疎遠称) より人称階層の上位を占める。従って前者が主語 (=動作主)、後者が目的語 (=被動者) の場合は直行形、逆の場合は逆行形を取ることとなり、結果として、アイヌ語のような曖昧さは生じない。

しかし、中立型の多くの言語は、クリー語のような逆行態システムとは別の手段、すなわち語順という簡便な方法を主語と目的語の区別に役立てている。例えば、英語がその手近な例である。表 9 を参照されたい。

	主語	動詞	目的語	
英語	The dog	chases	the cat.	「犬が猫を追う」
	The cat	chases	the dog.	「猫が犬を追う」

表 9 : 中立型の格標示 (B)

ここでは、上の二つの中立型格標示を特に区別する場合には、前者を中立型 A、後者を中立型 B と呼ぶことにしよう。

さて、以上に略述した名詞の格標示に関して、環日本海域では、アイヌ語とギリヤーク語は中立型、それに対して日本語と朝鮮語は対格型という違いが現れている。しかも、日本語と朝

鮮語の格標示は、主格と対格の両方がそれぞれ特別の格標識（日本語では、すでに述べたように、「ガ」と「ヲ」、朝鮮語では -i/ka と -il/lil）を持つという点で、対格型の中でも極めて特異なタイプを示している。日本語と朝鮮語のこの格標示の問題は後に取り上げることにして、まず世界言語全体の中で格標示のタイプがどのような現れ方をしているかを見渡してみたい（これについては同じく【別表1～2】<名詞の格標示>、また関連特徴として<語順のタイプ>の欄を参照されたい。一方分布図は、簡便のため、**地図6**で**能格型**の分布のみを示した）。

名詞の格標示のタイプは、先に見た動詞の人称標示のタイプとその分布が類似するけれども、完全に重なるわけではない。

この場合は、比較的分布の単純なアフリカから見ていくと、この大陸のサハラ以南の大部分を占めるニジェール・コンゴ語族は、ほぼ全面的に中立型に属している。また、西アフリカのマンデ諸語など一部の言語群を除いて、そのタイプは、バントゥー諸語に典型的に見られるように、厳格なSVO語順と結びついた中立型Bである。一方、大陸南端のコイサン語族は、中央群の一部の言語に主語・目的語の区別と結びついた形態的手段が若干見られるけれども、格標示の体系としては確立されていない（Voßen 1997: 174, 349）。北部および南部群は、ほぼバントゥー語に近い中立型と見られる。

アフリカ北部のアフロ・アジア諸語とナイル・サハラ諸語は、基本的に対格型と見られるけれども、サハラ以西に分布するナイル・サハラ諸語（ソングイ語を含む）やアフロ・アジア系のベルベル語とチャド諸語は、中立型を呈示している。これはおそらく、本来の格標示を失った結果と見られる。なお、アフリカには確実に能格型と見られる格標示の例は、これまでのところ知られていない。

アフリカ北部を特徴づける対格型の格標示は、これまでに見た他の諸特徴と同じように、ユーラシアの内陸部へとつながり、ここに対格型の広大な分布圏を形成している。これに属するのは、セム語族（＝アフロ・アジアB）、インド・ヨーロッパ語族、ウラル語族、ドラヴィダ語族、そしてチュルク、モンゴル、ツングースを含むアルタイ語群で、これらのユーラシアの主要語族は、おしなべて対格型を示している⁶⁸。

それに対して、ユーラシア内陸部の系統的孤立言語は、これまたおしなべて、能格型（さもないと中立型A）に属している。すなわち、シュメール語をはじめとする古いオリエントの諸言語（そしておそらくエトルリア語）、バスク語、ブルシャスキー語、大部分のコーカサス諸語がそれである。ユーラシア内陸部に散在するこの能格型の格標示は、さらにその分布を北方ではチュクチ・カムチャツカ諸語からエスキモー・アリュート諸語まで、南方ではチベット・ビルマ諸語の西方群まで拡げている。

68 セム語の中では、アッカド語、ウガリット語、古典アラビア語などがセム語本来の対格型格標示を保っているけれども、ヘブライ語やアラム語、また現代口語アラビア語はそれを失っている。また印欧語でも、近代ヨーロッパ諸言語の中で、ロマンス語、バルカン半島のスラヴ語、英語など一部のゲルマン語が格標示を失って、SVO語順と結びついた中立型Bへ移行している。またアジアでは中期イラン語と中期インド・アーリア語の時期に古い格組織が崩壊し、それに代わってイラン東部からインド西部の諸言語で能格的な格標示が出現した。しかしこれらの言語でも、それと並んで新しい後置詞による対格標識が発達し、またロマンス語の中でも、スペイン語やルーマニア語に同じような対格標示が出現している。

アフリカ北部からユーラシア内陸部に及ぶこの言語圏で、最も注目されるのは、格標示のタイプと人称標示のタイプがほぼ完全に重なり合っていることである。すなわち、一方で、単項型の人称標示と対格型の格標示、他方で、多項型の人称標示と能格型の格標示が連携している。そして、前者は大規模語族と結びついて連続した広域分布をなし、後者は多くは孤立した小言語群と結びついて地理的に分断された分布を見せている。

一方、ユーラシアの太平洋沿岸部は、中国から東南アジアに及ぶその中心部に中立型の大きな分布圏を拓いている。そのタイプは、サハラ以南のアフリカと同じように、SVO 語順と結びついた中立型 B であり、またその分布は、人称標示の無標示型のそれとほぼ重なっている。そしてこの中立型分布圏の周辺に、北方ではアイヌ語とギリヤーク語、南方ではムンダ諸語、チベット・ビルマ諸語の主に東方群が、SOV 語順と結びついた中立型、台湾からフィリピンに分布するオーストロネシア諸語が、VSO または VOS 語順と結びついた中立型の格標示を示している。

太平洋沿岸部で、対格型の格標示は極めて異例の現象で、環日本海域の日本語と朝鮮語のほかには、一部ポリネシアの諸言語に見られるだけである。ポリネシア諸語の前置詞 (i- および e-) による格標示は、この地域の新しい発達とされるが、同じ形式がポリネシアの東部諸語では対格型、西部諸語では能格型のシステムを生み出している (Hohepa 1969)。

次にアメリカ大陸では、格標示の分布はアフリカやユーラシアより幾分複雑である。まず北米は、極北のエスキモー・アリュート諸語を除いて、名詞の側で首尾一貫した能格型を示す言語はほとんど見られない。北米で最も優勢なタイプは、アイヌ語やクリー語で見たような、多項型人称標示と結びついた中立型 A である。これに属する主な語族ないし言語群は、アサバスカ (またはナデネ) 諸語、ワカシュ、セイリッシュなどの北西海岸諸語、アルゴンキン諸語、イロコイ諸語、スー・カド諸語などである。それに対して、合衆国オレゴン州からカリフォルニア州に分布するペヌート諸語、カリフォルニア南部からアリゾナ州に拓がるホカ諸語、その東方に位置するユート・アステカ諸語、さらに合衆国東南部を占める湾岸諸語などには、対格型の格標示を持つ言語が数多く見られる⁶⁹。またこれらの言語の多くは、すでに見たように、人称無標示型のタイプに属している。

中米では、マヤ諸語に能格型の人称標示が見られるけれども、名詞の格標示は、マヤ諸語を含めて大部分の言語が中立型に属している。

それに対して南米では、中立型、対格型、能格型の三つのタイプが共存ないし並立して現れる。まず対格型の格標示は、中米南部から南米北東部のチブチャ諸語から始まって、一方ではアマゾン北西部のトゥカノ諸語およびその周辺の小言語群へと拓がり、他方ではアンデス山地のケチュア語およびハキ・アイマラ語群が、対格型のもう一つの分布圏を作っている。それに対して、能格型の格標示は、ブラジル東部を占めるカリブ諸語とマクロ・ジェー諸語、ブラジル南西部からボリビアに分布するパノ・タカナ諸語およびアマゾンの一部の孤立言語に現れる。

69 これらの言語の中でペヌート諸語は、無標の主格に対して対格に特別な標識を与えるという意味で通常の対格型であるが、ホカ系のユマ諸語や湾岸のマスコギー諸語には、主格に特別な標識を与えるという特異な格標示が見られる。

それ以外の地域は概ね中立型で、南米最大の語族であるアラワク諸語、トゥピ・ワラニ諸語、またアンデス南部の小言語群なども中立型に属している。

このように、アメリカは南北両大陸を通じて、多項型人称標示と結びついた中立型が最も優勢であるが、それらはすべてA型であり、固定したSVO語順と結びついた中立型Bは、スペイン語や英語の影響によって生じたと見られる一部の例外現象を除き、全く現れない。

最後に、オセアニアのパプア系ニューギニアとオーストラリアは、世界言語の中で能格型の格標示が最も集中して現れる地域である。ただし、オーストラリアでは、同じ言語の中で、対格型と能格型が共存するという現象がしばしば見られる。これは名詞句の有生性（ないし親近度）の階層と関係するもので、簡単に言うと、人称代名詞や人間名詞など階層の上位では対格型、無生名詞など階層の下位では能格型が現れやすいという傾向になっているが⁷⁰、名詞の格標示だけに限れば、能格型が圧倒的に優勢である。しかしこの大陸の北西部を占める接頭辞型の諸言語（＝非パマニュンガン諸語）には、アイヌ語のような多項型人称標示と結びついた中立型の格標示が数多く見られる。

以上、格標示の分布について概観したが、この中で最も注目されるのは、すでに触れたように、ユーラシアの内陸部に現れた対格型の格標示で、これは一方で単項型の人称標示と分かち難く結びついている。動詞の人称標示によって文法上の主語を表し、名詞の格標示によって目的語を明示するというこのタイプは、明らかにユーラシアの中心部に現れた新しい言語タイプであり、後のヨーロッパ諸言語の著しい特徴となった主語優位性（subject prominency）という現象は（松本 1991）、ここにその源を発していると言ってよいだろう。

一方、環日本海域で日本語と朝鮮語だけに見られる特異な対格型格標示は、前述の一部ポリネシア諸語の場合と同じく、比較的新しい時期の発達で、その通時的なプロセスは、少なくとも日本語では、文献資料によってある程度確かめることができる。すなわち、主格の「ガ」は元来「ノ」と同じ連体格助詞で、体言的な動詞の連体形に接続するものであり、また対格の「ヲ」は、本来の格助詞というよりも、むしろ強調や焦点化などの談話的機能を担っていた⁷¹。日本語と朝鮮語との間でその用法に関しても著しい類似を示すこの格標示は、環日本海域における人称無標示型の出現と結びついた独自の発達と見ることももちろん可能であるが（北米のパヌート諸語やアマゾンのトゥカノ諸語に見られる対格型格標示もおそらく同じケースである）、しかしまた、言語接触——つまり環日本海域にまで波及した“アルタイ化現象”——の一面という可能性も考えられるであろう。

最後に付言すれば、本稿で中立型Bと呼んだ格標示、つまり、もっぱらSVOという語順によって他動詞の主語・目的語を区別するタイプは、現在、世界言語の中で二つの大きな分布圏を持ち、しかもそこだけに限られている。すでに見たように、一つはアフリカ大陸から地中海を越えて南ヨーロッパに至る地域、もう一つは中国大陸からインドシナ半島および東南アジア島嶼部を包含する地域である。いずれも連続した広域の分布圏を形成している。しかしこの分布圏

70 世界諸言語の人称標示のタイプの中で能格型が極めて稀なもの、これとおそらく関係している。

71 日本語と朝鮮語の主格、対格の格助詞は、現代語でもなお、その使用がある程度随意で、必ずしも義務化されていない（例えば、「雪降れば」～「雪が降れば」、「酒飲めば」～「酒を飲めば」など）。

の形成は、世界の言語史上それほど古い時期まで遡るものではない。仮に人類言語史を今から5千年前に遡ったとすれば、このタイプの格標示はおそらく地球上に全く存在しなかった可能性が高いのである。

その主たる根拠は、これらの地域の SVO 型語順がいずれも比較的新しい時期に発達したと見られるからである。ヨーロッパの印欧諸語でこの語順が出現したのは、高々 1000 年ないし 1500 年以内の出来事であり、アフリカ北部の SVO 語順も、この地域へのアラビア語の進出とおそらく関係している。またサハラ以南の SVO 語順は、今からおよそ 2000 年前に始まったバントゥー諸族の拡散によってもたらされた可能性が極めて高い。

一方太平洋の沿岸部で、このタイプを示す中国語やカレン語は系統的にシナ・チベット語族に属し、この語族の本来の語順は現在のチベット・ビルマ諸語に見られるような SOV 型であった。西部インドネシアで SVO 型を示すオーストロネシア諸語もその本来の語順は、この語族の周辺部に見られる動詞初頭型 (VSO/VOS) であったと見てよいだろう。実際、アフリカや東南アジアに限らず、世界の主要な語族で、語族内の比較研究が多少とも進んでいる限り、その祖語の段階まで遡って確実に SVO 型語順を持っていたと推定されるような語族はほとんど知られていない⁷²。とすれば、このようなタイプの言語の統語法にもつばらに基づいて普遍文法の構築を目指すことは、あたかも西洋中世の文法家がラテン文法の枠組みをそのまま人類言語の普遍性と信じたのと同じ誤りを犯すおそれがあると言わなければなるまい。

3.3 1 人称複数の包含・除外の区別

ここで取り上げるのは、従来の言語学用語で 1 人称複数の「除外形 exclusive」と「包含形 inclusive」の区別として知られてきた現象である。通常の解釈によれば、除外形とは聞き手を除外して話者と（話者と関係する）第 3 者からなる複数、それに対して包含形とは、その中に聞き手を含む複数を指すとされている。例えば、現在の日本語でも「私ども」や「手前ども」といえば、通常聞き手を含まず、一方、日本人同士の間で「我々日本人は」というようなときの「我々」は聞き手を含んでいる。しかし日本語ではこのような区別が人称代名詞のカテゴリーとして確立されているわけではなく、例えば「私たち」という表現には、聞き手を含む場合もあれば含まない場合もある。それに対して、例えばマレー語（＝ムラユ語）では、この区別が人称代名詞の体系の中に明確に組み込まれている。表 10 を参照されたい。マレー語と関係の近いインドネシア語もほぼ同じ体系である。

ところで中国語は、大方の現代諸方言を見渡しても、また過去の文献を遡っても、人称代名詞の体系内に明確な形でこのような区別は見られないけれども、現代の北京方言には、1 人称複数形に wǒ-men（我們）と並んで zán-men（咱們）があり、前者は除外形、後者は包含形として区別されている⁷³。

72 この問題について詳しくは、Matsumoto 1992、山本 1998、世界諸言語の語順タイプの分布については【別表 1～2】<語順のタイプ>の欄を参照されたい。

73 J. ノーマンによれば、zán-men の zá は、zi「自」と jiā「家」の融合形に由来し、もともと「自分」の意味で、すでに宋代から用法が見られるという (Norman 1988: 121)。しかし、この語の包含形としての用法は、おそらく、モンゴル・ツングース系言語の影響と見てよいであろう。

	単数	複数
1 人称	aku	kami (除外形) kita (包含形)
2 人称	engkau	kamu
3 人称	ia	mereka

表 10：マレー語の人称代名詞

1 人称複数のいわゆる包含・除外という現象の本質と世界言語に見られる様々なその変種についての立ち入った議論は、後に譲ることにして、ここではまず、このような現象が世界諸言語の中でどのように現れるかをざっと見渡すことにしよう。その地域・語族的分布については【別表 1～2】〈包含・除外〉の欄を参照されたい（+はこの区別が存在することを、-は欠如することを示す。±は同じ語族の中で区別する言語とそうでない言語が共存することを示すが、この特徴は多くの語族、地域でどちらかという後退的な傾向にあるため、一部の言語で明らかに比較的最近にこの区別を消失したと見られる場合は、それを無視して単に+としてある）。

まず環日本海諸語では、アイヌ語とギリヤーク語にはこの区別が見られるのに、日本語と朝鮮語にはこれが欠けており、先に見た動詞の人称標示の場合と同じような違いが、この場合も現れている。ただし、現在の琉球諸方言の多くはこの区別を持っている。例えば、南琉球の八重山石垣島方言では、1 人称単数 *banu/baa* に対して、複数除外形 *ban-daa* と包含形 *baga-daa* が区別され（宮良 1995: 139）、同じ南琉球の与那国方言では、単数形 *anu* に対して、除外複数 *banu*、包含複数 *banta*（『言語学大辞典』4: 875）、また沖縄本島の与那嶺方言では、除外形 *waQta:* に対して包含形 *warca:*、また北部の今帰仁方言では除外形 *?agami:* に対して包含形 *watt'a:* が区別される（同書: 836, 820）。

次に、太平洋沿岸部の南方圏に目を向けると、中国語では、上述の北京方言を除いて、この区別は見られないけれども、それ以外の語族、言語群では、すべてとは言わないまでも、多くの言語にこの区別が現れる。すなわち、ミャオ・ヤオ、タイ・カダイ、オーストロネシア、オーストロアジア、そしてチベット・ビルマの諸言語である。特にオーストロネシア諸語は、世界言語の中で包含・除外の区別が最も均一かつ集中的に分布する言語圏を作っている。チベット・ビルマ語圏も、他の特徴で見られたような東方群と西方群という地域的な違いはなく、ヒマラヤ地域からインドのアッサム地方、さらにビルマから中国の西・南部に至るまで、その分布が広がっている。オーストロアジア諸語の場合も、最西端のムンダ諸語から最東部のヴェトナム語まで、分布に切れ目は生じているけれども、この区別の存在ははっきりと確認できる。

ところで、この言語圏における包含・除外の区別の分布に関して最も注目されるのは、それぞれの語族の中で話者人口が多く、しかも文化的・社会的ないし歴史的に多少とも有力な言語が、この区別を欠いているという事実である。これらの多くの言語は、同時にまた文字言語の伝統を持っている。その中で最大規模の言語は、もちろん中国語であるが、チベット・ビルマ諸語の中では、チベット語（古典語も含む）、ビルマ語、カチン（ジンポー）語、アッサム地

方のマニプル語等々がそれである。オーストロアジア諸語の中でも、この語族を代表するモン語、クメール語にはこの区別が欠けている。大部分のタイ・カダイ諸語にはこの区別が見られるのに、この語族を代表するタイ語にはそれが欠けている。同様に、オーストロネシア諸語の中で包含・除外の区別を欠く数少ない言語として挙げられるのは、東南アジア島嶼部の文化的中心を占めてきたジャワ島のジャワ語、スンダ語、マドゥラ語、ジャワ島に隣接すバリ語、そしてインドシナ半島でかつて栄えたチャム王国のチャム語である。この点ではまた、環日本海域の日本語と朝鮮語もこれらの言語に勝るとも劣らない存在と言ってよいだろう。

これらの言語でなぜ包含・除外の区別が欠けるのかという問題は後に取り上げることにして、次にユーラシアの内陸部に目を向けると、この言語現象の現れ方は、これまでに考察したいいずれの場合とも完全には一致しない。ただこの分布で最も注目されるのは、ユーラシア大陸のほぼ西側を占める言語圏が徹底してこの区別を欠いていることである。すなわち、主要な語族としては、セム語族、インド・ヨーロッパ語族、ウラル語族、そしてアルタイ諸語の中のチュルク語族がこれに属する。しかもこれらは、現在話されている言語だけでなく、過去の記録を残す言語ではその歴史を遡る限り、さらにまたその祖語の段階まで遡っても、人称代名詞にこのような区別が存在した形跡が見られない。まさに語族ぐるみでこの区別を欠いているのである⁷⁴。さらにこれらの大規模語族に加えて、いくつかの系統的孤立言語が同じ特徴を共有する。すなわち、シュメール語（そしておそらく他の古代オリエント諸語）、バスク語、ケット語、ブルシャスキー語などである。これは地理的に見ると、中近東からヨーロッパまでの地域をほぼ完全に覆っている。特に重要な点は、ヨーロッパ世界が地域ぐるみでこの特徴を完全に欠如しているだけでなく、近世以降ヨーロッパ人がアメリカやオセアニア世界に進出するまで、ヨーロッパ人が知り得たいかなる言語にもこの種の現象が欠けていた、つまり言語的ヨーロッパにとって全く未知・無縁な現象であったということである。

ユーラシアの内陸部で包含・除外の区別を欠如するこの言語圏から離脱する語族は、インド亜大陸のドラヴィダ語、アルタイ諸語の中のモンゴル語とツングース語である。ここへさらにコーカサスの諸言語が加わる。ただし、コーカサス諸語の中でこの区別が最も集中して現れるのは北東群で、北西諸語と南（＝カルトヴェリ）諸語では、現状で見える限り、それぞれアブハズ語とスヴァン語にこの現象が現れるだけである⁷⁵。なお、アルタイ諸語がこの特徴に関して、西のチュルク語と東のモンゴル、ツングース両語との間で明確な一線を画しているのは注目に値する。

ユーラシア西部を覆う包含・除外の欠如圏は、シベリアを伝ってさらに東方へ延び、北米大陸北部までその分布を拡げている。すなわち、ウラル語族の東方群であるサモイェード諸語、

74 印欧語圏全体の中で、これに対する例外は、インド西南部のグジャラティー語、マラティー語、ラージャスターニー語のマルワニー方言だけである。いずれもドラヴィダ語の強い影響にさらされてきた言語である (Masica 1991: 251)。ちなみに、これらの言語で包含形として用いられた *āp-* は、サンスクリット語の *ātman* 「自分」に由来する再帰的な代名詞で、その発達は北京語の包含形 *zánmen* と相通ずる。この *āp-* はまた、他の多くのインド・アリア諸語で2人称の敬称として役立てられている。

75 スヴァン語でこの区別は、人称接辞として現れるだけで、独立代名詞では区別がない。なお、A. ハリスによれば、カルトヴェリ祖語には包含・除外の区別が存在したという (Harris (ed.) 1991: 43)。

ケット語に代表されるイエニセイ諸語から、さらにユカギール語、チュクチ・カムチャツカ諸語、エスキモー・アリュート諸語へと続き、最後はアラスカ・カナダに広がるナデネ語族まで達して、そこでこの分布圏は閉じられる。

次いで、ユーラシア以外の地域に目を転ざると、まずアフリカでは、包含・除外の区別は一般的に後退的な傾向を見せるものの、ユーラシアのように語族ぐるみでこれを欠如するというような現象は見られない。ユーラシアのセム語族とつながるアフリカのアフロ・アジア語圏を見ると、その周辺部を占めるオモ諸語（ディジ語、ベンチョ語、ガモ語など）、ソマリ語（クシ系ではこの言語のみ）、そしてチャド諸語（マルギ語、クレレ語など）の中にこの区別が現れるだけで、古代エジプト語やエチオピアのセム諸語のほか、バルベル語、エチオピアのクシ諸語には、この現象は見られない。一方ナイル・サハラ諸語は、ソングアイ語を含めてサハラ以西の諸言語は、この特徴を欠いているけれども、中央スーダン語群からナイル語群に及ぶ中心部の諸言語にこの区別が現れている（スーダン中央のヌバ丘陵地のニマング語、シャット語、リグリ語、ナイル上流域のシルク語、ボンゴ語、マヂ語、エチオピアのクナマ語、グムズ語、クワマ語など（Bender 1996: 17)）。

サハラ以南で最大の分布圏を持つニジェル・コンゴ語族は、西アフリカを中心に分布する非バントゥー系とその東・南部に広がるバントゥー系諸語の間に、はっきりとした違いが見られる。すなわち、包含・除外の区別が現れるのは、系統的に複雑な構成を見せるこの非バントゥー系の言語圏にほとんど限られる。バントゥー諸語の中でこの特徴が見られるのは、手許のデータで見る限り、地理的に最西端に位置するカメルーンのごく一部の言語だけである。従って、アフリカ大陸で包含・除外を欠如する最大の分布圏は、サハラ以南の東南部を占めるバントゥー語圏ということになるだろう。最後にコイサン語族は、中央群にも北・南部群にも、この区別を持った言語は決して少なくない。

次にアメリカ大陸は、先に見たエスキモーからナデネ諸語まで広がる包含・除外の欠如圏を除くと、南北両大陸を通じてこの区別はほぼ万遍なく分布している。語族や地域によってその分布に多少の親疎の違いがあるけれども、一つの語族ないし言語群が全面的にこの区別を欠如しているというケースはほとんどない。その意味で、アメリカ大陸は、オセアニアのオーストロネシア語圏と並んで、包含・除外を区別する最大級の分布圏を形成していると言ってよいだろう。

最後に、オーストラリアの原住民諸語およびニューギニアを中心とするパプア語圏に目を向けると、オーストラリア諸語にもこの区別はほぼ万遍なく現れる。ただし、この大陸の内陸中央部を占めるかなり多くのパマニュンガン諸語にはこの特徴が欠けているのが注目される。一方、パプア諸語の場合は、ニューギニア島の太平洋沿岸部から周辺の島嶼部に分布する諸言語には、この区別がかなり広範に現れる⁷⁶。しかもその人称代名詞の体系は、この地域のオーストロネシア諸語に見られるような、複数のほかに双数をもつ複雑なタイプが多い。それに対し

76 特に東部ニューギニアのセピク川流域にこの区別を持つ言語が多く見られる。例えば、ワリス語、ジャニモ語、モロベ地区のカテ語、ウェリ語、スエナ語、マダン地区のコボン語など。

て、ニューギニア島内陸部、特にその高地帯では、この区別を持つ言語は比較的稀であり、またその体系も単純である。この点を勘案すると、沿岸部のパプア諸語に見られる包含・除外の区別は、周辺のオーストロネシア諸語の影響によって生じたという可能性も考えられよう。

以上がいわゆる包含・除外の区別の世界言語における分布のあらましである。この特徴が、ユーラシア西部とその北方延長圏を除いて、世界言語のほぼ全域に行き渡っているという事実は、これが人類言語に古くから備わった重要な言語特徴であることを示唆している。

なお、この現象の地理的分布については、**地図 7:【包括人称を全面的に欠如する言語圏】**を参照されたい。

次に残されたのは、この言語現象の真の性格とは何か、また一部の言語圏でなぜそれが消滅したかという問題である。

すでに述べたように、この現象は、ヨーロッパ人が近世以降アメリカ大陸やオセアニア世界に進出するまで、ヨーロッパ世界では全く知られていなかった。伝統的な西欧文法で知られた人称代名詞の体系は、例えばラテン語に見られる次のような体系である（表 11）。

	単数	複数
1 人称	ego/me	nos
2 人称	tu/te	vos
3 人称	ille/illa/illud	illi/illae/illa

表 11：ラテン語の人称代名詞

これは言うまでもなく、三つの人称カテゴリーと単数・複数という数カテゴリーが不可分に結びついた体系である（この数カテゴリーに双数が加わるか否かは二義的な問題で、ここでは考慮する必要はない）。そしてこの枠組みは、単にヨーロッパ諸言語だけでなく、人類言語にとっても不変不動であると人々は信じて疑わなかった。ヨーロッパ人がオセアニアやアメリカ大陸で初めて出会った、同じ人称代名詞の中で 1 人称と 2 人称が同時に関与するという“珍奇な”現象も、当然ながら、この“普遍的な”枠組みの中で解釈され、1 人称複数のカテゴリーの中に、除外形と包含形という二つの下位類を設けることによって解決された。先に掲げたマレー語の人称代名詞の体系（表 10）は、まさにこのような解釈の産物にほかならなかった。

しかし、1 人称複数の下位類として位置づけられたいわゆる包含形は、このカテゴリーを持つ多くの言語で、「聞き手を含む 1 人称複数」という単純な定義では捉えられない様々な側面を呈示している⁷⁷。例えば、アイヌ語の 1 人称複数除外形 (ci-/as) に対する包含形と見なされてきた人称接辞 (a-/an) は、とりわけ、この人称形の持つ多様な性格を浮き彫りにしている。すなわち、この人称形は「聞き手を含む 1 人称複数」という用法のほかに、少なくとも次の三

77 すでに服部四郎氏は、満州語のこの現象に関する詳細な調査から満州口語の包含形の持つ多様な用法に光を当て、伝統的な解釈の再検討を促している（服部・山本 1955）。

つの用法を併せ持っている。

(イ) 1人称の間接表現（主に古語での用法、現代口語では“引用の1人称”）

(ロ) 2人称の敬称

(ハ) 話し手、聞き手を特定しない一種の「不特定人称」ないし「汎人称」

従って、最近のアイヌ語研究者の間では、この人称形を従来のように1人称複数の下位類として扱う代わりに、「不定人称」あるいは「第4人称」という別個の人称カテゴリーを設定して、そこにこれを位置づけるという見方が強まっている。

一方、ギリヤーク語の「包含形」は、アイヌ語とはまた違った極めて特異な一面を露呈している。すなわち、ギリヤーク語の人称代名詞には数のカテゴリーが組み込まれていて、それぞれの人称に単数形と複数形が備わっているが、この包含形にも、他の人称と並行的に“単数（ないし非複数）形”と“複数形”が対峙しているのである。今ここに、アムール方言の1、2人称と問題の包含形を示すと、表12のようになる。

	非複数	複数
1人称	n'i	n'ying
2人称	ci	cyng
包含形	megi	mer

表12：ギリヤーク語（アムール方言）の人称代名詞

ギリヤーク語についてこれまで最も詳細な文法を記述した旧ソ連の言語学者パンフィーロフは、西欧伝統文法の枠組みから完全に逸脱したこのような現象に対処するために、ギリヤーク語では名詞にとっても代名詞にとっても全く無縁な「双数」というカテゴリーを1人称の代名詞にだけ設定して、ここに問題の“単数ないし非複数形”（上表の megi）を位置づけた（Panfilov 1962: 231）。話し手と聞き手を含む以上、その人称は「単数」ではあり得ないというあくまでも理詰め解釈であるが、これはまた西欧文法の枠組みから導かれた当然の帰結でもあった。

ギリヤーク語に見られたのとほぼ同じ現象は、オーストロネシア語圏のフィリピンの諸言語の中に頻繁に現れる。例えばイロカノ語の人称代名詞は、形の単純な所有格で、また問題の包含形を仮に1+2人称として標示すると、表13のようになる⁷⁸。

	非複数	複数
1人称	ku	mi
2人称	mu	yu
1+2人称	ta	tayu
3人称	na	da

表13：イロカノ語の人称代名詞（所有格）

78 『言語学大辞典』1: 697。ただし原著で示された図式はパンフィーロフ流の解釈に立っている。

フィリピン諸語に見られる1人称包含形のこの特異性に着目して、グリーンバーグはこれをイロカノ型と名付け、包含・除外の区別を持つ人称代名詞体系の中の特別なタイプとして位置づけた (Greenberg 1988)。

ギリヤーク語やフィリピン諸語に見られる「イロカノ型」の人称代名詞は、世界のいろいろな地域に散在しているけれども、このタイプがとりわけ集中して現れるのは、オーストラリア北西部の非パマニュンガン系の諸言語である。最近のオーストラリア原住民語の研究者は、このような人称体系における数のカテゴリーに対して、従来の単数・複数の代わりに、「最小数 minimal」・「増大数 augmented」という新しい名称を導入している (Dixon 1980: 351f.)。しかもオーストラリアでは、この人称体系にさらに「双数」や「三数」のカテゴリーが積み重なることもある (例えばマンガライ語 (Merlan 1982: 102) やレンガルンガ語 (Dixon 1980: 351) など)。

「イロカノ型」に双数が加えられた人称体系の典型的な例は、ニューギニアの代表的なピジン・クレオールとされるトク・ピシン語 (の一変種) の中に見られる。しかもその形態はこの体系の構成原理を極めて透明な形で示してくれる。ここでは、このような体系の数カテゴリーを「基本形」、「増幅形」、「双数形」とし、さらに各人称の意味素性も明示すると、表 14 のようになる。表中の1+2人称は、以後**包括人称**と呼ぶことにしよう。

	話し手	聞き手	基本形	増幅形	双数形
1人称	+	-	mi	mi-pela	mi-tu-pela
2人称	-	+	yu	yu-pela	yu-tu-pela
1+2 (包括) 人称	+	+	yumi	yumi-pela	yumi-tu-pela
3人称	-	-	em	ol	em-tu-pela

表 14: トク・ピシン語の人称代名詞

トク・ピシン語のこの人称体系は、おそらくメラネシアあるいは東部ポリネシアのオーストロネシア諸語のそれを基盤として出来上がったものと思われるが、ここには、4種の人称と双数を含む3数の数カテゴリーが組み合わされて、見事に均整な体系が現れている⁷⁹。しかしこの均整な人称体系は、先に示したラテン語に代表される西欧のモデルとは明らかに異なり、またどのような工夫を凝らしても、このモデルにはめこむことはできない。しかし、1人称の意味素性を上表で示したように、<+話し手、-聞き手>と定義すれば、この人称の複数もまた、厳密には<-聞き手>という意味を保持しなければならない。とすれば、西欧モデルの枠組みに押し込められた「聞き手を含む1人称複数」というのは、そもそも矛盾した概念の上に成り立っていたといえよう。包含・除外の区別という言語現象を正しく理解するためには、伝統的な人称の枠組みを放棄しなければならないのである。

79 表中の mi, yu, em はそれぞれ英語の me, you, him に、pela, ol, tu は英語の fellow, all, two に由来する。なお、この体系にさらに「三数」のカテゴリー (mi-tri-pela, yu-tri-pela, yumi-tri-pela, em-tri-pela) が加わるシステムもある (Wurm & Mühlhäusler (eds.) 1985: 343)。なお、トク・ピシン語のこの体系に極めて近い人称体系は、例えば東部ポリネシアのフィジー語の中に見出される。

ところで、トク・ピシン語の包括人称 *yumi* (< *yu + mi*) という形は、この人称の本質をいみじくも言い当てている。それはまさに、話し手と聞き手を合一した談話当事者の包括人称であり、両者の間に分け隔てを設けないという意味で、いわば融通無碍な汎人称という性格を備えている。先に触れたアイヌ語の包含形あるいは「第4人称」の様々な用法も、このような包括人称の性格からごく自然に導かれるものであり、この人称が「不定あるいは一般人称」としてしばしば用いられることは、早くから北米諸語の研究者にも知られていた⁸⁰。またこの人称が2人称の敬意ないし婉曲表現として用いられるのも、東南アジアの諸言語に広く見られる現象である。

ちなみに、ツングース語やモンゴル語の包括人称も、満州語の *muse* (文語形)、ソロン語の *miti*、ウデヘ語の *minti*、あるいは蒙古文語の *bida*、東部裕固語 (Yugur) の *budas* などの形を見ると、どうやら1人称代名詞 **m/b-* と2人称代名詞 **t/s-* の合成によって生じたもののようである。

包括人称が本来数のカテゴリーとは無関係で、しかも1人称、2人称とは別個の人称カテゴリーとしてそれらと同等な関係を作っていたことは、上のイロカノ語やトク・ピシン語の人称体系だけでなく、人称代名詞に数の区別を欠く言語 (あるいは少なくとも義務的なカテゴリーとして確立されていない言語) の場合に、一層ははっきりとした形で現れる。その典型的な例は、先に多項型人称標示の論議の中で挙げたアイマラ語の人称体系である (表15)。この言語は、名詞だけでなく人称代名詞にも数カテゴリーを欠いているが、必要があれば複数性を表すために *naka* という接辞 (ないし接語) を添えることも可能である。しかし動詞の人称接辞では、すでに見たように (表6)、数を区別しない。

	基本形	随意増幅形
1人称	<i>naya</i>	<i>naya-naka</i>
2人称	<i>huma</i>	<i>huma-naka</i>
1+2 (包括) 人称	<i>hiwasa</i>	<i>hiwasa-naka</i>
3人称	<i>hupa</i>	<i>hupa-naka</i>

表15: アイマラ語の人称代名詞

このタイプの人称体系は、ハキ・アイマラ諸語だけでなく、カリブ諸語、マクロ・ジェー諸語、一部のチブチャ諸語、一部のアラワク諸語などにも見られ、包含・除外の区別を持つ南米諸語の中では最も優勢なタイプといってよいだろう。また中米では、ミスキト語、ウルワ語、一部のオトマンゲ諸語など辺境に生き残った少数の言語に現れ、北米でも、ダコタ語 (スー)、クワキユートル語 (ワカシュ) などがこのタイプに属している。ただし北米でこの体系は、ヨーロッパ人によって押しつけられた西欧型体系によって駆逐されるか、あるいは調査者によって無視されたまま滅び去ったケースも少なくないかもしれない。

80 アメリカ言語学の初期の段階では、*inclusive* の代わりに *indefinite plural* あるいは *general plural* と呼ばれることもあった (Haas 1969: 4)。

アメリカ大陸以外で、このタイプが比較的多く現れるのはやはり太平洋沿岸部で、チベット・ビルマ諸語ではリス語、ラフ語（中国雲南省）、モン・クメール諸語ではチラウ語（ヴェトナム南部）、タイ諸語ではシャン語（タイ・マウ語）、またおそらくラオ語もこのタイプに属している⁸¹。いずれも、名詞だけでなく人称代名詞にも義務的な数カテゴリーを欠く言語である。太平洋沿岸部のこのような4項型の人称体系として、参考までに、表16にラフ語の例を挙げておこう（Matisoff 1973: 65）。包括人称の語形に注目されたい。

	基本形	随意増幅形
1人称	nga	nga-hĩ
2人称	no	no-hĩ
1 + 2（包括）人称	ngano	ngano-hĩ
3人称	yo	yo-hĩ

表16：ラフ語の人称代名詞

ユーラシアの太平洋沿岸部とアメリカ大陸をつなぐこの人称体系は、おそらく人類言語の人称体系のプロトタイプ（原型）と見てよいものであり、これまでに触れたすべての人称体系は、ここから容易に導き出すことができる。すなわち、8項型のイロカノ型は、随意的複数標示がそのまま文法カテゴリーとして義務化されたものであり、また包含・除外を区別する大多数の言語に見られるマレー語のような7項型の体系は、包含人称だけが複数化から除外されて、体系内で孤立したものである。これは、従来なされてきたように、1人称複数の亜種として最も解釈され易い体系といえよう。いずれにせよ、本節の最初に掲げたマレー語の人称体系は、次のように書き直されなければならない（表17）。

	単数	複数
1人称	aku	kami
2人称	ěngkau	kamu
1 + 2（包括）人称	kita	
3人称	ia	měreka

表17：再解釈されたマレー語の人称体系

最後に、ユーラシア西部の言語を特徴づけるラテン語のような6項型の体系は、数カテゴリーの中で孤立した包括人称が1人称複数に併合されることによって、数体系の均一性が確立された体系にほかならない。自称（我）・対称（汝）の峻別と数の原理の徹底化によって、人類言語に古く備わった包括人称はこのような体系では見失われている。もともと別個の二つの人称が、1人称複数という一つのカテゴリーの中に融合してしまったからである。

81 標準タイ語で1人称複数と見なされている *rau* は、シャン語、ラオ語の包括人称 *hau* に対応する。

ところで、上に挙げたアイマラ語のような基本的に4項型の体系が人類言語の人称体系の原型とする見方は、日本語の人称代名詞の前史を解き明かすためにも、貴重な手掛りを与えてくれるだろう。

周知のように、上代日本語には本来の人称代名詞として、1人称として「ア」、「ワ」、2人称として「ナ」があった。しかし1人称の「ア」と「ワ」の関係、例えば、両者は同じ形式の単なる変異形か、それとも本来機能を異にする別の形式であったかなどについては、これまで全く解明されていない。しかし、すでに指摘されてきたように、上代文献ではその所有形「アガ」と「ワガ」とでは、それに接する被所有名詞の間に、かなりはっきりとした使用上の違いがある。すなわち、

主(ヌシ)・君(キミ)・皇神(スメカミ)・愛者(ハシモノ)・児(コ)・身(ミ)・胸(ムネ)・面(オモ)・恋(コヒ)・馬(ウマ)・為(タメ)には常にアガがつき、背子(セコ)・大君(オホキミ)・妹(イモ)・母(ハハ)・名(ナ)・命(イノチ)・世(ヨ)・家(イヘ)・屋戸(ヤド)・門(カド)・里(サト)・船(フネ)・故(ユエ)などにはワガがつく、という使い分けが見られる。また動詞恋フの主格として用いられる場合も、ほとんどア・アレに限られるようである。そのような事実から、ア・アレはワ・ワレにくらべて、単数的・孤立的な意のものだとする説もある。(『時代別国語大辞典：上代編』:1)

ここで、ア・アレについて「単数的・孤立的」としている点に注目する必要がある。これをもう少し正確に言い換えれば、ア・アレは「私的・個人的、従って単数的」、それに対してワ・ワレは「公的・社会的、従って複数的」と特徴づけることができよう。確かに身体名称や恋などは私的・個人的な所有物であり、(君に対して)大君、(馬に対して)船、そして世、家、屋戸などは、明らかに公的か少なくとも複数者の所有物である(ちなみに、これとほぼ同じ区別は古典琉球語の1人称代名詞「ア、アン」「ワ、ワン」の間にも認められる(『言語学大辞典』4:886、中本1981:120))。

一方、上代語では、これまでに見た4項型人称体系をもつアメリカ大陸や太平洋沿岸部の諸言語と同じように、人称代名詞に単数・複数の区別は確立されていなかったと見てよい。とすれば、単数的なアに対する複数的なワは、本来は1+2人称すなわち包括人称であったと見るのが最も自然な解釈である。この人称は、すでに見たように、汎人称的な性格を併せ持ち、場合によっては1人称にもあるいは2人称にも流用できる。古文献だけでなく現代日本語の多くの方言で、ワレが同時に2人称の代名詞として使われていることは、包括人称としてのその背景を物語っているといつてよいだろう。包括人称が2人称の敬称として用いられる例は、アイヌ語に限らず、東南アジアの諸言語に広く見られる。日本語で2人称として用いられるワ・ワレに敬称的ニュアンスが欠けるのは、2人称の直接表現そのものが、日本語では敬語法上の制約により、対等ないし目下の相手に対してしか用いられないからである。一方、現代琉球諸方言では、「ワ、ワン」の複数形が包含形と除外形に分化したが、その複数形の最も基本的な *wattar* は、元々包含的な意味を担っていたようである。なお、琉球語の2人称は本来自称形の「ウリ」(<「オレ」)によって置き換えられた。

日本語と同じように、朝鮮語にもこのような包括人称がかつて存在したかどうかは、必ずしも定かでない。しかし、中期朝鮮語以来の人称代名詞を見ると、1人称 *na*、2人称 *nə* (複数 *nə-hiy*) に対して、1人称複数の *uli* は、形態的に全く孤立しているだけでなく、他の代名詞に見られるような明示的な複数標識や単数形との規則的な対応を欠いている。古い包括人称が1人称複数に転化するという現象は、すでに触れたように、タイ語の場合 (*rau*) だけでなく、包括人称を失った他の言語でもしばしば観察される所であり、こうした点を勘案すれば、朝鮮語の *uli* も古くは包括人称だった可能性が極めて高いと言えよう⁸²。

最後に残されたのは、太平洋沿岸言語圏で一部の言語、それも社会的・文化的に影響力の大きい言語が一様に包含・除外の区別を欠いているのはなぜかという問題である。

すでに述べたように、これらの言語はいずれもかなり早い時期に文字言語を確立しているが、それよりもっと大きな特色として、程度の差はあれ、それぞれに複雑な敬語法を発達させているという点で共通している。敬語法 (あるいは一般に待遇表現) と呼ばれる語法は、文法や語彙のいろいろな局面に反映されるが、とりわけ、発話の場面において話し手を軸とする聞き手ないし第三者との間の社会的な階層関係による呼称の差別化と場面に応じたその選択という形で現れる。このような敬語法が人称代名詞の体系に何らかの影響を及ぼすのは当然である。

太平洋沿岸部で敬語法を発達させた言語を見ると、いずれも代名詞の体系が呼称の多様化によって複雑化している。複雑化の基盤となっているのは、一方では聞き手ないし第三者に対する尊敬表現すなわち敬称、他方では話し手自身に対する謙讓表現すなわち貶称ないし卑称である (例えば、日本語「僕」、ヴェトナム語「*tôi*」、インドネシア語「*saya*」などの1人称代名詞は、いずれも「奴隷、召使い」を意味する語に由来する)。こうして、もとあった人称代名詞は、いわゆる「タテ社会」の階層性を反映したさまざまな呼称によってあるいは補われあるいは置き換えられて、人称代名詞本来の直截な体系性が失われる。日本語の人称代名詞も、時代を追って次々に作り出された様々な敬称・謙讓称によって、もとの人称体系はほとんど見えなくなっている。また、東南アジアで最も複雑な敬語法を発達させたとされるジャワ語の人称代名詞は、「常体」、「準敬体」、「敬体」、「最上敬体」というような階層化された四種の話体に対応して、精緻な呼称体系を築き上げ、結果として、本来の人称体系は包含人称を含めてほぼ全面的に失われている (『言語学大辞典』2: 210)。

このように、敬語法の原理が上下関係に基づく自・他の差別に基づくとすれば、それは直ちに人称表現における自称 (= 1人称) と対称 (= 2人称) の間に明確なけじめを設けることにつながっている。一方、これまでに問題としてきた包括人称は、話し手と聞き手を差別せず、両者を文字通り包括的に捉えた人称である。このような人称が成立するためには、話し手と聞き手は常に同等のレベルに置かれていなければならない。例えば、「拙者」と「貴殿」、「やつがれ」と「あなたさま」を同じカッコではくくれないのである。敬語法の基本精神が「分け隔て」にあるとすれば、包括人称の基盤は「打解け」である。両者は根本的に相容れない側面を持っていると言わなければならない。

82 朝鮮語の *uli* の *-li* と日本語の *wa-re* の *-re*、さらにまた *u-* と *wa-* も、語源的につながる可能性がある。

このように考えると、太平洋沿岸部の言語圏で、文化的・社会的に影響をもった一部の言語だけが、1人称複数⁸³の包含・除外の区別を欠いているという特異な現象も、無理なく説明できるだろう⁸³。文字の使用や敬語法というものは、ある一定の文化的、社会的な成熟度を必要とする。とすれば、太平洋沿岸言語圏の一部の言語に現れた包含・除外の区別の消失は、この言語圏における比較的新しい時期の言語改新の一局面ということができる。従って、これらの言語における包括人称の消失は、ユーラシア西部の言語圏を特徴づける同じ現象と比べて、その性格が全く異なっている。すなわち西の言語圏で問題の人称を失わせたのは、すでに述べたように、いわば論理上の「我」と「汝」の峻別であり、文法カテゴリーとしての数の原理の貫徹であった。それはタテ社会の階層性を映し出した東アジアの敬語法とは、全く別の原理によって生み出されたものなのである。

* * * * *

以上の考察からほぼ明らかのように、これまでアイヌ語と日本語の間の著しい言語上の違いと見られてきた一連の現象は、両言語の親縁関係にとって重大な妨げとなるようなものでは決してなく、敬語法の発達に典型的に見られるように、同系関係にある言語間でも、それぞれが置かれてきた歴史的・社会的状況の違いによって容易に生じ得るような性質のものである。

アイヌ語と日本語を隔てる言語上の違いは、一方ではまた日本語と朝鮮語をつなぐ著しい共通特徴ともなっているが、これらの言語現象について特に留意すべき点は、いずれの場合も、アイヌ語の側に環日本海諸語本来の古い様相が保存されているのに対して、日本語と朝鮮語の側でそれが失われるかあるいは新しい特徴に置き換えられる、という形でその違いが生じているという事実である⁸⁴。これは環日本海諸語のこれまでの歴史の中で、日本語と朝鮮語がたどった道とアイヌ語のそれとの間に大きな隔りがあったことをはっきりと示している。

3.4 形態法上の手段としての重複

最後に、環日本海諸語の内部的な違いというよりも、環日本海諸語を含めた太平洋沿岸言語圏の全体的な特徴を浮き彫りにし、さらにまた世界的にも興味深い分布を示すもう一つの言語現象として、「重複（または畳語）reduplication」と呼ばれる形態法を取り上げてみたい。

重複とは、語の全体または一部を繰り返すことによって、物や動作の反復、増幅、強調あるいは逆に軽減、縮小などを表す造語法ないし形態法上の手法で、接辞や屈折などによる通常の形態法に比べると、かなり写像的（iconic）な性格を帯びている。従って、幼児語（例えば、papa、mama、ととく父>、かかく母>、お手手、お目目、など）や擬声・擬態語（例えば、

83 琉球方言でも、沖縄の首里方言には包含・除外の区別が見られないという現象も、同じ理由によって説明できる。

84 例えば、日本語で失われた動詞の人称標示は、これまでの考察に基づけば、1人称 a-、2人称 na-、包括人称 wa-、3人称ゼロというような形で、動詞語幹に前接する接頭辞として再構できるだろう。ただしその多項型人称標示が、アイヌ語のような分離型かあるいはチベット・ビルマ諸語のような階層的一体型だったか、にわかに断定はできない。いずれにせよ、この人称標示とそれに基づく動詞の活用形態は、印欧語やウラル・アルタイ諸語のそれと大きく異なっていたことだけは確かである。

moo-moo、ding-dong、ガラガラ、ゴロゴロ、パラパラ、ポロポロ、など)では、人類言語にほぼ普遍的に見られる現象であるが、通常の名詞や動詞においてこれを形態法上の手段として多少とも広範に役立てている言語は、比較的限られる。また重複の現れやすい擬声・擬態語の使用頻度に関しても、言語間に大きな違いがある。日本語は、周知のように、擬声・擬態語と並んで、重複が語彙・文法の両面で極めて重要な役割を演じている言語である。

日本語の重複は、例えば名詞では、「人々」「山々」「国々」「村々」のように指示対象の複数性を表すこともあるが、そのほかに、「日々」「月々」「年々」「代々」「後々」「すみずみ」「ときどき」「ところどころ」「ひとつひとつ」「時々刻々」「種々様々」「処々方々」のように、反復性、配分性、多様性を表す。また形容詞語幹から、「赤い」→「赤々」、「黒い」→「黒々」、「高い」→「高々」、「軽い」→「軽々」のような強調・描写的副詞、あるいは「重々しい」「軽々しい」「痛々しい」などの強調された形容詞、さらにまた名詞語幹から「華々しい」「空々しい」「女々しい」のような形容詞も派生される。一方、動詞での重複は、「かわるがわる」「かえすがえす」「見る見る」「泣く泣く」「ゆくゆく」、あるいは「とびとび」「ちりちり」「きれきれ」「思い思い」のように、反復・継続の意味をもった副詞的用法のほかに、少数ではあるが「惚れ惚れする」「晴れ晴れする」などの動詞としての用法も見られる。

朝鮮語も重複を多用する点では日本語と全く同様で、かつて日本語・朝鮮語同系論を唱えた金沢庄三郎氏も、この現象を両言語間の重要な共通点の一つに数え、特に名詞の複数性を表す重複について、「日韓両国語いづれも数を表すに特別な形式あるにあらず。多数を示さむと欲する時は、同語を重ねるを普通とし・・・」と述べ、chip-chip「家々」saram-saram「人々」na-nar「日々」tā-tār「月々」などの例を挙げている(金沢 1910: 389)。

中国語にも重複の現象は広く見られ、単に造語法上の手段にとどまらず、修辞上の技法としても発達した用法を示している(例えば「清清楚楚」「明明白白」など)。また中国語では、名詞よりもむしろ動詞、形容詞で頻用され、しかも動詞では反復や強調ではなく、動詞の意味を軽減、縮小して「ちょっと～する」というような意味で用いられる(例えば看看「ちょっと見る」、想想「ちょっと考える」など)。重複が反復、増幅、強調などとは逆に、軽減、縮小などいわゆる「指小詞 diminutive」的な機能を担うという現象は、日本語や朝鮮語には、幼児語以外では、あまり見られないが、東南アジアではタイ語やオーストロネシア諸語でしばしば見られ、またアメリカ北西海岸の諸言語(特にセイリッシュ諸語)ではこの用法がとりわけ際立っている⁸⁵。

重複はアイヌ語でも造語法上重要な役割を演じているが、特に動詞語幹の重複によって動作の反復、継続、強調を表す用法が生産的である(例えば、suye「揺する」→suye-suye、tuypa「切る」→tuypa-tuypa、pon「小さい」→pon-ponなど)。また名詞では複数というよりもむしろ細かいものの集合物(uype「くず」→uype-uype「細かいくず」、toy「土地」→toy-toy「土

85 例えばリルエット語で、s-muʃac「女」からs-mʼəmʃac「少女」、žzum「大きい」に対してžzázəm「少し大きい」、pun「見つける」に対してpúpan「ちょっと見つける」など(van Eijk 1996: 60)。これは語幹の最初の子音を重ねる部分重複である。重複における指小詞的な機能は、幼児語にその起源を持っているかもしれない(例えば日本語の「お手手」や「お目目」など)。

塊」など)を表し、また副詞的用法では、強調よりもむしろ軽減の意味を帯びることもある(ponno-ponno「ほんの少し」、wenna-wenna「おおざっぱに」<wenna「悪く」など)(Tamura 2000: 200ff.)。

一方、ギリヤーク語の重複は、日本語や朝鮮語と同じように、名詞の場合では複数性や配分性を表し(例えば、tav-raf <*taf-taf「家々」、mu-mu「舟々」、wamyf-wamyf「口々=口と口」、kome-xome <*kome-kome「脇々=両脇」、pašyf-pašyf「毎晩」、ygryku-ygryku「昔々」など)、また形容詞では強調的用法(例えば kavu-kavu「暖かい暖かい」、動詞では反復、継続を表す(例えば、penigau-penigaund「体をもじもじ動かす」peškař-peškař「(川が)曲がり曲がりする」fu:fuund「風がそよそよ吹く」など)(高橋 1932: 25f.)。

世界言語の中で、重複が語彙・文法の両面で最も広範にゆきわたり、しかも重要な役割を演じているのは、とりわけオーストロネシア語圏である。そこには重複の様々な形式(完全重複、部分重複、類似重複等々)および重複によって担われる主要な機能・用法のほとんどすべてが現れていると言ってもよいだろう。

例えば、現代のインドネシア語で、名詞の重複は、複数性、配分性、多様性、あるいはまた意味的派生など多様な用法を持つが、その中で複数標示のための重複は、日本語や朝鮮語と違って、極めて生産的な手段となっている。また人称代名詞でも単数・複数を問わず重複が用いられ、この場合は複数性とは関係なく、卑下・軽蔑などのニュアンスを帯びるという(Sneddon 1996: 15ff.)。また修飾形容詞では被修飾名詞の複数標示、日本語の「軽々」「黒々」のような副詞的用法、動詞では反復、継続、強調のほかに、中国語に似た軽減的な意味を帯びる。またポリネシアのラパヌイ語では、名詞の重複から関連する形容詞が作られ、形容詞の重複には、完全重複による強調的用法と並んで、部分重複による軽減的・縮小的用法も見られる。動詞の場合も、動作自体の反復・繰り返しのほかに、動作主体や動作対象の複数性を表す複数動詞を作る機能も担っている(Du Feu 1996: 191ff.)。

東南アジアの大陸部では、タイ諸語もオーストロネシア諸語と同じように、名詞、動詞、形容詞を通じて重複が多用されるが(Ayabe 1994)、オーストロアジア諸語では、重複は主として動詞での用法が中心で、名詞での重複は稀である。動詞における重複は、例えばムンダリ語で、部分重複が反復、強調、習慣的行為などを表すのに対して、完全重複は、中国語のように「ちょっと～する」という軽減・縮小的な意味を帯びる(Osada 1992: 115)。

さて、問題はこのような重複現象の世界言語における分布であるが(【別表1～2】<重複>の欄を参照)、この場合もユーラシアの諸言語は、これまでに見てきたいくつかの言語特徴と同じように、その内陸部と太平洋沿岸部とが画然と分けられる。ただしそこに引かれる境界線は、流音特徴や形容詞のタイプとは若干異なっている。

まず太平洋沿岸部の北方では、環日本海諸語、すなわちギリヤーク語、アイヌ語、日本語、朝鮮語がはっきりと一つのまとまりを見せ、次いで南方群としては、中国語、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語、オーストロネシア諸語、オーストロアジア諸語がやはり連続して重複現象の大きな言語圏を形成している。ここで注目すべきは、チベット・ビルマ諸語で、系統的につながる中国語とは裏腹に、重複は一部形容詞の強調的用法を除いて、名詞・動詞の形態法

の中では、ほとんど見るべき役割を演じていない。

一方、ユーラシア大陸で形態法・造語法上の手段として重複をほとんど用いない語族・言語群としては、西の方からインド・ヨーロッパ語族⁸⁶、セム語族、ウラル語族、コーカサス諸語、チュルク、モンゴル、ツングースを含むすべてのアルタイ諸語、そして上述のチベット・ビルマ諸語がこれに加わる。重複を欠如するこの言語圏は、これまでに見た他の特徴同様、やはりアフリカ北部まで拡がり、チャド諸語を除くアフロ・アジア諸語、そして大部分のナイル・サハラ諸語を同じ圏内に組み込んでいる。ただし、ユーラシアの内陸部が完全に重複欠如型の言語によって覆われているだけでなく、系統的孤立言語としてはシュメール語、ブルジャスキー語、そしてまとまった語族としてはインド亜大陸のドラヴィダ語が、重複欠如のこの言語圏から離脱している。

ユーラシアの重複欠如圏は、さらにケット語、ユカギール語などシベリアの諸言語を経てベーリング海峡を越え、エスキモー・アリュート諸語、ナデネ諸語へとつながり、そこからさらに、北米東部のイロコイ諸語までその分布を拡げている。特に、エスキモー・アリュート諸語とナデネ諸語が重複による形態法をほぼ完全に欠如していることは、大いに注目すべきである。

ところで、環日本海諸語とエスキモー・アリュート諸語の間に位置するチュクチ・カムチャツカ諸語は、名詞形態法の中に重複を持っているが、それは極めて特異な様相を帯びている。すなわち、一部の名詞語幹の重複形が、この言語で最も無標な絶対格、しかも多くの場合、単数の絶対格にだけ現れる。例えばチュクチ語で、*nutenut* (単) ~ *nute-t* (複) 「陸地」、*milgymil* (単) ~ *milgy-t* (複) 「マッチ」、*tirkytir* (単) ~ *tiky-t* (複) 「太陽」、*tumgytum* (単) ~ *tumgy-t* (複) 「友達」などである⁸⁷。このような名詞語幹は、チュクチ語で 100 ないし 150 ほど数えられるという (Kämpfe & Volodin 1995: 30)。

この重複は、現在のチュクチ・カムチャツカ諸語では全く生産性を失っているが、この現象を表面的に観察すると、あたかも重複が名詞の単数性を標示しているかのような様相を呈している。これは世界諸言語の重複現象の中でも全く異例といってよく、おそらく古い重複現象がいわば化石化してこのような形で残存したものであろう⁸⁸。いずれにせよ、チュクチ・カムチャツカ諸語の重複は、環日本海諸語を含めて太平洋沿岸部の重複現象と著しく異なった性格を示している。

ユーラシアの太平洋沿岸部を特徴づける重複法は、エスキモー・アリュートとナデネ諸語を飛び越えて、その南に拡がるアメリカ先住民諸言語へとつながり、とりわけ太平洋を隔てて対峙する北米大陸の太平洋側に、ユーラシアのそれとほぼ完全に呼応する形で、重複法の集中的な分布圏を作り出している。すなわち、北西海岸のワカシュ、セイリッシュ諸語をはじめとし

86 古い印欧語では、動詞の現在語幹や完了語幹にやや形骸化した重複 (部分重複) が見られる。例えばギリシア語で *di-dō-mi* 「我与う」 *de-dō-ka* 「我与えたり」などの *di-*、*de-* がそれであるが、このような形態法は近代諸語では完全に失われている。

87 これとは別に、*nymnym* (単) ~ *nymnym-t* (複) 「村」、*liglig* (単) ~ *liglig-t* (複) 「卵」のように、単数・複数双方の絶対格に重複形が現れる場合もある。なおチュクチ語では、普通名詞では複数形は絶対格にしか現れない。

88 イテリメン (カムチャダル) 語では、重複は単数形の標示機能のほかに、動詞・形容詞から名詞を派生する機能も担っている。例えば、*çuf-* 「雨が降る」→ *çufçuf* 「雨」、*wetat-* 「働く」→ *wetwet* 「仕事」など (Georg & Volodin 1999: 63)。チュクチ・カムチャツカ諸語の重複法は、ここに一つの源があるかもしれない。

て、海岸およびその後背地のペヌート諸語、カリフォルニアのペヌート系およびホカ系の諸言語がそれである。またこの分布圏は、数詞類別型のそれよりもさらに広域に拡がり、ロッキー山脈の東側の「大平原」に分布するスー諸語、その南西部の「大盆地」を占めるカイオワ・タノアおよびユート・アステカ諸語にまで延びている。これら大陸西部の言語圏では、重複は言語間で程度の違いはあるけれども、名詞にも動詞にも幅広くに用いられ、それらの機能もユーラシアの太平洋沿岸部とほぼ共通した様相を帯びている。

それに対してこの大陸の東部を占める言語圏では、重複を全く欠如するのはイロコイ諸語ほか少数の言語に限られるけれども、それ以外のアルゴンキン諸語や南東部の湾岸諸語においても、重複はほとんど動詞に限られ、名詞には全く現れない。重複法が北米の西部と東部で大きく異なることは、すでにシェルツァーも認めているところで (Sherzer 1968: 211)、重複が形態法の中で占める役割は、西部に比べて東部でははるかに限定されている。

北米のとりわけ太平洋沿岸部を特徴づける重複現象は、ユート・アステカ諸語を介して中米まで拡がり、ワベ、トトナック、タラスコなどの孤立した小言語を含めて、マヤ諸語、ミヘ・ソケ諸語をその分布圏の中に納めている。ただし、この地域で最も多くの言語を抱えるオトマング語圏は、この重複分布圏から離脱しているように見える。

中米の重複言語圏は、チブチャ諸語を通じて南米まで延び、南米最大の語族アラワク諸語などによってアマゾン地域までつながっているが、南米諸語における重複現象の実体については、まだ不明の点が多く残されている。ただこれまでの調査の限りでは、南米は全体的に、北米に比べて重複の果たす役割がかなり制限されているように見える。特に名詞の形態法の中で、重複が複数性の標示その他しかるべき役割を演じている確実な事例は、手許のデータの中には見られない。アラワク諸語やトゥピ諸語、あるいはアマゾンの孤立的小言語の中でこれまでに報告されている重複法は、管見の限り、ほぼ動詞の形態法 (反復動詞、使役動詞、強調動詞その他) に限られている。また大陸の周辺部を占めるアンデス諸語やカリブ諸語には、重複がほとんど現れないようである。いずれにしても、南米諸語における重複現象の詳細については、今後のさらなる調査に待たなければならない。

ユーラシアとアメリカ大陸の間で環太平洋的な拡がりを見せるこの言語圏と並んで、もう一つの大きな重複分布圏は、サハラ以南のアフリカとオセアニアのオーストラリアおよびニューギニアを中心とするパプア語圏である。アフリカにおいてもオセアニアにおいても、重複法は名詞にも動詞にも現れ、その主要な機能は、名詞では複数性や配分性、動詞では反復 (iterative)、強調 (intensive)、またときには相互動詞 (reciprocal)、形容詞では強調など、他の言語圏でも最も頻繁に見られるタイプで、重複に本来的に備わる写像的な性格をよく反映している。

ちなみに、先に述べた南インドのドラヴィダ語圏は、サハラ以南のアフリカとオーストラリア・ニューギニアという二つの重複言語圏の間にあって、あたかも両者をつなぐ橋渡しの役割を演じているかのように見える。ドラヴィダ諸語の重複法も、名詞、動詞の双方で用いられ、その用法にはやはり写像的な性格が強く反映している。

このように、重複による形態法は、流音特徴や形容詞タイプとはやや違った形ではあるが、ユーラシアにおける内陸言語圏と沿岸言語圏との間の違いを鮮やかに浮き彫りにし、さらにまた、ユーラシアの太平洋沿岸部とアメリカ大陸の同じく太平洋側を密接に結びつけることによって、**環太平洋言語圏**ともいうべきものの存在を浮かび上がらせる重要な言語現象の一つとなっている。

なお、重複の地理的分布に関しては、**地図 8:【重複法をほとんど欠如する言語圏】**を参照されたい。

4 ユーラシア諸言語の系統分類と日本語の位置

以上、類型地理論的観点から言語の“遺伝子型”ともいうべき諸特質について考察を行ってきた。ユーラシアの内陸部と太平洋沿岸部を隔てる言語現象としては、ほかに「母音調和」や「キョウダイ名のタイプ」なども挙げられるが、これらはすでに別の形で論じてあるので（松本 1998c、2000c）、ここでは繰り返さない。

最後に、これまでの考察を踏まえて、日本語をその一員として含むユーラシアの諸言語の年代的に奥行き深い系統関係について、その全体的な分類をここにもう一度整理し、その中で日本語がどのように位置づけられるかを明確にしておきたい。

以下の議論に入る前に、【別表 1～2】に集約されたデータを整理して、ユーラシア諸言語を系統的に分類すると、概略、表 18 のようになるであろう。ここでの諸言語の配列は、言語間の系統関係をはっきりさせるために、【別表 1】とは若干異なっている。なお、表の共通特徴の中で * 印を付したのは、同一言語群の中で部分的に不一致が見られる特徴である。

表 18 で示されたように、ユーラシアの諸言語は、**ユーラシア内陸言語圏**と**太平洋沿岸言語圏**という二つの大きな言語圏に分けられる。すでに §3 で述べたように、これはユーラシア諸言語の系統的分類にとって最も基本的な区分である。

ユーラシア内陸言語圏を特徴づける主要な言語特質は、(1) 複式流音 (/l/ と /r/ の区別)、(2) 体言型形容詞、(3) 文法的に義務化された名詞の数カテゴリー、(4) 名詞類別 (= 文法的性)、(5) 重複形態法の欠如、(6) 包括人称の欠如、である。それに対して、太平洋沿岸言語圏を特徴づける際立った言語特質は、(1) 単式流音、(2) 用言型形容詞、(3) 名詞における数カテゴリーの欠如、(4) 数詞類別、(5) 重複形態法、(6) 包括人称、である。

これら二つの言語圏は、それぞれの内部にさらに二つないし三つの下位群が区分される。

まずユーラシア内陸言語圏の内部には、**中央群**と**残存群**という二つの言語群がはっきりと区別される。**中央群**に属するのは、アフロ・アジアの分派であるセム語族、インド・ヨーロッパ語族、ウラル語族、チュルク、モンゴル、ツングースの諸語族を含むいわゆるアルタイ諸語、そしてドラヴィダ語族である。これらの語族を特徴づけるのは、上に挙げた共通特徴の他に、(7) 動詞の側で文法上の主語だけを標示する単項型人称標示と (8) 名詞における対格型格標示である。ただし、これら八つの内陸型言語特徴を完全に備えているのは、セム語族とインド・ヨーロッパ語族だけで、ウラル語族とチュルク語族には (4) 名詞類別 (= 文法的性) と

系統関係		所属語族・言語群	共有特徴
ユーラシア内陸言語圏	中央群	セム語族 (アフロ・アジアB) インド・ヨーロッパ語族 ウラル語族 チュルク語族 モンゴル語族 ツングース語族 ドラヴィダ語族	複式流音 体言型形容詞 数カテゴリー 単項型人称標示 対格型格標示 名詞類別* 重複欠如* 包括人称欠如*
	残存群	コーカサス諸語 シュメール語その他古代オリエント諸語 バスク語、ケット語、ブルシヤスキー語	多項型人称標示 能格型格標示
	周辺境界群	チュクチ・カムチャツカ語族 エスキモー・アリュート語族 チベット・ビルマ語族	複式/単式流音 体言型/用言型形容詞
太平洋沿岸言語圏	南方群 (オーストリック大語族)	漢語 (中国語) ミャオ・ヤオ語族 タイ・カダイ語族 オーストロアジア語族 オーストロネシア語族	単式流音 用言型形容詞 数カテゴリー欠如 名詞類別欠如 数詞類別
	北方群 (環日本海諸語)	朝鮮語 日本語 アイヌ語 ギリヤーク語	重複形態法 多項型人称標示* 中立型格標示* 包括人称*

表 18: ユーラシア諸言語の系統分類

いう特徴が欠け、またモンゴル、ツングース両語族は(4)の特徴を欠くほかに、さらに(6)包括人称という非内陸の特徴を示している。一方ドラヴィダ語族は、(4)の名詞類別は共有するけれども、(5)重複形態法および(6)包括人称によって、やはり非内陸的性格を有している。

このような点を勘案すると、内陸中央群の中で最も中核的な部分を占めるのは、セム、インド・ヨーロッパ、ウラル、そしてチュルクの四つの語族であり、それに対してモンゴル、ツングースのアルタイ系両語族とドラヴィダ語族は、この言語群の中でやや周辺的な位置を占めているとすることができよう⁸⁹。

89 ユーラシアの諸語族を系統的にさらに上位の大語族にまとめようとする試みは、これまでも様々な形で行われてきたが、その中で最もよく知られているのは、いわゆる「ノストラス説 Nostratic theory」である。これにも諸説があるが、その中心的な主張は、セム語族、インド・ヨーロッパ語族、ウラル語族、“アルタイ語族”を「ノストラス」(ラテン語で「我らの郷土」の意)と呼ばれる一つの大語族に包含しようというもので、これは奇しくも本稿の「内陸中央群」とほぼ一致する。この説はデンマークの印欧語学者ペデルセンに遡るものであるが(Pedersen 1931: 336ff.)、これを継承する最近の主な論著としては、Illych-Svitych 1971-1984, Bomhard 1984, Dolgoplosky 1998 などがある。

一方、最近グリーンバークとその弟子ルーレンが提唱している「ユーラシア語族」説によれば、この大語族には(1)エトルリア、(2)インド・ヨーロッパ、(3)ウラル・ユカギール、(4)アルタイ、(5)朝鮮・

この中央群に対して**残存群**と見られるのは、コーカサス諸語、シュメール語その他古代オリエントの系統的孤立言語、バスク語、ケット語、ブルジャスキー語というユーラシア内陸部の孤立的な言語または言語群である。これらの諸言語は、内陸中央群といくつかの特徴を共有する反面、動詞における**多項型人称標示**と名詞における**能格型格標示**という二つの特徴によって、中央群と明確な一線を画している。また地理的分布の点から見ると、中央群が連続した広域分布をなしているのに対して、残存群はそのような広域分布の中の各所に孤立して散在するという形で現れる。このような分布特性から見ても、内陸言語圏の中で中央群が年代的に新しい層を、それに対して残存群が古い層を反映していることは明らかである。内陸中央群を構成する諸語族がこのような広域分布を成し遂げたのは、今から5～6千年前以降、これらの地域に本格的な農耕と金属使用が広まってからのことである。

ユーラシア内陸部の古い言語層の生き残りと思われる上述の残存群の延長線上に、おそらくこれと系統的につながる言語群として、表18で**周辺境界群**と名付けた諸言語がある。すなわち、シベリア北東隅から北米の極北地に広がるチュクチ・カムチャツカおよびエスキモー・アリュートの両語族、そしてヒマラヤ地域から東南アジアまで分布を拡げるチベット・ビルマ語族がそれである。これらの語族はいずれも、多項型人称標示と能格型格標示という二つの特徴を内陸残存群の諸言語と共有するが、その一方で、単式流音や用言型形容詞を持つ点で次に述べる太平洋沿岸言語圏と共通の性格を示している。その意味で、この言語群は内陸言語圏と沿岸言語圏の間でいわば境界領域的な位置を占めているといえよう。とりわけチベット・ビルマ諸語は、すでに度々触れたように、その内部に内陸型に近い西方群と沿岸型の特徴が極めて優勢な東方群という二つの下位群を併存させている⁹⁰。

次に太平洋沿岸言語圏は、その地理的な位置から**南方群**と**北方群**の二つの下位群に分かれる。**南方群**は、中国大陸から東南アジア、さらに南太平洋上の島々まで広大な分布圏を作っている。これに含まれる語族は、ミャオ・ヤオ、タイ・カダイ、オーストロアジア、オーストロネシアの4語族であるが、さらに、チベット・ビルマ語の一支脈ともいべき漢語（中国語）がこの言語群の一員として組み込まれている点が注目されよう。

日本・アイヌ、(6) ギリヤーク、(7) チュクチ・カムチャツカ、(8) エスキモー・アリュートの八つの語族ないし言語群が含まれるという (Greenberg 2000: 279ff.)。これは言うまでもなく、従来のノストラス説ともまた本稿で示した枠組みとも大きく異なっている。いずれにせよ、これらの説を支えている方法論は伝統的な比較方法の延長線上にあるもので、本稿のアプローチとは根本的に異なることを言い添えておこう。

90 ユーラシア内陸部の諸言語をつなぐもう一つの興味深い言語現象として、本稿では触れなかったが、1人称 /m-/、2人称 /t-/ (または /s-/) によって特徴づけられる人称代名詞の形態がある。この人称代名詞のタイプは、南コーカサス (カルトヴェリ)、インド・ヨーロッパ、ウラル、チュルク、モンゴル、ツングース、ユカギールの諸言語からさらにチュクチ・カムチャツカ諸語によって共有され、広域ではあるが明らかに連続的な分布を見せている (アルタイ諸語では1人称 /m-/ はしばしば /b-/ と交替して現れる)。

一方アメリカでは、専門家の間で早くから知られていたように、1人称 /n-/ 2人称 /m-/ によって特徴づけられる人称代名詞の形態が南北両大陸を通じて広範な分布を見せ、これがまたグリーンバーグの「アメリンド大語族説」の有力な根拠ともなった (Greenberg 1987: 49ff.)。しかし、人称代名詞のこの形態は、グリーンバーグが主張するように、エスキモー・アリュートとナデネの両語族を除くアメリカ諸語の全域にくまなく分布しているわけでは決してなく、本稿で確認された数詞類別の分布とあたかも重なるごとく、北米ではその太平洋沿岸部からメソアメリカ (ただしオトマング語族を除く)、南米ではアマゾン西部から太平洋側のアンデス地域の諸言語にほぼ限られるようである。またこの代名詞の形態は、これまでアメリカ以外には現れないと見られてきたが、実はユーラシアでも、本稿で焦点となった「太平洋沿岸言語圏」にその対応物が見られるこ

チベット・ビルマ（あるいはシナ・チベット）語族の中で、中国語は、本稿で扱った言語特徴に関する限り、完全に沿岸言語圏のタイプに属しているが、これは中国語という言語が形成された特殊な歴史的要因におそらく負うものである。

マティソフ氏の推定によれば、シナ・チベット語族の共通時代は、今からおよそ6千年前、その原住地はおそらくチベット高原の東部、黄河と揚子江の源流にはさまれたあたりとされる（Matisoff 1991: 470）。そこから一部の集団が黄河沿いに北東進して、今から3千年余りに黄河中流域に定着したのが後の漢民族の始まりと見られている。しかし、黄河流域にはそれ以前からチベット・ビルマ系とは違った言語を話す民族が居住し、高度の農耕文化を発達させていた。中国伝説史上に知られる夏王朝がそれであり、また甲骨文字を残した殷人も先住の民族であったかもしれない（Benedict 1972: 197）。いずれにしても、後の中国語はチベット・ビルマ語がこの先住の言語の上に被さる形で形成されたと見なくてはならない。記録上に現れた中国語が推定される古いチベット・ビルマ語とその言語相を著しく異にしているのは、この先住言語との接触と混合の結果と考えるのが最も自然であろう。

中国語に見られる「孤立語」的性格は、19世紀の言語学者によって人類言語の最も原始的な段階と見なされたが、全くの迷信と言わなければならない。強度の言語接触によって生じる混合言語の典型はピジン・クレオールとされるが、これらの言語に共通して見られる特徴は、文法の全般的な単純化、とりわけ名詞や動詞における形態法の喪失である。また、このような形態法の喪失は、統語法の面ではSVO語順と結びついた中立型Bの格標示 (§3.2) を持った言語タイプの出現と密接に結びついている。すでによく知られているように、世界のピジン、クレオールと呼ばれるほとんどの言語は、SVO型の語順を持っており、しかもその語順は、支配の方向性が一貫していないという意味で、しばしば不整合である。こうして見ると、古い中国語に見られる形態法のほぼ完全な欠如や不整合なSVO語順など⁹¹、チベット・ビルマ語の本来の姿とは著しく異なった言語的様相は、その背後にクレオール化と呼んでもよいようなはげしい言語接触が起こったことを推定させるに十分である。

しかし、中国語はその一方でまた、あたかもヨーロッパ世界におけるラテン語のように、そ

とを言い添えておこう。すなわちその「南方群」では、オーストロアジア諸語の人称代名詞がほぼ全面的に1人称 /n-/、2人称 /m-/ で現れ、また、ミャオ・ヤオ、タイ・カダイ、オーストロネシアの諸言語は、1人称は /k-/ という形を取るけれども、2人称にはほぼ一律に /m-/ が現れる。1人称における /k/ 形と /n/ 形は、アメリカでもかなりの言語で共存し、同じ共存は、「北方群」つまり環日本海諸語のアイヌ語にも現れている（主格 ku~目的格 en）。環日本海諸語では、2人称の形態は言語ごとに大きく異なるけれども、1人称には、日本語以外は全部 /n/ が現れ（朝鮮語 na、ギリヤーク語 n'i、アイヌ語 en）、また日本語では2人称として現れる /na/ も、もとは1人称から転化したものようである。いずれにせよ、太平洋沿岸言語圏の人称代名詞の形態は、上に挙げたユーラシア内陸部のそれと明確な一線を画し、しかもここだけで一つのまとまりを作るかに見える。

なお、Nichols & Peterson 1996 は、1人称 /n/ 2人称 /m/ という形の人称代名詞がアメリカ以外ではニューギニア北部の一部の言語に現れることを指摘して、この代名詞形態の「環太平洋」的な分布を示唆しているが、著者らの数少ないデータでは、ユーラシア沿岸諸言語における代名詞分布の実態が完全に見落とされている。

ともあれ、世界諸言語における人称代名詞の分布は、語族を超えた言語の遠い親族関係と密接に関わり、本稿で提案された「環太平洋言語圏」にとっても重要な意味を担っているように思われる。しかし、諸言語の人称代名詞のシステムは、実は、1、2人称だけでなく、本稿で扱った包括人称も大きく関わっており、それらを含めてこの問題の詳細な検討は、今後の課題として残さなければならない。

91 中国語語順の不整合性とそのクレオールの性格については、Matsumoto 1992: 160f. 参照。

の領域の急速な拡張とそれに伴う強大な影響力によって、その後の沿岸言語圏の歴史の中で絶大な役割を演じたという事実も見逃してはならない。特に、南方群の中心部を特徴づける「単音節型声調言語」という特異な言語タイプ、またそれと結びついた人称無標示や中立型B格標示の拡散は、中国語の存在なしにはおそらく起こり得なかったであろう。さらにまた、朝鮮語と日本語が共有する一連の言語改新も、少なくともその一部（例えば人称標示の喪失や敬語法の発達）は中国語の影響に負っていると見なければならぬのである。

ちなみに、中国語をこのようにチベット・ビルマ語の一形態と古い土着の沿岸型言語との混合語と見る立場は、同時にまた、ミャオ・ヤオ、タイ・カダイ諸語を中国語と同系と見なして「拡大シナ・チベット語族説」を取る立場をはっきりと斥けることを意味する点に留意されたい。中国だけでなく日本の諸学者にもしばしば支持されるこの拡大説は、同系関係に由来する共通特徴と言語接触によって生じた類似特徴を見誤った結果と言わなければならない⁹²。

沿岸言語圏の南方群を構成する四つの語族の一部または全体を一つの大語族にまとめようとする試みは、これまでも見られた。例えば、オーストロアジア諸語とオーストロネシア諸語を包含するドイツの民族学者 W. シュミット師の「オーストリック語族」説 (Schmidt 1926)、ミャオ・ヤオ、タイ・カダイ、オーストロネシアの3語族を同系とするベネディクトの「オーストロ・タイ語族」説 (Benedict 1975)、問題の4語族全体を統括するグリーンバーグの「オーストリック語族」説 (Ruhlen 1987: 153) などがそれである。本稿のこれまでの考察も、筋道こそ違え、これらの諸説とほぼ同じ結論に導かれることは、表 18 によって示した分類からもすでに明らかである。ここでも従来への慣用に従って、沿岸言語圏の南方群を**オーストリック大語族**と呼ぶことにしよう⁹³。

沿岸言語圏の南方群が、その分布域の広さと内包する言語数の多さによってまさに「大語族」の名に値するのに対して、その**北方群**は、少なくとも現状を見る限り、日本海を取り囲むごく狭い地域に分布する四つの孤立的な言語から成るにすぎない。すなわち、ギリヤーク語、アイヌ語、日本語、朝鮮語である。この言語群を本稿では**環日本海諸語**と命名したが、これをオーストリック大語族に対置して、**環日本海大語族**と呼ぶことももちろん可能であり、あるいはその方が適切かもしれない。

環日本海諸語は、太平洋沿岸言語圏の一方を代表する言語群として、(1) 単式流音、(2)

92 最近の日本語系統論の中で、日本語をピジン・クレオール的な一種の混合語と見る説が時折、やや安易な形で、提唱されることがある。しかし、記録に現れた限りの日本語の構造的特徴の中に、ピジン・クレオールの性格を証拠立てるような言語事実を実際に指摘した人は、管見の限り、ほとんどいない。この種の混合説は、論者の主張する同系関係だけでは処理できない余剰部分を説明するための一種の逃げ道にすぎない。実際、上代語以来現代まで生き残っている「カ変」「サ変」と呼ばれるような不規則な動詞活用は、ピジン・クレオール化のプロセスでは、おそらく真っ先に失われるような言語現象である。また一方、日本語の語順は、最古の記録以来、驚くほど首尾一貫した SOV 型で、ピジン化の影響など微塵も見られない。言語接触到に触発された形態法の単純化は、むしろ朝鮮語や琉球方言に見られるあの一律化された動詞活用の中に認められると言ってよいだろう。

93 現在この大語族に属する諸言語が最も多く集中するインドシナ半島からインドネシアに及ぶ地域は、後期旧石器時代、百メートル近い海面の低下によって、「スンダ陸棚」と呼ばれるユーラシア大陸から張り出した広大な亜大陸を形成していた(地図 9:【後期旧石器時代の太平洋沿岸部の地形】参照)。そして当時この地域に居住していたのは、現在のフィリピンやマレー半島の一部に残存するネグリート系、あるいはアンダマン島民

用言型形容詞、(3) 名詞における数カテゴリーの欠如、(4) 名詞類別の欠如、(5) 数詞類別、(6) 重複形態法、という六つの沿岸型特徴を南方のオーストロニック大語族と共有している。しかし、またその一方で、動詞の人称標示、名詞の格標示、包括人称という三つの特徴は、南・北両群を通じて、その内部に大きな言語差を生みだしている。

すなわち、南方群では、その周辺部に多項型人称標示が散在するのに対して（ムンダ諸語、東部インドネシアからマイクロネシアのオーストロネシア諸語、そして周辺部のチベット・ビルマ諸語）、その中心部には、人称無標示および SVO 語順と結びついた中立型 B 格標示が連続した広域分布を作っている。この言語圏はまた、語の単音節性およびそれと不可分に結びついた複雑な声調現象を伴う「単音節型声調言語」と呼ばれる特異な言語タイプによって特徴づけられるが、南方群におけるこの言語タイプの出現は、これまでもしばしば触れてきたように、年代的にそれほど古く遡るものではない。おそらく過去 2000～3000 年の間に、長期間にわたって行われた一種の言語連合現象の産物であり、またそこで果たした中国語の大きな役割については、すでに述べた通りである。

一方環日本海諸語では、北のアイヌ語とギリヤーク語に多項型人称標示、中立型格標示、そして包括人称が現れるのに対して、南の朝鮮語と日本語はいずれも、人称無標示、対格型格標示、そして包括人称の欠如（ただし琉球方言を除く）という特徴を示している。これについてはすでに述べたように、アイヌ語とギリヤーク語に見られる特徴が環日本海諸語（および沿岸言語圏全体）に本来のものであり、朝鮮語と日本語がそれを喪失した結果、現状で見えるような言語差が生じたと考えなければならない。

アイヌ語・ギリヤーク語に対してだけでなく沿岸言語圏全体の中で、朝鮮語と日本語だけを結びつける著しい共通特徴は、すでに挙げられたものの他に、例えば次のような特異な言語現象がある。

(イ) 動詞活用の中に組み込まれた敬語法。例えば、古い日本語で「書ク」に対して「書カス」、「取ル」に対して「取ラース」、朝鮮語で *po-ta*（見る）に対して *po-si-ta*、*ka-ta*（行く）に対して *ka-si-ta* など、失われた人称標示の代償ともいうべき役割を果たしている。敬語法を発達させた沿岸部の言語の中でも、動詞の形態法の中に組み込まれたこのような敬語法は、日本語と朝鮮語を除いてほかには全く例がないと言ってよいだろう。

4 ヤインド南部のウェッジ系住民のおそらく先祖に当たる人々であり、その言語も、本稿で見てきた太平洋沿岸型とは別系統のものだったと思われる。従って、沿岸部南方群の諸言語がこの地域に拡がったのは新石器時代に入ってからであり、その結果、この地域の言語地図はほぼ全面的に塗り替えられることとなった。スンダ亜大陸のこれらの先住民は、ちょうど中央アフリカのピグミー族のように、自らの言語を失って、新来者の言語に吸収されてしまったのである。オーストロネシア諸語が、その本拠地と見られる台湾からこの地域に進出したのは、今からおそらく 5 千年前以後であるが、オーストロアジア諸語の南下はそれよりもっと早かったかもしれない。

いずれにしても、南方群の諸言語の原郷はスンダ陸棚ではなく、おそらく中国南部の太平洋沿岸部にあつて、北方の環日本海諸語にもっと近接していたはずである。一方、スンダ亜大陸の先住民の言語は、沿岸型というよりも、オーストラリア原住民語やニューギニアのパプア系言語に近いタイプだった可能性が高い。オーストラリアとニューギニア島も、後期旧石器時代には、地続きとなつて「サフル」と呼ばれる大陸を形成し、スンダ陸棚のすぐ間近までまで迫っていたのである。

(ロ) 有標な主格標示、すなわち、現代日本語の「ガ」(古代日本語では「イ」)と朝鮮語の *-i/-ka*。このように主格に特別の標識が現れるのは、アメリカの一部の言語(ホカ諸語、湾岸諸語)に見られるけれども、ユーラシアの言語では極めて珍しい。

(ハ) いわゆる「ハ」(*-in/-nin*)と「ガ」(*-i/-ka*)の区別。すなわち、前者は題目提示、後者は主格を標示し、「象ハ鼻ガ長イ」式の“二重主語”と呼ばれる特異な統語法である。二重主語の現象自体は、世界言語の中で決して珍しくないが、題目提示と主格標示という明示的な形式によって両者を区別するのは、極めて異例な現象である。

朝鮮語と日本語だけを結ぶこのような言語特徴は、両言語が極めて近い関係にあったことを証言するに十分であるが、しかし、いずれの特徴も、南方群における単音節型声調言語の発生と同じように、それほど古い時期にまで遡る言語現象ではない。いずれも敬語法や対格型格標示という言語改新の一局面として発達したと見られるからである。従って、これらの現象は、両言語の古い同系関係に根ざすというよりも、その後のある時期に行われた緊密な言語接触の結果と見るべきである。おそらくその時期は、日本列島に稲作とそれに伴う革新的な諸技術がもたらされた縄文末期あるいは弥生時代の開幕以降と見てよいだろう。埴原和郎氏によれば、弥生時代から8世紀までの約1千年間に、朝鮮半島から日本列島への渡来人の数は、120万人以上に達したという(Hanihara 1987)。当時の人口規模からすれば驚くべき数である。これらの渡来人が言語接触の強力な媒体となったことは、当然考えられるところである⁹⁴。

朝鮮語と日本語との間で共有されたこのような一連の言語改新の結果、あたかも内陸言語圏における新・旧二つの言語層の出現と同じように、環日本海域においても、規模ははるかに小さいながら、一方でアイヌ語やギリヤーク語に代表される古い言語層と、他方で朝鮮語・日本語に代表される新しい言語層の違いが生み出されることになった。この新しい言語層の出現は、あたかも内陸部における大規模語族の拡散と同じように、それまで長い間環日本海域を特徴づけていたと思われる小言語の密集状況——おそらく白人到来前の北米のカリフォルニアや北西海岸に匹敵するような状況——を一変させた。結果として、朝鮮半島と日本列島の大部分は、“新石器革命”の波に乗ったこの二つの新興言語によって、完全に覆い尽くされたのである。

これらの言語改新とその拡散の中心は、疑いもなく、朝鮮半島にあった。その地理的条件から見て、言語を含めたあらゆる面で、大陸からの影響を最も直接に受けていたからである。しかし、列島北部に位置していたアイヌ語は、この拡散の大波を辛うじて免れ、環日本海諸語の古相を伝えるこの上もなく貴重な証人となったのである⁹⁵。

いずれにせよ、これまで多くの学者によって主張されてきた日本語とアイヌ語との間の著し

94 これまで日本語と朝鮮語の間で指摘されてきた“共通語彙”とされるものには、数詞、身体名称、親族名称などの基礎語彙ではなく、むしろ農耕関係その他の文化的な語彙が多く含まれているが、これも両言語の緊密な接触を物語っている。例えば、日 *pata*「畑」: 朝 *pat*、日 *nata*「鉦」: 朝 *nat*「鎌」、日 *taku*「栲」: 朝 *tak*、日 *sitoki*「桑」: 朝 *stək*、日 *kasa*「笠」: 朝 *kat*「帽」、日 *kusi*「串」: 朝 *kot*、日 *kusiro*「釧」: 朝 *kosir*、日 *kopori*「郡」: 朝 *kopar*、日 *tera*「寺」: 朝 *čor* 等々。これらは同源語というよりも、この時期に行われた借用語と見るべきであろう。

95 縄文時代中期の日本列島の人口は最大で30万人ほどに達していたとされる。一方、白人到来時のカリフォルニアの人口は約30万で、およそ80ほどの言語が話され(Heizer (ed.) 1978: 80ff., 91ff.)、また同時期の

い言語差とされるものは、言語系統の根本的な違いではなく、同系言語群の内部における言語層の違いに起因すると見なければならない。

* * * * *

最後に、太平洋沿岸言語圏とアメリカ諸語の関係について再度検討を加えて、本稿を締めくくりにしたい。

太平洋沿岸言語圏を特徴づける言語現象の多くが、太平洋を隔てたアメリカ大陸にまで拡がり、文字通り環太平洋的な分布を見せることは、これまでも折に触れて言及してきた。そこからまた当然の成り行きとして、アメリカ大陸への住民の移動がユーラシアのこの部分からなされたという推論が導かれる。しかし、南北アメリカ大陸に見られる言語分布の驚くべき複雑さと言語構成の多様性を勘案すれば、アメリカ原住民のユーラシアからの移動と定住が、一部の論者が主張するように、短い期間に一挙になされたとは考えにくい。仮に視点を北米に絞ってみても、ほぼロッキー山脈を境にして、その東方と西方とでは言語様相のかなり大きな違いが認められる。東方群には、アルゴンキン、イロコイ、スー・カド、そしておそらく湾岸諸語なども含まれるであろう。それに対して西方群に含まれるのは、ワカシュ、セイリッシュの両語族、そして様々な小語族を含むペヌート系およびホカ系の諸言語である。さらにまた、これらの言語圏の北方に分布するナデネ諸語は、東方群、西方群のいずれにも属さない独自の言語圏を作っているように見える。

本稿でのこれまでの考察から導かれる帰結としては、ユーラシアの太平洋沿岸部と最も密接につながるのは、北米の東部諸言語よりも、ロッキー山脈の西側の狭いベルト状地帯に密集する北米西部の諸言語である。実際、北米で数詞類別を持つ言語は、この西方群に限られ、また重複法が名詞・動詞の双方で重要な役割を演じているのも、西方群の諸言語である。そしてこの言語圏は、特に数詞類別の分布をたどっていくと、中米のマヤ諸語、そこからチブチャ諸語などを介して、南米のアマゾン地域へとそのつながりを延ばしているかに見える。しかし、その足跡を丹念にたどって、南米諸語と太平洋沿岸言語圏との関係を正確に見極めるのは、今後の課題として残さなければならない⁹⁶。

アメリカへの住民移動の一つの源が太平洋沿岸部、というよりもむしろ日本海域そのものにあったことを示唆する有力な証拠が、最近の遺伝子系統論の側から提起されている。アメリカのスタンフォード大学の遺伝学者、カヴァリ・スフォルツァによれば、遺伝子によるアジアの五つの主成分 (Principal Components) の中で第3主成分の分布地図は、「これまで予期されなかった」日本海域がアメリカ大陸を含めた周辺地域への遺伝子拡散の中心となっていることを

96 北西海岸では、約20万の住民がおおよそ45の異なる言語を話していた (Suttlies (ed.) 1990: 30ff., 135f.)。両地域とも、土器の使用は見られるが農耕を知らず、経済的にはほぼ日本の縄文時代の段階にあった。これから類推しても、縄文期の日本列島で話されていた言語の数は、少なく見積もっても、おそらく50を下らなかったであろうし、また朝鮮半島も同じような多言語状況に置かれていたに違いない。農耕前の環日本海域と北米の西海岸は、自然環境や生業形態の点でかなり近似していたと想定されるからである。

96 本稿で扱った言語特徴の分布に基づいて南米諸語を分類することは、現状でもある程度可能であり、【別表2】の最右欄に示した3区分はその一つの試案である。

明らかに示している。カヴァリ・スフォルツァは、この拡散の時期は確定できないとしているが、それが縄文時代以前に遡り、しかもアメリカ大陸への移住と結びついていた可能性を示唆している⁹⁷。

今から1万年以上前の後期旧石器時代、日本列島とその周辺は、百メートル近い海面の低下によって、今とは全く違った地形を呈していた。列島はその北方で完全に大陸とつながり、東シナ海も陸地と化して列島の間近に迫り、日本海は今よりはるかに狭い内海の様相を呈していた（**地図9:【後期旧石器時代の太平洋沿岸部の地形】参照**）。

当時の環日本海域は、内陸部の他の地域に比べて気候も温暖であり、陸海共に豊かな自然資源に恵まれ、従ってまた人口密度も他の地域より高かったと推定される。今から1万8千年前とされる沖縄の「港川人」や最近1万4千年前と年代確定された静岡の「浜北人」は、いずれもこの時期の列島居住民の貴重な証人である。日本の縄文文化は、後期旧石器時代のこの伝統を継承したものと思われるが、人類史上最も早く土器の使用が始まったのがほかならぬ日本海域だった点から見て、縄文時代に先立つこの時期の日本海域は、ユーラシアの一つの文化的先進地帯、あるいは少なくとも人口集中地域の一つであった可能性が極めて高い。日本海域からのアメリカ大陸への移住は、単なる空想の産物では決してないのである。

ところで、後期旧石器時代の北アメリカは、およそ1万8千年前をピークとする最終氷期の寒冷期には、現在のカナダから合衆国北部にかけての一带は、厚い氷床に覆われて、人や動物の移動を頑強に阻んでいた。アラスカから内陸を経由して北米中央部への移動が可能になったのは、ようやく最終氷期の末期のおよそ1万2千年前頃、気候の温暖化によって西のコルディエラ氷床と東のローレンタイド氷床の間の“無氷回廊”が開通した後とされる。

しかし、日本海域からのアメリカへの移住は、内陸ではなく、太平洋の沿岸を海岸伝いになされたと考える方がはるかに自然である。当時の日本海域の住民は、内陸の大型動物狩猟民というよりも、むしろ海の幸に頼る漁猟民という性格が強かったはずだからである。またアメリカへの移住の時期は、おそらく最終氷期末よりも早かったであろう。ちなみに、小山修三氏の推定によれば、縄文時代以前の日本列島における人口密度のピークは、2万年前頃にあったとされている（Koyama 1992）。

いずれにせよ、ユーラシアの太平洋沿岸言語圏が北米のやはり太平洋沿岸部と最も強いつながりを示していることは、この地域から北米への移住が海岸沿いになされたと想定することによって最もよく説明できる。一方、北米における西部と中・東部の間の言語上の違いは、この大陸中央部への住民の移住がこのような海岸沿いとは違ったコース、つまり上述の内陸の無氷

97 “The synthetic maps suggest a previously unsuspected center of expansion from the Sea of Japan but cannot indicate dates. This development could be tied to the Jomon period, but one cannot entirely exclude the pre-Jomon period and that it might have been responsible for a migration to Americas.” (Cavalli-Sforza et al. 1993: 253.)

日本海域から遺伝子の拡散が行われたとすれば、その時期は、日本列島が現状のように海に囲まれた縄文時代よりも、大陸と完全に地続きとなっていた最終氷期と考える方がはるかに自然である。

なお、カヴァリ・スフォルツァの分類による第1主成分は、ユーラシアの西にピークを持って東に漸減し、いわゆるコーカソイドとモンゴロイドの違いにほぼ対応し、第2主成分は北のピークから南に下降するもので、モンゴロイドの南北の推移を反映するとされる (*Ibid.*: 248f.)。

回廊を利用した別の集団によってなされた結果生じたものと考えるのが、これまた自然な想定といえよう。この集団はおそらく、日本海域のような沿岸型住民ではなく、大型野生動物を追う内陸型の狩猟民であつたに違いない。従つてその言語は、太平洋沿岸型というより、むしろユーラシア内陸部の古い言語層とつながるような性格を備えていた可能性も十分に考えられる。ちなみに、北米で大型野生動物の狩猟と結びつけられたクローヴィス型石器（紀元前10,000～9,000）とそれに続くフォルサム型石器（紀元前9,000～7,000）は、いずれもロッキー山脈以東の大平原から東部森林地帯およびその南部地域に限られ、太平洋沿岸部からはほとんど出土していないようである。

これまで多くの人々は、“日本語のルーツ”を尋ねて、ひたすらユーラシアの内陸部へと目を向けてきた。日本語の系統論が出口のない袋小路に陥つたまま今日に至つたのも、その当然の帰結と言わなければならない。日本語の歴史は、これまで考えられてきたよりもはるかに遠い過去を、この日本列島自身の中に持っていることに思いを致すべきである。それは「新人」と呼ばれる現代型人類が、列島とその周辺地域に到来した後期旧石器時代まで遡るものであり、その後さらに、1万年に及ぶ縄文時代を通じて、この地域で培われてきた「環日本海諸語」——かつてはおそらく小言語の密集する一つの渾然とした言語圏——が、日本語のまさに母胎となった。もちろんアイヌ語も同様である。

日本海域は、これまで多くの人が信じてきたように、大陸からの様々な人や言語の流れ寄せる単なる吹き溜まりではなかつた。少なくとも後期旧石器時代のある時期、ここはアメリカ大陸への移住の一つの拠点となり、またそれに続く縄文時代は、おそらく当時のユーラシアで最も先進的な土器文化を生みだした。南太平洋地域におけるラピタ式土器の出現より数千年以上前である。

ともあれ、日本語の遠い同系語を列島の外部に探すのであれば、その視線は西方ユーラシアよりもむしろ東南アジア、さらにはまた太平洋のはるか彼方、アメリカ先住民の言語へと向けられなければならない。日本語の母胎となった“環日本海言語圏”は、太平洋を取り囲むそれよりはるかに広大な“環太平洋言語圏”の一部にほかならなかつたからである。いずれにせよ、日本語のルーツの解明は、同時にまた、ユーラシアからアメリカ大陸への人類移住の時期と経路を解き明かす重要な鍵を握っていると見てよいだろう。

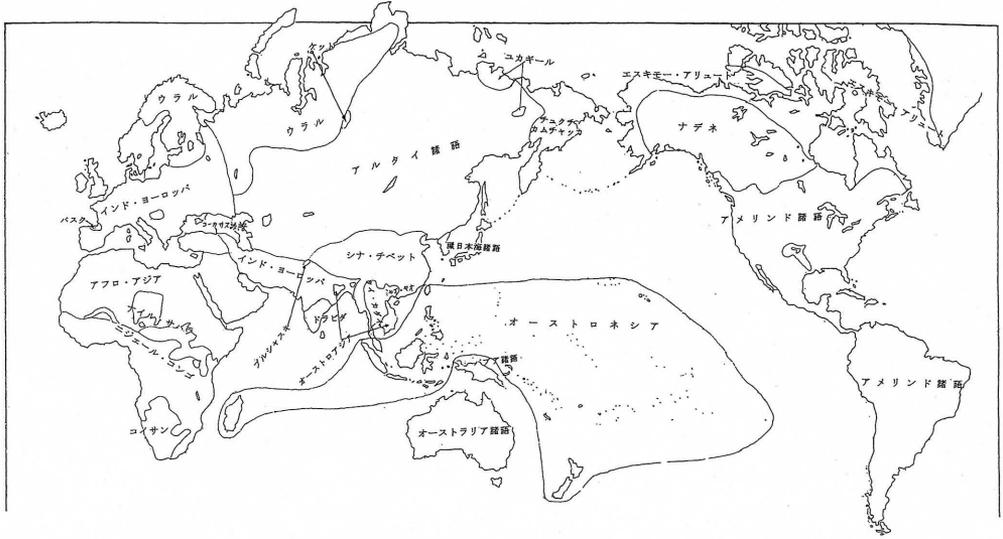
5 付属資料：【別表：1～2】および【地図：0～9】

地域	語族・言語群・孤立言語	流音のタイプ	形容詞のタイプ	数の範疇	名詞類別	数詞類別	動詞の人称標示	名詞の格標示	包含除外	重複	語順のタイプ	言語圏	系統関係			
ア	コイ・サン／中央	欠・単	用言型	+	+	-	多(分離)・無	中立A	+	+	SOV	南部	残存群			
	コイ・サン／南・北	欠・単	用言型	+	+	-	無標示	中立B	±	+	SVO					
フリ	ニジェル・コンゴ／西	単・複	用言型	±	±	-	無・多(分離)	中立B	±	+	SOV/SVO	中部	中央群			
	ニジェル・コンゴ／東・南	単・欠	用言型	+	+	-	多項型(分離)	中立B	-	+	SVO					
カ	ナイル・サハラ	複式	体・用	±	±	-	単(多)	対・中	±	-	SVO/SOV/VSO	北部				
	アフロ・アジアA	複式	体言型	+	+	-	単項型	対格型	±	-	VSO/SOV					
ユーラシア	シュメール語	複式	体言型?	+	+	-	多項型?	能格型	-	+	SOV	ユーラシア	残存群			
	バスク語	複式	体言型	+	-	-	多項型(分離)	能格型	-	-	SOV					
	ケット語(イエニセイ)	複式	用言型?	+	+	-	多項型(分離)	中立A	-	-	SOV					
	ブルシャスキー語	複式	体言型	+	+	-	多項型(分離)	能格型	-	+	SOV					
	北東コーカサス	複式	体言型?	+	+	-	無標示	能格型	+	-	SOV					
	北西コーカサス	複式	用言型	+	±	-	多項型(分離)	中立A	±	-	SOV					
	南コーカサス	複式	体言型	+	-	-	多項型(分離)	能格型	±	-	SOV/SVO					
	アフロ・アジアB(セム)	複式	体言型	+	+	-	単項型	対格型	-	-	VSO/svo					
	ドラヴィダ	複式	体言型	+	+	-	単項型	対格型	+	+	SOV					
	インド・ヨーロッパ	複式	体言型	+	+	-	単項型	対格型	-	-	SOV/SVO/VSO					
シラ	ウラル[ユカギール]	複式	体[用]	+	-	-	単(多)	対格型	-	-	SOV	内陸言語圏	中央群			
	テュルク	複式	体言型	+	-	-	単項型	対格型	-	-	SOV					
	モンゴル	複式	体言型	+	-	-	単項(無)	対格型	+	-	SOV					
	ツングース	複・単	体言型	±	-	-	単項(無)	対格型	+	-	SOV					
	チベット・ビルマ／西	複式	体言型	+	-	±	無・多(一体)	能・中	±	-	SOV					
	チベット・ビルマ／東	単式	用言型	-	-	±	無標示	中立A	±	-	SOV					
	漢語	単式	用言型	-	-	+	無標示	中立B	±	+	SVO					
	タイ・カダイ	単式	用言型	-	-	+	無標示	中立B	+	+	SVO					
	ミヤオ・ヤオ	単式	用言型	-	-	+	無標示	中立B	+	+	SVO					
	オーストロアジア	単・複	用言型	-	-	+	無・多(分離)	中立B	+	+	SVO/SOV					
ア	オーストロネシア	単・複	用言型	-	-	±	無・多(分離)	中对能	+	+	SVO/VSO	太平洋沿岸言語圏	南方群			
	朝鮮語	単式	用言型	-	-	+	無標示	体格型	-	+	SOV					
	日本語	単式	用言型	-	-	+	無標示	体格型	±	+	SOV					
	アイヌ語	単式	用言型	-	-	+	多項型(分離)	中立A	+	+	SOV					
	ギリヤーク語	単式	用言型	-	-	+	多項型?	中立A	+	+	SOV					
	チュクチ・カムチャツカ	単・複	用言型	+	-	-	多項型(一体)	能格型	-	+	SOV					
	エスキモー・アリュート	単式	用言型	+	-	-	多項型(分離)	能格型	-	-	SOV					
	大洋州	パプア諸語	単・欠	用・体	±	±	-	多項型(分離)	能・中	±	±			SOV		
		オーストラリア諸語	複式	体言型	±	±	-	多(分離)・無	能格型	+	+			SOV/svo		

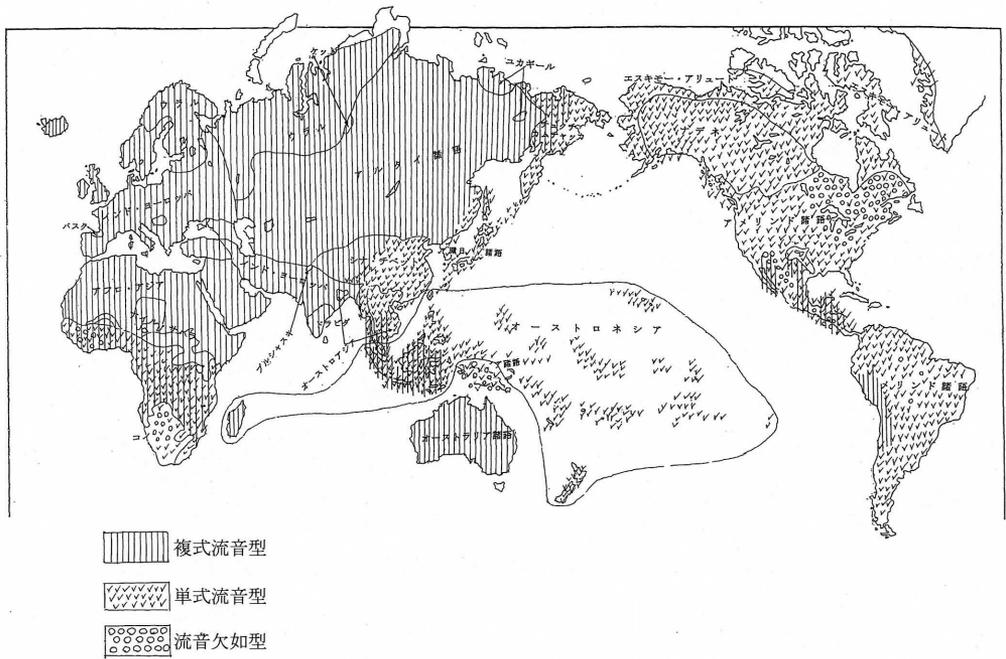
【別表1：類型的特徴の地域・語族的分布：アフリカ・ユーラシア・オセアニア】

地域	主要語族・言語群	流音のタイプ	形容詞のタイプ	数の範疇	名詞類別	数詞類別	動詞の人称標示	名詞の格標示	包含除外	重複	語順のタイプ	言語群
北	エスキモー・アリュート	単式	用言型	+	-	-	多項型(分離)	能格型	-	-	SOV	周辺群
	アサバスカ	単式	用言型	-	-	-	多項型(分離)	中立A	-	-	SOV	
ア	ハイダ・トリンギット	単式	用言型	-	-	+	多項型(分離)	中立A	-	+	SOV	西方群
	ワカシュ	単式	用言型	-	-	+	多項型(分離)	中立A	±	+	VSO	
メ	セイリッシュ	単式	用言型	-	-	+	多項型(分離)	中立A	±	+	VSO	西方群
	ベヌート諸語	単式	用言型	-	-	±	無・多(分離)	対格型	±	+	SOV/SVO	
リ	ホカ諸語	単・複	用言型	-	-	±	無・多(一体)	対・中	±	+	SOV	東・南方群
	アルゴンキン	単・欠	用言型	+	+	-	多項型(一体)	中立A	+	±	SOV/SVO	
カ	イロコイ	単式	用言型	±	±	-	多項型(分離)	中立A	+	-	SOV/SVO	東・南方群
	スー・カド	単式	用言型	-	-	-	多項型(分離)	中立A	±	±	SOV	
カ	マスコギ	単式	用言型	-	-	-	多項型(分離)	対・中	±?	±	SOV	東・南方群
	カイオワ・タノア	単式	用言型	+	+	-	多(一体)・無	対格型	+	+	SOV	
中央	ユート・アステカ/南	単・複	用言型	+	-	±	多項型(分離)	中立A	±	+	SVO/VSO	南北中間領域
	ワベ	単式	用言型	-	-	+	無標示	中立A	+	+	SVO	
ア	トトナック	単式	用言型	-	-	+	多項型(分離)	中立A	+	+	SVO	南北中間領域
	タラスコ	複式	用言型	-	-	+	複式?	中立A	?	+	SOV/SVO	
メ	マヤ	単・複	用言型?	-	-	+	多項型(分離)	中立A	±	+	VOS/VSO	南北中間領域
	ミヘ・ソケ	単・複	用言型	-	-	-	多項型(一体)	能・中	+	+	VSO	
カ	オトマンゲ	欠単複	用言型	-	-	-	無・多(一体)	中立A	+	-	VSO	南北中間領域
	ミスマルパ	複式	用言型	-	-	-	多項型(分離)	対格型	+	?	SOV	
南	チブチャ	単・複	用言型	-	-	±	多(分離)・無	対・中	+	?	SOV	中央群
	ヤノマム	単式	用言型	-	-	+	多(分離)・無	能格型	+	?	SOV	
ア	アラワク	単・複	用・体	±	±	±	多項型(分離)	中立A	±	±	SOV	中央群
	トゥカノ	欠・単	用言型	+	+	+	無標示	対格型	+	-?	SOV	
メ	ボラ・ウィット	単式	用言型	+	+	+	無標示	中立A	+	+	SOV	中央群
	サパロ・ヤワ	単式	用言型	-	-	+	多(分離)・無	対格型	+	-	SOV	
リ	ナンビクワラ	単式	用言型	-	-	+	多項型(分離)	中立A	+	?	SOV	東方群
	パノ・タカナ	単式	用言型?	-	-	-	無標示	能・中	-	-	SOV	
カ	カリブ	単・複	用言型	-	-	-	多項型(一体)	能格型	+	-	SOV/ovs	東方群
	マクロ・ジェー	単式	用言型	-	-	-	多(一体)・無	能格型	+	-?	SOV	
カ	トゥピ・ワラニ	単式	用言型	-	-	-	多項型(一体)	中立A	+	+	SOV	アンデス群
	ケチュア	複式	体言型	+	-	-	多項型(一体)	対格型	+	-	SOV	
カ	ハキ・アイマラ	複式	体言型?	-	-	-	多項型(一体)	対格型?	+	+	SOV	アンデス群
	南アンデス諸語	単・複	用言型	-	-	-	多(一体)・無	中立A	-	?	SOV	

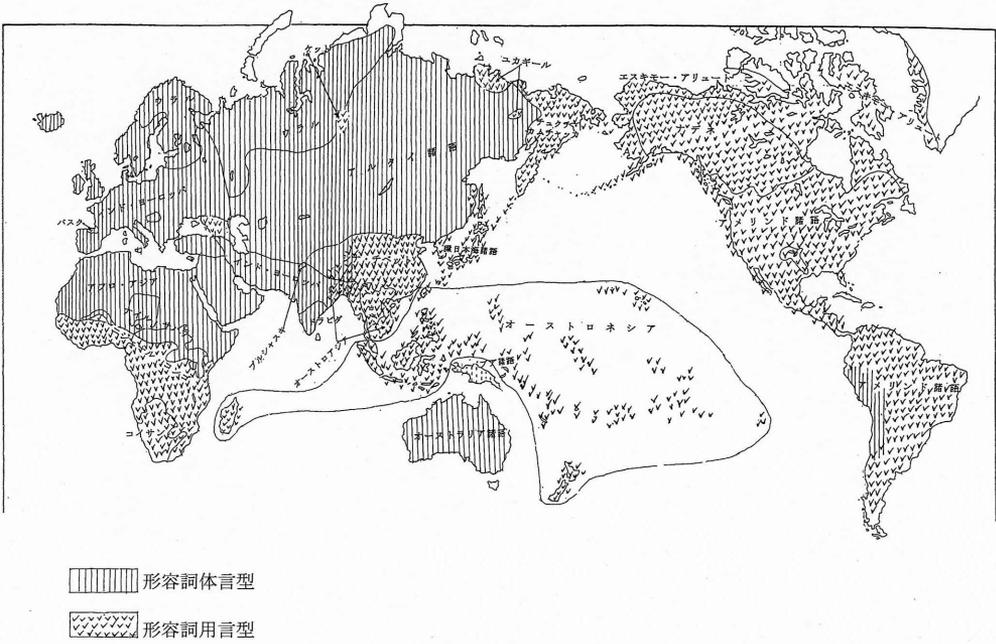
【別表2：類型的特点の地域・語族的分布：アメリカ大陸】



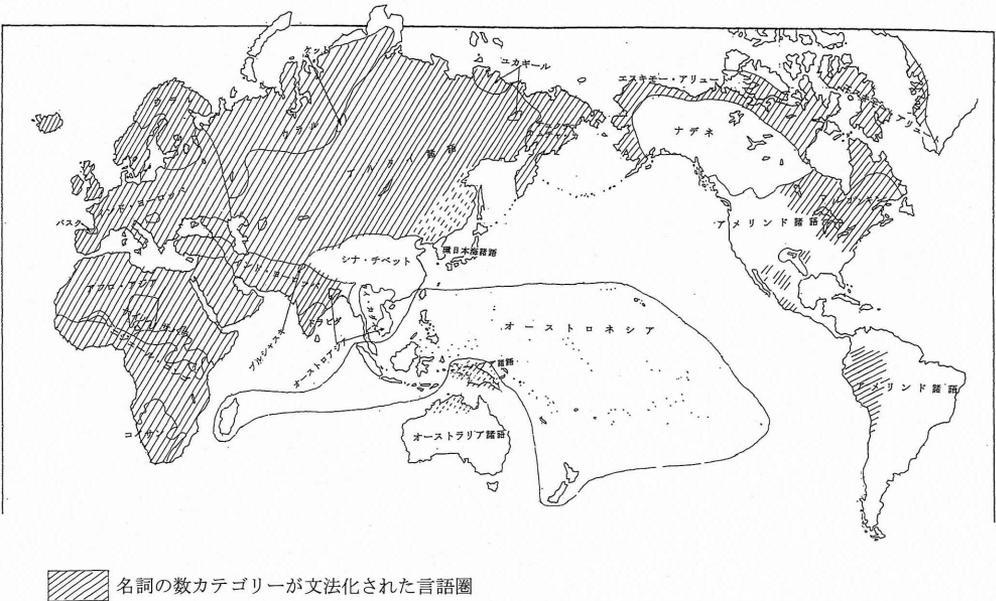
地図0：【世界言語分布図】



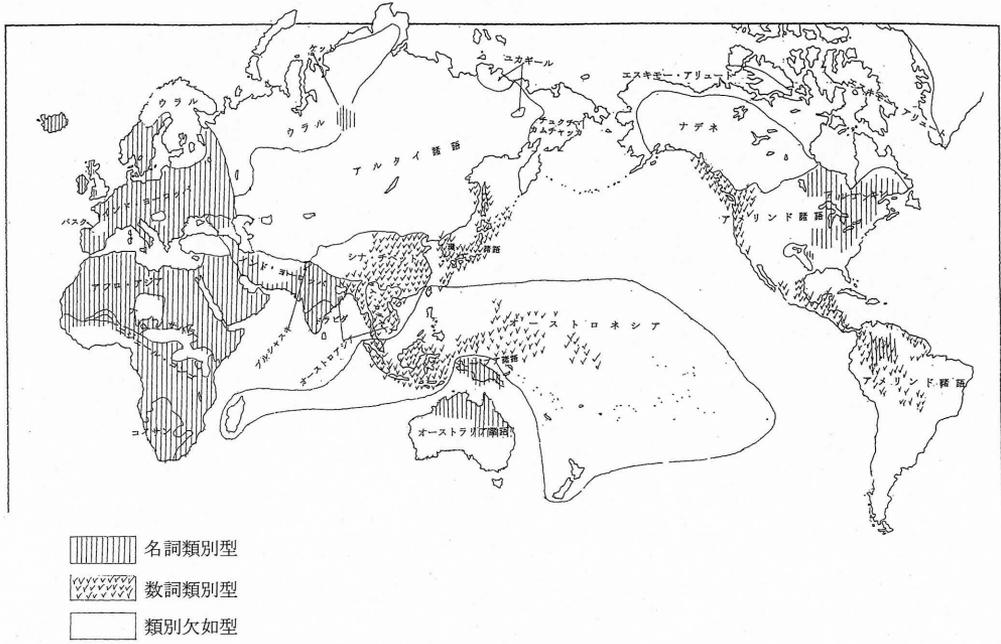
地図1：【流音タイプの分布】



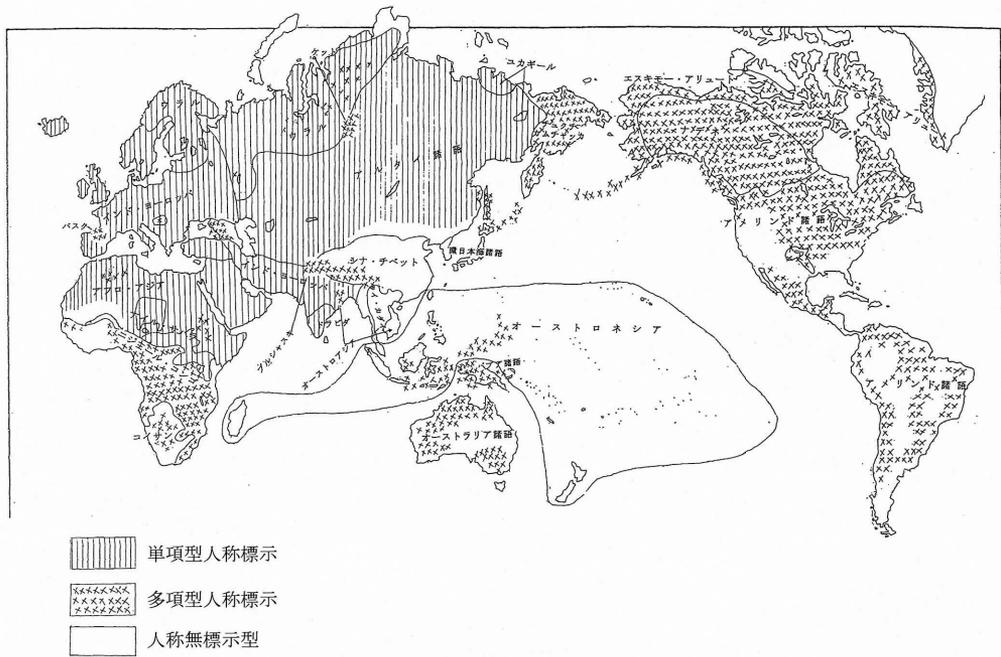
地図2：【形容詞タイプの分布】



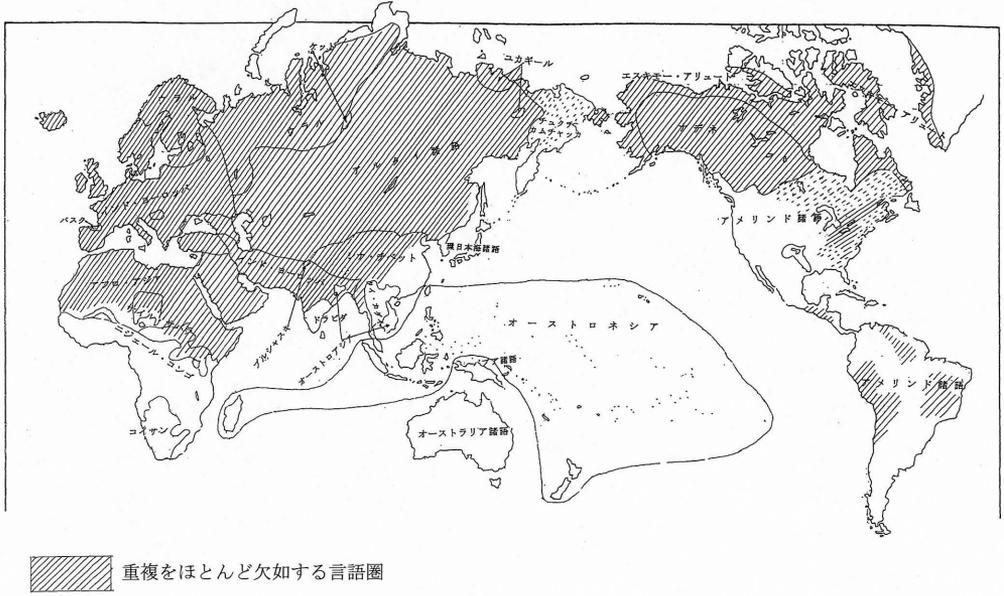
地図3：【名詞の数カテゴリー】



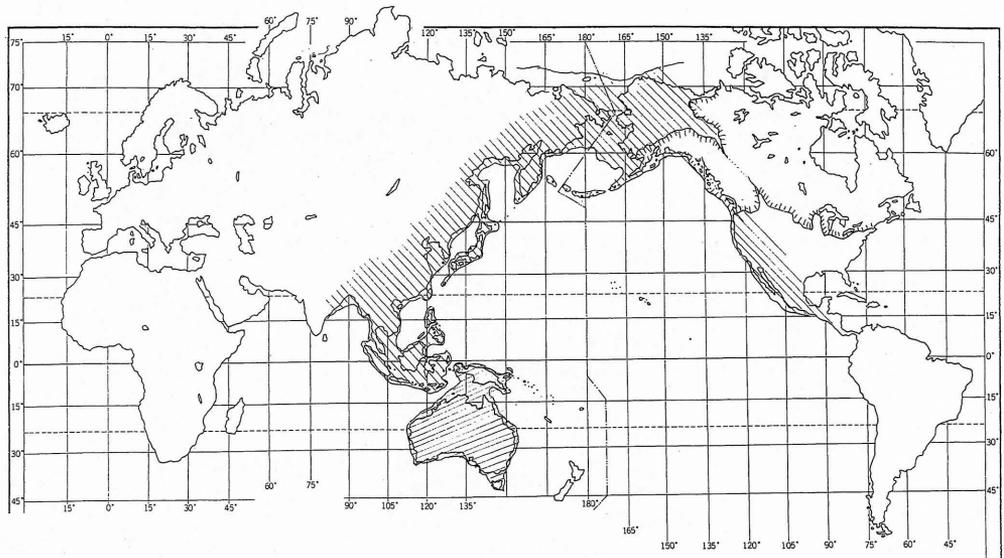
地図4：【名詞の類別タイプの分布】



地図5：【動詞の人稱標示タイプの分布】



地図8：【重複法をほとんど欠如する言語圏】



地図9：【後期旧石器時代の太平洋沿岸部の地形】

引用文献

- Aikhenvald, A.Y. (1994) Classifiers in Tariana, *Anthropological Linguistics* 36: 407-465.
- Aikhenvald, A.Y. & Green, D. (1998) Palikur and the typology of classifiers, *Anthropological Linguistics* 40: 429-480.
- Arnauld, A. et Lancelot, C. (1660) *Grammaire generale et raisonnée*. Paris: Pierre le Petit.
- Aronson, H.L. (ed.) (1994) *Non-Slavic languages of the USSR*. Columbus: Slavica Publishers.
- Austin, P. (1981) *A grammar of Diyari, South Australia*. Cambridge University Press.
- Ayabe, H. (1994) Reduplicated and semi-reduplicated forms in Thai, in Kitamura et al. (eds.): 883-889.
- Barnes, J. (1990) Classifiers in Tuyuca, in Payne (ed.): 273-292.
- Bender, L.M. (1996) *The Nilo-Saharan languages: A comparative essay*. München: Lincom Europa.
- Benedict, P.K. (1972) *Sino-Tibetan: A conspectus*. Cambridge University Press.
- (1975) *Austro-Tai: Language and culture, with a glossary of roots*. New Haven: HRAF Press.
- Berger, H. (1998) *Die Burushaski-Sprache von Hunza und Nager, Teil I: Grammatik*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Berlin, B. (1968) *Tzeltal numeral classifiers: a study in ethnographic semantics*. The Hague: Mouton.
- Bomhard, A.R. (1984), *Toward Proto-Nostratic: a new approach*. Amsterdam: Benjamins.
- Brenner, S. & Hanihara, K. (eds.) (1995) *The origin and past of modern humans as viewed from DNA* (Proceedings of the workshop on the origin and past of Homo sapiens sapiens as viewed from DNA – theoretical approach, Kyoto 14-17 December, 1993, International Institute for Advanced Studies). Singapore: World Scientific.
- Buechel, S.J.E. (1939) *A grammar of Lakota: the language of the Teton Sioux Indians*. South Dakota: Rosebud Educational Society.
- Carlson, R. (1994) *A grammar of Supyire*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Cavalli-Sforza, L.L. (2000) *Genes, peoples, and languages*. New York: North Paint Press.
- Cavalli-Sforza, L.L. et al. (1994) *History and geography of human genes*. Princeton University Press.
- Chafe, W.L. (1996) Sketch of Seneca, an Iroquoian language, in Godard (ed.): 551-579.
- Comrie, B. (ed.) (1987) *The world's major languages*. London: Croom Helm.
- Coon, C.S. (1962) *The origin of races*. New York: Alfred A. Knopf.
- Creider, Ch.A. & Creider, J.T. (1989) *A grammar of Nandi*. Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Davies, J. (1981) *Kobon*. Amsterdam: North-Holland Publishing Co.
- Dayley, J.P. (1985) *Tzutujil grammar*. University of California Press.
- Derbyshire, C.D. & Payne, D.L. (1990) Noun classification systems of Amazonian languages, in Payne (ed.): 243-271.
- Dixon, R. M. W. (1980) *The languages of Australia*. Cambridge University Press.
- (1982) *Where have all the adjectives gone? and other essays in semantics and syntax*. Berlin-New York: Mouton.
- (1997) *The rise and fall of languages*. Cambridge University Press.

- Dixon, R.M.W. & Aikhenvald, A.Y. (eds.) (1999) *The Amazonian languages*. Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W. & Blake, B.J. (eds.) (1979) *Handbook of Australian languages*, vol.1. Amsterdam: John Benjamins.
- Dolgoplosky, A. (1998), *The Nostratic macrofamily and linguistic paleontology*. Cambridge University: McDonald Institute for Archaeological Research.
- Dougherty, J.W.D. (1983) *West Futuna-Aniwa: an introduction to a Polynesian outlier language*. University of California Press.
- Driem, G. van (1987) *A grammar of Limbu*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- (1993) The Proto-Tibeto-Burman verbal agreement system, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 56: 292-334.
- Du Feu, V. (1996) *Rapanui* (Descriptive Grammars). London: Routledge.
- Du Ponceau, P.S. (1838) *Mémoire sur le système grammatical des langues de quelques nations indiennes de l’Amérique du nord*. Paris: La Librairie d’A. Piban de la Forest.
- Durie, M. (1985) *Grammar of Acehnese on the basis of a dialect of North Aceh*. Dordrecht: Foris.
- Dutton, T.E. (1996) *Koiari* (Languages of the World/Material: 10). München: Lincom Europa.
- Dyen, I. et al. (1992) *An Indo-European classification: A lexicostatistical experiment*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- Eades, D. (1979) Gumbaynggir, in Dixon & Blake (eds.): 245-361.
- Ebert, K. (1997) *Camling (Chamling)* (Languages of the World/Material: 103). München: Lincom Europa.
- 遠藤 史 (1993) 『ユカギール語文法概説』北大言語学研究报告 第4号.
- Evans, N.D. (1995) *A grammar of Kayardild*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Foley, W.A. (1986) *The Papuan languages of New Guinea*. Cambridge University Press.
- (1991) *The Yimas language of New Guinea*. California: Stanford University Press.
- Gair, J.W. & Paolillo, J.C. (1997) *Sinhala* (Languages of the World/Material: 34). München: Lincom Europa.
- Georg, S. & Volodin, A.P. (1999) *Die itelmenische Sprache: Grammatik und Texte*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Goddard, I. (ed.) (1996) *Handbook of North American Indians, vol.17: Languages*. Washington: Smithsonian Institution.
- Greenberg, J.H. (1966) *The languages of Africa*. The Hague: Mouton.
- (1987) *Language in the Americas*. Stanford University Press.
- (1988) The first person inclusive dual as an ambiguous category. *Studies in Language* 12: 1-18.
- (2000) *Indo-European and its closest relatives: The Eurasiatic language family Vol.1 Grammar*. Stanford University Press.
- Haas, M.R. (1969) ‘Exclusive’ and ‘inclusive’: a look at early usage, *International Journal of American Linguistics* 35: 1-8.
- Hanihara, K. (1987) Estimation of the number of early migrants to Japan: a simulative study, *Journal of the Anthropological Society of Nippon*. 95-3.
- Hardman, M.J. (2000) *Jaqaru* (Languages of the World/Material: 183). München: Lincom Europa.

- Hardman, M.J. et al. (1988) *Aymara: Compendio de estructura fonológica y gramatical*. La Paz: Instituto de Lengua y Cultura Aymara.
- Harris, A.C. (1991) *The indigenous languages of the Caucasus. vol. 1: The Kartvelian languages*. Delmar, New York: Caravan Books.
- 服部四郎・山本謙吾 (1955) 「満州語の1人称複数代名詞」『言語研究』28: 19-29.
- 橋本萬太郎 (1978) 『言語類型地理論』東京: 弘文堂.
- Heizer, R.F. (ed.) (1978) *Handbook of North American Indians, vol.8: California*. Washington: Smithsonian Institution.
- Himmelmann, N.P. (1996) Person marking and grammatical relations in Sulawesi, *Papers in Austronesian Linguistics*, No.3: 115-136.
- Hohepa, P. (1969) The accusative-to-ergative drift in Polynesian languages, *Journal of the Polynesian Society* 78: 295-329.
- Holton, G. (1999) Categoriality of property words in a switch-adjective language, *Linguistic Typology* 3: 341-360.
- Horai, S. (1995) Origin of Homo Sapiens inferred from the age of the common ancestral human mitochondrial DNA, in Brenner & Hanihara (eds.): 171-188.
- Illich-Svitych, V.M. (1971-1984), *Opyt sravnenija nostraticheskix jazykov*, 1-3. Moskva.
- 上代語辞典編修委員会 (編) (1967) 『時代別国語大辞典: 上代編』東京: 三省堂.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1988-1993) 『言語学大辞典』1-5. 東京: 三省堂.
- Kämpfe, H.-R. & Volodin, A.P. (1995) *Abriss der tschuktschischen Grammatik auf der Basis der Schriftsprache*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 金沢庄三郎 (1910) 『日韓両国語同系論』東京: 三省堂 (= 『論集日本文化の起源 5』(平凡社 (1973): 377-402 所収).
- Kitamura, H. et al.(eds.) (1994) *Current issues in Sino-Tibetan linguistics*. Osaka: The Organizing Committee, The 26th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics.
- 金田一京助 (1927) 「語法上から見たアイヌ」 (= 『金田一京助全集』5: 53-78) 東京: 三省堂.
- (1931) 『アイヌ語学講義』 (= 『金田一京助全集』5: 133-366).
- (1938) 『国語史 系統篇』東京: 刀江書院 (= 『金田一京助全集』1: 311-433)
- Klamer, M. (1998) *A grammar of Kambara*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Koppelman, H. (1933) *Die eurasische Sprachfamilie*. Heidelberg.
- Koyama, Sh. (1992) Prehistoric Japanese population: A subsistence-demographic approach, *Japanese as a member of the Asian and Pacific populations*. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies.
- Köhler, O. (1981) La langue Khoe, in Perrot (ed.): 485-555.
- Lang, A. (1971) *Nouns and classificatory verbs in Enga*. (Pacific Linguistics B 39). Canberra: Australian National University.
- Li, Ch.N. & Thompson, S.A. (1987) Chinese, in Comrie (ed.): 811-833.
- Licht, Daniel A. (1999) *Embera* (Languages of the World/Material: 208). München: Lincom Europa.
- Malla, K.P. (1985) *The Newari language: A working outline*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Masica, C.P. (1991) *The Indo-Aryan languages*. Cambridge University Press.

- Matisoff, J.A. (1982) *The grammar of Lahu*. California University Press.
- (1991) Sino-Tibetan linguistics. *Annual Review of Anthropology* 20.
- 松本克己 (1987) 「日本語の類型論的位置づけ：特に語順の特徴を中心に」『言語』16-7: 42-53.
- (1991) 「主語について」『言語研究』100: 1-41.
- (1993) 「「数」の文法化とその認知的基盤」『言語』22-10: 36-43.
- (1994) 「日本語系統論の見直し——マクロの歴史言語学からの提言」『日本語論』Vol.2-11: 36-51.
- (1996) 「日本語の系統」諏訪春雄・川上湊編『日本人の出現——胎動期の民族と文化』: 135-166. 東京：雄山閣
- (1998a) 「形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」『言語』27-3: 18-25.
- (1998b) 「流音のタイプとその地理的分布——日本語ラ行子音の人類言語史的背景」『一般言語学論叢』1: 1-48.
- (1998c) 「ユーラシアにおける母音調和の二つのタイプ」『言語研究』114: 1-35.
- (2000a) 「日本語の系統と“ウラル・アルタイ説”」『日本エドワード・サピア協会研究年報』14: 1-25
- (2000b) 「世界諸言語の類型地理と言語の遠い親族関係」遠藤光暁編『言語類型地理論シンポジウム論文集』: 96-135 (「中国における言語地理と人文・自然地理7」文部省科学研究費研究成果報告書103.
- (2000c) 「世界諸言語のキョウダイ名——その多様性と普遍性——」『一般言語学論叢』3:1-55.
- (2001) 「日本語の系統：回顧と展望」『言語研究』120: 89-96.
- Matsumoto, K. (1992) Distributions and variations of word order: a typological and areal study, *Kansai Linguistic Society* 12: 155-164.
- McGregor, W. (1994) *Warrwa* (Languages of the World/Material: 89). München: Lincom Europa.
- Merlan, F. (1982) *Mangarayi* (Lingua Descriptive Series). Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- (1994) *A grammar of Wardaman: A language of the Northern Territory of Australia*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Michailovsky, B. (1988) *La langue Hayu*. Paris: Editions du CNRS.
- 宮岡伯人 (編) (1992) 『北の言語：類型と歴史』東京：三省堂.
- 宮良信詳 (1995) 『南琉球八重山石垣方言の文法』東京：くろしお出版.
- Nagano, Y. (1984) *A historical study of rGyarong verb system*. Tokyo: Seishido.
- Nagaraja, K.S. (1999) *Korku language: grammar, texts, and vocabulary*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Nei, M. (1995) The origin of human population: genetic, linguistic, and archaeological data, in Brenner & Hanihara (eds.): 71-91.
- 中本正智 (1981) 『図説琉球語辞典』東京：力富書房金鶏社.
- Ngom, F. (2003) *Wolof*. (Languages of the World/Material: 333). München: Lincom Europa.
- Nichols, J. & Peterson, D.A. (1996) The Amerind personal pronouns, *Language* 72: 337-371.
- Nishi, Y. (1995) A brief survey of the controversy in verb pronominalization in Tibeto-Burman, *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*: 1-16.
- Noonan, M. (1992) *A grammar of Lango*. Berlin: Mouton de Gruyter.

- Norman, J. (1988) *Chinese*. Cambridge University Press.
- Osada, T. (1992) *A reference grammar of Mundari*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Osborne, C.R. (1974) *The Tiwi language*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- 大島 稔 (1992) 「類別詞のタイプ : 北アメリカ北西部を中心として」『宮岡 (編)』: 109-163.
- Panfilov, V.Z. (1962/1965) *Grammatika Nivxskogo Jazyka, cast' 1 i cast' 2*. Moskva-Leningrad: Akademii Nauk.
- Payne, D.L. (ed.) (1990) *Amazonian linguistics: Studies in Lowland American languages*. Austin: University of Texas Press.
- Pedersen, H. (1931) *The discovery of language: linguistic science in the 19th century*. Harvard University Press.
- Perrot, J. (ed.) (1981) *Les langues dans le monde ancien et moderne, I-II: Les langues de l'Afrique subsaharienne, Pidgins et creoles*. Paris: Editions du CNRS.
- Prasithrathsint, A. (2000) Adjectives as verbs in Thai, *Linguistic Typology* 4: 251-271.
- Poppe, N. (1960) *Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen, Teil I, Vergleichende Lautlehre*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Pulleyblank, E.G. (1995) *Outline of classical Chinese grammar*. Vancouver: UBC Press.
- Rabel, L. (1961) *Khasi, a language of Assam*. Louisiana State University Press.
- Ramstedt, G.J. (1952-66) *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft*. 3 Bde. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.
- Reh, M. (1996) *Anywa language: Description and internal reconstruction*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Roberts, J.R. (1987) *Amele*. London: Croom Helm.
- Ruhlen, M. (1987) *A guide to the world's languages*. Stanford University Press.
- Sands, K. (1995) Nominal classification in Australia, *Anthropological Linguistics* 37: 247-346.
- Serdjuchenko, G.P. (ed.) (1979) *Jazyki Azii i Afriki*, III. Moskva: Glavnaja Redakcija Vostochnoj Literatury.
- Sharma, D.D. (1988) *A descriptive grammar of Kinnauri*. Delhi: Mittal Publications.
- Schmidt, K.H. (1994) Class inflection and related categories in the Caucasus, in Aronson (ed.): 185-192.
- Schmidt, W. (1926) *Die Sprachfamilien und Sprachkreise der Erde*. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Sherzer, J. (1976) *An areal-typological study of American Indian languages north of Mexico*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Shopen, T. (1985) *Language typology and syntactic description*, 3 vols. Cambridge University Press.
- Schulze, W. (1997) *Tsakhur* (Languages of the World/Material: 133). München: Lincom Europa.
- Sneddon, J.N. (1996) *Indonesian: A comprehensive grammar*. London: Routledge.
- Sohn, Ho-Min (1975) *Woleaian reference grammar*. Honolulu: University of Hawaii.
- Steever, S.B. (ed.) (1998) *The Dravidian languages*. London: Routledge.
- Suárez, J.A. (1983) *The Mesoamerican Indian Languages*. Cambridge University Press.

- Suttles, W. (ed.) (1990) *Handbook of North American Indians, vol.7: Northwest Coast*. Washington: Smithsonian Institution.
- 高橋盛孝 (1932) 『樺太ギリヤク語』東京：朝日新聞社。
- 武内紹人 (1990): 「チベット語の述部における助動詞の機能とその発達過程」『アジアの諸言語と一般言語学』(崎山・佐藤編) : 6-16.
- 田村すず子 (1971) 「アイヌ語沙流方言の人称代名詞」『言語研究』59: 1-14.
- Tamura, S. (2000) *The Ainu language*. Tokyo: Sanseido.
- Thomsen, M.-L. (1984) *The Sumerian language*. Copenhagen: Akademisk Forlag.
- Tischler, J. (1973) *Glottochronologie und Lexikostatistik*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität.
- Topping, D.M. (1980) *Chamorro reference grammar*. Honolulu: Hawaii University Press.
- Tozzer, A.M. (1921) *A Maya grammar: with bibliography and appraisal of the works noted*. Harvard University: Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology.
- 塚本 勲 (1998) 「日本語と朝鮮語の系統 5」『日本語学』17-11: 71-79.
- van Eijk, J. (1997) *The Lillooet language: Phonology, morphology, syntax*. Vancouver: UBC Press.
- Voßen, R. (1997) *Die Khoe-Sprachen: Ein Beitrag zur Erforschung der Sprachgeschichte Afrikas*. Köln: Rüdiger Köppe.
- Watkins, L.J. (1984) *A grammar of Kiowa*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Wells, S. (2002) *The journey of man: a genetic Odyssey*. Princeton University Press.
- Welmers, W.E. (1973) *African language structures*. University of California Press.
- Werner, H. (1997) *Die ketische Sprache*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Wolfart, H.A. (1996) Sketch of Cree, an Algonquian language, in Goddard (ed.): 390-439.
- Wurm, S.A. & Mühlhäusler, P. (eds.) (1985) *Handbook of Tok Pisin (New Guinea Pidgin)*. Canberra: The Australian National University.
- 山本秀樹 (1998) 「世界諸言語における語順の地理的分布の変遷」『一般言語学論叢』1: 49-72.
- Zuniga, F. (2000) *Mapudungun* (Languages of the World/Material: 376). München: Lincom Europa.

Genetic Relationship of the Japanese Language

— a typological-geographical study —

MATSUMOTO Katsumi

Keywords: linguistic genotypes, circum-Pacific linguistic area, Eurasian Pacific coast languages, circum-Sea-of-Japan languages.

The problem of genetic relationship of the Japanese language cannot be resolved by the traditional comparative method because the time-depth of this relationship seems to go beyond the reach of the usual historical methods. This paper approaches the problem in a quite different way, namely, through the typological geography of the global scale, and tries to place Japanese genetically among the world's languages as a whole.

The main typological features discussed in this paper are as follows:

1. the types of liquid, represented by (a) the *multi-liquid* type which distinguishes between lateral /l/ and rhotic /r/, (b) the *uni-liquid* type which does not distinguish between lateral and rhotic and (c) the *no-liquid* type which lacks liquid as a distinctive phoneme.
2. the types of adjective, represented by the *nouny-adjective* type which places adjectives as a subclass of nouns and the *verby-adjective* type which places adjectives as a subclass of verbs.
3. the types of nominal categories, by which languages are divided into the type with the obligatory *number category* vs. the type without such category and also into the type with the *noun class* or *gender* vs. the type with the *numeral classifier*.
4. the types of verbal person marking, represented by (a) the *monopersonal* type which marks only the subject person on verbs, (b) the *polypersonal* type which marks the object (and other participants) beside the subject person, and (c) the *no-personal* type which lacks the verbal person-marking altogether.
5. the types of nominal case marking, represented by (a) the *accusative* type, (b) the *ergative* type and (c) the *neutral* type.
6. presence or absence of the first person plural *exclusive/inclusive* distinction or, more precisely, the *inclusive (=1+2) person*.
7. presence or absence of the *reduplication* used widely as means of nominal and/or verbal morphology.

These features, in the writer's view, belong to the most fundamental "genotypes" of the human language, so that the languages (or rather language families) sharing the features more numerous may also stand more closely to each other genetically.

Based on the global distributions of each of these features among the world's languages, the languages of Eurasia as a whole can be divided into two major linguistic areas or macro-groups: the *Eurasian inland macro-group* and the *Pacific coastal macro-group*. And the inland macro-group is further divided into three subgroups: (i) the *central innovative group* which comprises Semitic, Indo-European, Uralic, Turkic, Mongolian, Tungusic and Dravidian, (ii) the *residual group* which comprises the Caucasian languages, Sumerian and other isolate languages of Ancient Near East, Basque, Ket and Burushaski, (iii) the *peripheral-transitional group* which comprises Chukchi-Kamchatkan and Eskimo-Aleut on the north and Tibet-Burman on the south.

The languages belonging to the groups (i) and (ii) share such features as the multi-liquid, the nouny-adjectives, the nominal number category, the noun class or gender (except Uralic and Altaic), absence of the reduplication (except Dravidian), and absence of the inclusive person (except Dravidian, Mongolian and Tungusic). The two groups, however, are sharply distinguished one another by the two important features, namely, the monopersonal marking on verbs plus the accusative case marking on nouns which characterize the central innovative group on the one hand and the polypersonal marking plus the ergative case marking which characterize the residual group on the other.

The Pacific coastal macro-group consists of two subgroups: the *Southern* or *Austriac* group or macrofamily, which comprises Miao-Yao, Tai-Kadai, Austroasiatic and Austronesian, and the *Northern* or *Circum-Sea-of-Japan* group or macrofamily, which comprises four linguistic isolates, namely, Gilyak (Nivkh), Ainu, Korean and Japanese. The languages belonging to the Pacific coastal macro-group share such features as the uni-liquid, the verby-adjectives, lack of the nominal number category, the numeral classifier instead of the noun class, and the reduplication, as well as the polypersonal marking plus the neutral case marking and the inclusive person, though the latter features have been lost in some innovative languages.

The above-mentioned peripheral-transitional group, on the other hand, shares the uni-liquid and the verby-adjectives with the coastal macro-group and the

polypersonal marking plus the ergative case marking with the inland residual group.

To conclude, the Japanese language can ultimately be placed genetically among the Circum-Sea-of-Japan linguistic group or macrofamily, which, on the one hand, is closely related to the Austric macrofamily but stands away, on the other, sharply from the Altaic and other inland linguistic groups.

From the more global viewpoint, the Eurasian inland linguistic area extends further into North Africa and, in connection with the Afro-Asiatic and Nilo-Saharan languages, constitutes the “Afro-Eurasian” macro-area, whereas the Pacific coastal area spreads across the former Beringia further into Americas and, in close link, in particular, with the languages of the Pacific coast of North America, seems to constitute what may be called the “Circum-Pacific (or Pacific Rim) macro-area.”

Finally, the writer suggests, the migrants to the Americas (some of them, at least) may have originated from the Sea of Japan in some time of the late Paleolithic period and entered the “New World” through the coastal route along the northern Pacific.